

始



331
B81
⑦



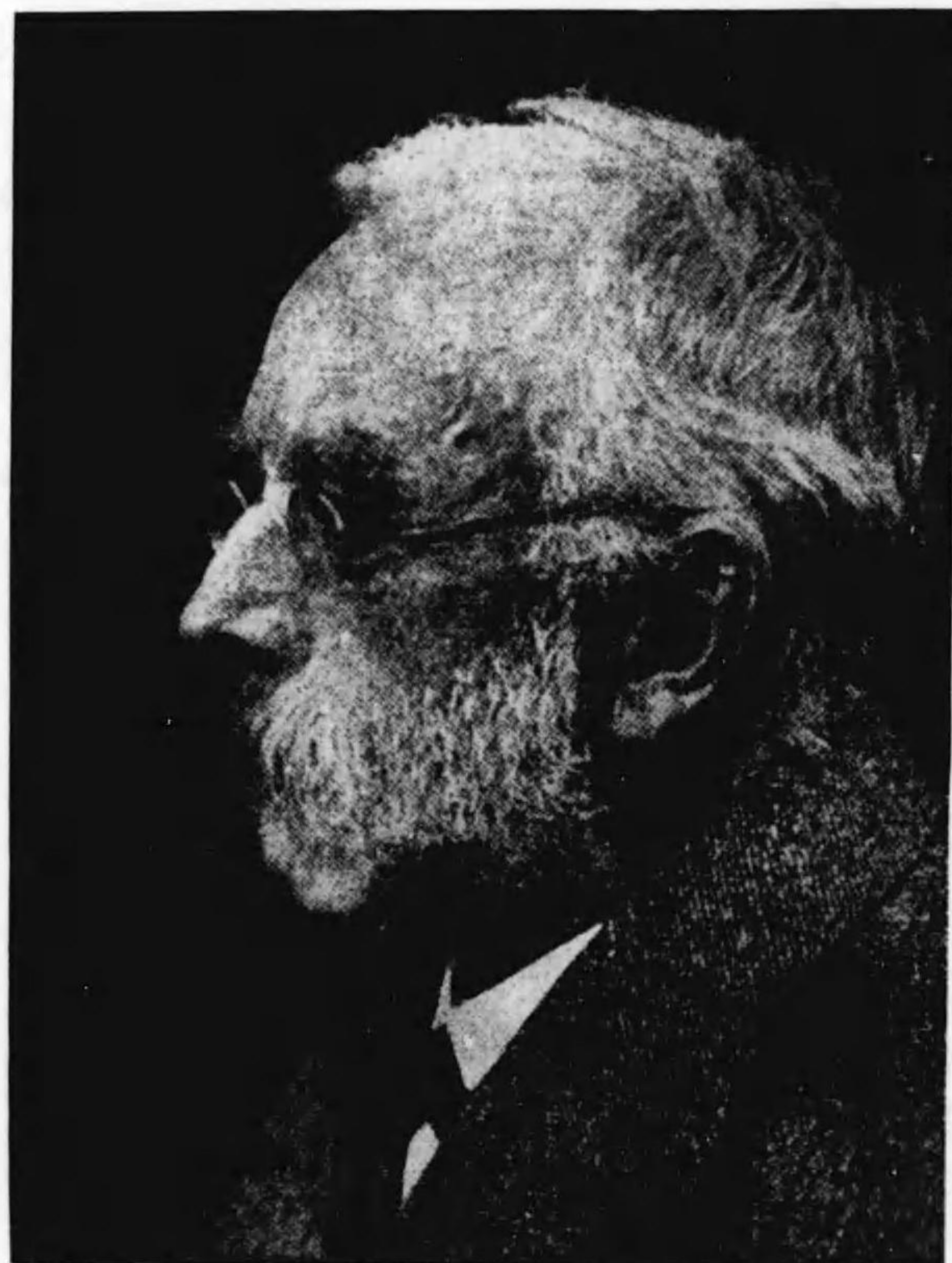
カール・ビュヒアー著
權田保之助譯

増補
改訂

國民經濟の成立

一九二二年 第十六版

東京 第一出版株式會社刊



K. Prichet.

例言

國民經濟は今日再建と革新の時機に際會してゐる。しかしてこの劃期的躍進を完遂せんがためには、の新理念と新目標を明確ならしめると共に、國民經濟的事實並に法則の嚴密なる探求とその歴史的科學的把握とを怠つてはならぬ。この最後の點に關し、獨逸新歴史學派の代表者カール・ビッセル教授の「國民經濟の成立」が重要な古典著作であることは周知知られてゐる。幸ひに、この名著を本所々員權田保之助氏によつて邦譯せられたのであるが、久しく絶版となつてゐて、讀書界の要るふことができぬ状態にあつた。そこで、本研究所は同氏に囑して、原著の新版により舊稿を全部改訂していただき、新しき形においてこれを刊行することとした。けだし本書がすでに推奨せられる「經濟學の入門」「經濟的思考を學ぶべき」案内書としてのみでなく、わが國民經濟の再建といふ緊切なる時局的課題の解決に寄與するところ尠からざるを確信するからである。

大原社會問題研究所



此の肖像の原版は東京帝國大學名譽教授法學博士山崎覺次郎先生の御所蔵にかゝるもので、先生の御厚意により貸與を得たものである。尙ほこれがビュヒアー何歳の時のものであるかは不詳であるが、相當高齡の頃のものであるらしく思はれる。

改題改版改刻に際して

現譯書の原著は、Dr. Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft. Vorträge und Aufsätze. Erste Sammlung. Sechzehnte Auflage, Tübingen 1922 (カール・ビュヒアー博士著「國民經濟の成立——講演論說集第一輯」第十六版、チュービンゲン一九二二年刊)である。

抑々本譯書第一版は原著第九版(チュービンゲン一九一三年刊)に據つたものであり、菊版五百四十九頁の書冊として大正六年十一月に書肆内田老鶴圃から發行されたのであるが、同十年一月に至り型を小さくして四六版五百六十八頁に改め訂正改刻第二版を發行した。然るに大正十二年九月關東大震災火災に遭つて其の紙型は烏有に歸し、遂に再び刊行するの機を得ずにゐたのである。然るに今回、大原社會問題研究所に於てこれを取り上げて、同研究所の研究叢書の一つとして改刻出版することゝなつた。斯くて此れ迄殆んど断念してゐた改稿の筆を呵することゝなり、前掲の如く原著第十六版を礎本として改訂の事を終り、内田老鶴圃の好意ある諒解の下に、第一出版の多大なる犠牲によつて、此處に再び改刻を了し、久し振りに世に出づることゝなつたのである。

本譯書は舊版に於ては、「經濟的文明史論」と云ふ主題を附し、それに割註の意味で「國民經濟の成立」と附記したのである。其の理由は別掲の譯書第一版序の中にも一寸書いてある通りに、當時の私自身が原著に對する立場なり態度なりに據由する所であつたが、又考ふるに、其の時代に於ける我が國思潮界一般の趨向にも其の因があつたことを否む譯には行かない。然かも今日に於ては極めて流暢な一般概念となつてゐる「文化」といふ語が其の當時にあつては尙ほ未だ一般的な通達を見ることが出来ないで、「文明」の語が漸く時代の脚光を浴びて登壇した位であつて、其處に私を

改題改版改刻に際して

此の肖像の原版は東京帝國大學名譽教授法學博士山崎覺次郎先生の御所蔵にかゝるもので、先生の御厚意により貸與を得たものである。尙ほこれがビュヒアー何歳の時のものであるかは不詳であるが、相當高齢の頃のものであるらしく思はれる。

改題改版改刻に際して

現譯書の原著は「Dr. Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft. Vorträge und Aufsätze. Erste Sammlung. Sechzehnte Auflage, Tübingen 1922」(カール・ビュヒアー博士著「國民經濟の成立——講演論說集第一輯」第十六版、チュービンゲン一九二二年刊)である。

抑々本譯書第一版は原著第九版(チュービンゲン一九一三年刊)に據つたものであり、菊版五百四十九頁の書冊として大正六年十一月に書肆内田老鶴圃から發行されたのであるが、同十年一月に至り型を小さくして四六版五百六十八頁に改め訂正改刻第二版を發行した。然るに大正十二年九月關東大震災に遭つて其の紙型は烏有に歸し、遂に再び刊行するの機を得ずに至るのである。然るに今回、大原社會問題研究所に於てこれを取り上げて、同研究所の研究叢書の一つとして改刻出版することゝなつた。斯くて此れ迄殆んど断念してゐた改稿の筆を呵することゝなり、前掲の如く原著第十六版を礎本として改竄の事を終り、内田老鶴圃の好意ある諒解の下に、第一出版の多大なる犠牲によつて、此處に再び改刻を了し、久し振りに世に出づることゝなつたのである。

本譯書は舊版に於ては、「經濟的文明史論」と云ふ主題を附し、それに割註の意味で「國民經濟の成立」と附記したのである。其の理由は別掲の譯書第一版序の中にも一寸書いてある通りに、當時の私自身が原著に對する立場なり態度なりに據由する所であつたが、又考ふるに、其の時代に於ける我が國思潮界一般の趨向にも其の因があつたことを否む譯には行かない。然かも今日に於ては極めて流暢な一般概念となつてゐる「文化」といふ語が其の當時にあつては尙ほ未だ一般的な通達を見ることが出来ないで、「文明」の語が漸く時代の脚光を浴びて登壇した位であつて、其處に私を

改題改版改刻に際して

して「經濟的文明」の名辭を選ばしめるに至つたが、其處にも亦、まぎ／＼と隔世の感を深からしむるものがあると思ふ。然るに其後に於ける我が國社會經濟生活の急轉回と、従つて思想生活の急進展とは遂に「經濟的文明」と云ふが如き概念を清拭し去ると同時に、私をして文化史の考察の一斷面として本原著を見る考へ方を止揚せしむるに至つたのである。斯くして今回此處に改めて其の原著の本題に還つて、「國民經濟の成立」を以て新譯書に冠せしむるに至つたのである。

舊譯は既に述べたるが如く、原著第九版によつたのであるが、今回の改刻に際しては第十六版によつた。原著は版毎に隨所に更改が施されて來たのであるが、殊に其の第三講演の末尾に於て可成りの改訂が加へられてゐることを注意して置き度い。

扱て今回の改刻に當つて舊譯を點檢して行くと、自分自身すら呆然たらざるを得ない程に誤讀拙譯の個所が尠くなかつたのに驚かされ且つ慚愧に堪え得ないものがあつた。又其の文調に至つては、當時の好尚に善惡兩方面に於て相應じてゐたものがあり、流石に年代の隔りを痛切に感ぜしめるものがあつた。仍て誤譯の個所に對して十分なる斧正を加ふると共に、文調も成るべく今日のそれに近からしめるやうに書き改めることに努めた。然しながら尙ほ全編に涉つて舊い調子が貫いてゐることは如何ともしやうがない。大方の寛恕を乞ふ次第である。殊に譯書第一版の序文を其のまゝに掲げさせて戴いた事には、衷心甚だ忤怩たるものがあるはれども、せめて此れだけは若き日の私を想ひ出すよすがとして、此の私に許してほしいと思ふ。

願れば、蟬時雨する眞夏の一日、畏友榊田君に伴はれ、本書舊譯の譯稿を携へて、當時千駄ヶ谷にあつた福田博士の邸を訪ねた時、博士は早速譯稿を點檢され、即座に疑點を指摘されて、且つ直ちに博士が原著者ビュヒアーより直接貰ひ受けてゐられた該書邦譯出版の權を私に快諾されたのは大正五年の事であつて、已に二十七年の昔となつてしまつた。爾來時を経ること實に四半世紀、博士逝かれて已に十三年、榊田君また亡くして早や九年を経た。今此處に改めて拙譯を上梓するに當つて、感慨の甚だ切なるものがある。

終りに臨んで、拙譯を取り上げてこれを研究叢書の中に加へられた大原社會問題研究所の好意に對し、又大原社會問題研究所の出版物として此の新譯を世に送ることに就き快く諒解を與へられた舊譯の發行所内田老鶴圃の厚志に對し、更らに第一出版の社長柴田確也氏並びに永田周作氏が本書の刊行に就きて與へられた多大の助力に對し此處に深甚の謝意を表し度い。殊に此の改譯の仕事とその刊行とに就いて終始御懇篤な御指導と御援助とを垂れ賜はつた高野岩三郎先生と、ビュヒアーの人格と學風とを知るべき興趣深き數々の資料を貸與され更らに御愛藏の彼の肖像の複寫を許し賜はつた山崎覺次郎先生とに對しては、心よりの御禮を申述べることを許して戴き度いと思ふ。

昭和十七年九月

譯者識

譯書第一版序

私が學生時代に最も愛讀した書が二つあつた。其の一は Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft (カール・ブーハー著「國民經濟の成立」)で、他の一は Heinrich Wautzig, Wirtschaft und Kunst (ウエンティグ著「經濟と藝術」)であつた。此の二箇の經濟學者の好著は遂に私をして『價値の藝術的研究』といふ卒業論文を草せしむるに至り、美術工藝論に私の研究の歸結を發見せしむるに至つたのである。私がビュヒャーの該書を翻譯しようと思ひ立つたのは已にその時代からであつた。然かし翻譯といふ事業は到底容易な業でない。然るを況んや、自分の専門とは縁の遠いとせられてゐる學科に關する書であるといふに於ておや。親友の一人は「世に出さない方が君の爲めに好い」とまで苦諫して呉れた。幾度か筆を擲つて斷念しようとしたか解らなかつた。けれどもそれを全く放棄して仕舞ふには、その書は私に取つて餘りに縁が深すぎた。私は敢然として稿を續けた。完成！ されど願れば、意に満たぬ節の餘りに多くして、徒らに悔を覺ゆるばかりである。

原著は題して「國民經濟の成立」といふ。然かしこの題號は著者が已にその序文にのべてゐる如くに書中第三の講演の標題を其の儘に取り來つたものである。著者はこの理由を此の講が本書の根本思想を最も直截に表はしめるが故であると云つて居る。けれども此の書は同じく原著者の序文にあるが如く、版を重ねるに伴れて五講までも増してゐる。根本思想には毫末の變化はないにしても、其の形式には變化が生じて居る。而已ならず經濟學の文獻に素人なる人々にとつては「國民經濟の成立」てふ名は本書全體の概念を把握するに少々不便の感がある。茲に於て私は「經濟的文明史論」といふ原書の何處の頁にも表はされて居ない全然別の名を以て之に冠することにした。蓋しビュヒャーの意、經濟的文

明の側面を抽出し來つて、以て人類進化の史跡を整理せんとする史論を草せんとするにあつたのであると忖度し得らるるが故である。

六

ビュヒアーや、その思考の極めて犀利にして、その着眼の警、凡を抜くものがある。其の趣味の廣きこと、彼が名著 *Arbeit und Rhythmus* (勞働と律動) は音楽科學の研究者が到底閑却し得べからざるマリテラトゥールとなりぬるにても知り得べく、本書に於ける人類學的材料の巧妙なる取扱ひ方によりても尙且つ推し得るのである。また彼の文に至つては、その論陣の堂々、その行文の流達、洛陽の大道を銀鞍白馬を驅るの概がある。

今や我が國は空前の時代に遭遇して曠古の經濟的躍進時代に入つた。資本主義の大濤は隨所に激して奔流を走らせ飛沫を吹いてゐる。國民生活は此處に著しき變調を呈すべく、國民文明は今や新らしき段階を攀ぢんとしてゐる。しかも歩を駐めて頭を回らせば、舊き生活の表現と舊き文明の現象との到る所に横はつて、或は新しきものを蔑如し、或は新しものと拮抗し、或は新しきものの前に減じんとしてゐる。然り、現代の日本は新しものと舊きものとの相隣する國である。手工業者問題—勞働者問題、都市問題—地方問題、婦人問題—兒童問題、美術工藝問題、ジャーナリズムの問題、殖民問題、住居問題：…新しきと舊きと、問題の渦を捲いて、人をして呆然たらしむるものがある。此の時に方つて、悠々三千載を貫く經濟的文明の開展に徹し、遼々幾萬里を跨る人類が經濟的進化の段階を斷じたる思想を背景として、此の時代に對し現代の問題を取扱ふ時んば、吾人は始めて惑なき確信と力ある遠見とを期待し得るのである。私が特に本書を譯出するに至つた所以の大なる原因は茲に存するのであつた。

本書の翻譯に關しては法學博士福田徳三先生並びに親友なる法學士榊田民藏兄に多くを感謝しなくてはならぬことがある。しかし經濟學とは可なりに縁の遠い私の仕事である。兩氏の好意に酬ゆるべく、其の結果の餘りに蕪雜なのに轉

轉慚愧に堪え得ぬものがある。足らぬ所も少くなく、無くもがなの點も多いであらう。夫等は何れ版を改める時に…

大正六年九月

譯者識

原著序

第一版より第十五版に至る序

(一八九三年—一九一九年)

本巻の講演及び論説は、種々の機會に、其の多くの場合は主として専門家より成れるに非ざる範圍に向つて行つたものから成つてゐる。従つて其等が一著書の章として讀まれんことは著者の本意に非ず。各篇何れも獨立し居れるものにして、同一行想の、假令その觀察の側面を異にするものありとはいへ、時に幾度か各所に繰返し現はれ來るものが無いではない。

然りと雖も、各篇は其の對象と研究方法とに於て内面的に相互關し補綴の關係に立つものなるは讀者の直ちに解し給ふ所であらう。凡べてを貫く根本思想は第三の講演に述べ盡されてゐるが故に、此の標題を取つて、以て全卷に冠せしめ得たのである。尤も該第三講演は、それが當時講じられた其の簡約な形式のまゝでは本書に刊載されてゐないことは特に述べる要はないと思ふのであるが、該講演が此の加筆によつてその精確性と材料の豊富さとに利し得つゝも、尙ほその概観性に於て失ふ所なからん事を切望せざるを得ない。

總べての諸篇を支配してゐるものは、經濟史的發展の合法的經過を統一的に把握せんとする意向と事實に基ける材料を同一様の研究方法もて取扱はんとする企圖とである。此の兩方向に於て、余が與ふる所のは、余が大學に於て講義を開始せし以來試み來りて、然かも研究を繼續し來るや、余の心底にいよいよ確乎たる根柢を植ゑ行き、余が期待

せる如く漸く明微され来りしものに外ならないのである。然かも今茲にそれを公表するに當つては、余は以前の余の聴講者より幾度か陳べられたる希望に添うて、目下余に許され得て、然かも余自身すら其の不十分さを最も激しく感じつゝある形式を取ることゝなつたのである。

第二版より第十五版に至る改訂に當つては、余に豫め一個の考が確立してゐた。それは即ち全體を従來主として取扱ひ來りたる方向に完成し行かざるべからずといふそれである。余は當時本書が世の科學問題取扱ひの方法の上に影響を及ぼし得んことを私かに希望してゐたのであつた。而して實際に於ても、近年出版されし少壯著者（尤も中には本書を全然知り居ざるが如く見ゆる人々もあるが）の手に成りし多數の著書の中に、本書が此處に公表してゐる諸研究の結果を収録せるものゝ少なくないのに接するのであるが、これに依つて余が文獻中に導入した概念及び術語が恰かも古來使ひ慣されし學問的家財道具のやうに利用されてゐることに依つても外面的に認めさせてゐると云ふ事を推し得るのである。依つて知る、本小著また大學の學說の上に多少の影響あらざる無かりしことを。

然しながら本書が主として學者殊に研究者の範圍に弘まり行きて、研究者よりは一種の經濟學入門書として、また畏敬する一同僚の評したるが如く、「經濟的思考の方法を學ぶべき」手引草として利用せられ居るを知るに及びて、余は本書の新訂に際して此の要求に特に顧慮せざるべからざるを感じたのである。斯くの如くにして余は最近の數版に於ては、講演及び論說の一部を簡潔ならしめ、又は必要な場合には増補を行ひ、或は贅餘を削除し、註には根本的な制限を加へたのである。

新たに五篇を加へた（現在の二、五、七及び一〇）。第一篇は經濟未生時代を取扱へるものにして、謂はゞ第三講演に於て展開せらるゝ段階組織の基底を與へんとする任務を有するものである。而して其の根本思想は一八八五年已に

余がバーゼル大學に於て社會史の起源に關する講義を爲せる時に、立案したものであつて、其の當時余にはこれを公表する意志なかりしが爲めに、余のノートには其の材料出所の指示を缺いてゐた。故に新訂に際しては更らに廣きに涉つて人種學的原資料を蒐集し且つ多くの改更を加へた。然しながら多數のものが尙ほ最初の時の取扱のまゝに利用されて残つてゐるのであつて、従つて此處に其の材料の創提者に對し、其の名を稱して感謝の意を表し得ざるものあるを憾とする。斯くて此の研究を以て經濟學的文獻に於て未だ曾て開拓されるざりし範圍に足を踏み入れたる余は、此處に次の進んでの收穫を得んと試みて、遂に第二講演を成すに至つたのである。

第五講演は其の内容の大部分に於て、又その形式に於ても亦多く、余がキョムンに於ける社會政策學會大會の席上、手工業者問題に關して行ひたる報告に據つたものである。これを本書に編入したる所以のもの、讀者をして少くも或る點に於て、近世國民經濟の地盤の上に遂行せられたる此の大運動に一瞥を投ぜしめんと希望にあつたものと思はれる。第七篇は余が多量の研鑽を経し勞働の學說中の一章を幾多の推敲の餘、初めて聴講者に講義したる形態もて廣き範圍の人々の前に供せんと一個の試みなのである。之に反して第十篇はそれに續く二講演を世界史的にして一層廣汎なる關係に齎らんとするものなのである。

全篇のテキストは嚴密なる校訂を経、關係の文獻は増補した。然かも完璧を期するは、尙ほ以て未だしである。幾度か爲さんと企てたる批評又は辯護は遂に斷念することゝしたのである。

第十六版序

一九一七年七月第十版の發行以降は比較的大きな變更をなさねばならなかつたのは極めて僅かの箇所にすぎなかつ

た。當時豫告した本講演論説集の第二輯は其の後に出版されて、今日では六版を重ね得ることゝなつた。余は多年各所で發表し又は聴講者の爲めにだけ書き下ろした専門的な事項一切を該輯に収録した。此のやうな譯で全篇十六個を収めたのであり、其の全容積は本書を凌駕してゐる。渾一したる體系を與へようとする意圖は今回も亦私には無かつたことは特に述べる要はないと思ふ。そして本書で示されてゐる見解がどんなに多くの範圍に於て有效であるかゞ證明されたといふ事を示しただけで十分だと思ふのである。

本輯のテキストは此の版の爲めに改めて目が通され、必要の箇所は現在の状態まで論述するやうにした。之に反して統計的記述は新しい調査がヨリ好適なものを提供してゐない限り變更させはしなかつた。

一九二二年二月一日 ライプチヒにて

カール・ビュヒアー

著者紹介

著者カール・ビュヒアー¹⁾は一八四七年二月十六日ドイツ聯邦の一小邦ヘッセン・ナッサウのウイスバーデン縣²⁾のキルベルク³⁾に生れた。ボン及びゲッティンゲンの大學で、歴史、哲學及び國家學を修め、卒業後は相當久しい間ギムナジウムの教師を勤めてゐたが、一八七八年、年三十二歳にしてフランクフルテル・ツァイトウング社⁴⁾に入り、經濟政策及び社會政策の編輯員として活躍すると同時に、實際社會の問題に當面して具體的現實的な知識を攝取すると共に、新聞業に對する深い關心を懷くやうになつた。

記者たること四年にして一八八一年招かれてミュンヒェン⁵⁾大學の經濟學及び統計學の講師となつたが、翌一八八二年にはドルバート大學⁶⁾の教授となり、更らに翌八三年にはバーゼル大學⁷⁾の教授に轉じ一八九〇年まで此の地にとゞまつてゐた。そして一八九〇—九二年のカルスルー⁸⁾エの工業大學の教授を経て、一八九二年ライプチヒ大學⁹⁾の經濟學の正教授となつた。此の間、經濟學、統計學、新聞學等を講じたのである。

ライプチヒ大學の講壇に立つこと前後實に二十六年、其の豊富なる學殖と其の敦厚なる人格とは學生敬愛的となつたが、一九一七年、齡七十一歳にして大學の教職から退いて後は、同大學の中に彼によつて創設された「新聞學研究所」に於て、新聞業の研究に専念し、其の餘生をこれに捧げたのである。斯くて一九三〇年十一月十二日八十四歳の高齡を以てライプチヒに逝いた。

彼は最新歴史學派の最も主なる代表者であつて、同じ歴史學派にしても其の經濟學の方法論に於て同學派の巨頭シュモラー¹¹⁾とは少しく其の趣を異にするものがある。即ちシュモラーが歸納と演繹との兩方法を併用しながらも、歸納法に

1) Karl Bücher 2) Regierungsbezirk Wiesbaden in Hessen-Nassau
3) Kirberg 4) Frankfurter Zeitung 5) München 6) Dorpat 7) Basel
8) Karlsruhe 9) Leipzig 10) Institut für Zeitungskunde
11) G. Schmoller

其の重點を置いてゐるのに對して、ビュヒアーは歴史的歸納的方法と共に、寧ろ理論的演繹的方法を重視してゐるのである。而して彼の業績の最も大なるもの、一つは歐洲の經濟生活の發達史を解明したことであつて、其の經濟發展段階説はそれ以前のフリードリッヒ・リスト¹⁾及びブルーノー・ヒルデブランド²⁾の段階説の不徹底を乗り越えて、經濟史の解釋に於いて斷然重大なる地歩を占むることとなり、今日に於ても尙ほ其の基準となつてゐる。これと相併んで輝やかしい業績の他の一つは産業經營形態の發展史的研究である。而して尙ほ其の他に、新聞業の經濟史的研究は又忘るべからざる功績と云はなくてはならぬ。

彼には多數の著作がある。今、其の中の主なものを擧げて見やう。

- 一、紀元前一四三—一二九九年に於ける不自由労働者の暴動 (Die Aufstände der unfreien Arbeiter 143—129 v. Chr. Frankfurt a. M. 1874.)
- 一、ラッレー著「原始所有權」〔獨逸版〕(Das Urigentum von E. de Laveleye, Leipzig 1879.)——此の中、第六、第九、第十四及び第十五章は編者ビュヒアーの創作なり。
- 一、中世の婦人問題 (Die Frauenfrage im Mittelalter, Tübingen 1882.)
- 一、十四五世紀に於けるフランクフルト・アム・マインの人口 (Die Bevölkerung von Frankfurt a. M. im 14. und 15. Jahrhundert, Tübingen 1886.)
- 一、國際工場制工業立法史論 (Zur Geschichte der internationalen Fabrikgesetzgebung, Wien 1888.)
- 一、十六世紀より十九世紀に至るフランクフルト製本業者規定 (Frankfurter Buchbinder-Ordnungen vom 16. bis zum 19. Jahrhundert, Tübingen 1888.)

1) Friedrich List 2) Bruno Hildebrand

- 一、財政局刊、一八七八年乃至一八八七年のバーゼル邦收入及び租税分配 (Basels Staatseinnahmen und Steuerverteilung 1878—87, publiziert vom Finanzdepartement, Basel 1888.)
- 一、一八八八年十二月一日現在バーゼル・シュタット州の人口 (Die Bevölkerung des Kantons Basel-Stadt am 1./XII. 1888, Basel 1890.)
- 一、國民經濟の成立——講演六篇 (Die Entstehung der Volkswirtschaft. Sechs Vorträge, Tübingen 1898.)
- 一、國民經濟の成立——講演論説集第一輯 (Die Entstehung der Volkswirtschaft. Vorträge und Aufsätze. I. Sammlung, Tübingen 1912.)
- 一、同上 第二輯 („ „ 2. Sammlung, Tübingen 1912.)
- 一、労働と律動 (Arbeit und Rhythmus, Leipzig 1896.)
- 一、現在及び過去の大都市 (Die Grossstädte in Gegenwart und Vergangenheit, Dresden 1902. (im Jahrbuch der Gehe-Stiftung, 9. Jahrg.))
- 一、ユイッ書籍業と科學 (Der deutsche Buchhandel und die Wissenschaft, Leipzig 1903.)
- 一、シエック著「社會學提要」(マホウター編) (Abriss der Soziologie von A. Schaffler, hrsg. von K. Bücher, Tübingen 1906.)
- 一、新聞業 (Das Zeitungswesen—in „Kultur der Gegenwart, Teil I“, Leipzig 1906.)
- 一、社會化 (Die Sozialisierung, Tübingen 1919.)
- 一、經濟史論考 (Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte, Tübingen 1922.)

尙ほ原書第一版が初めて世に出でし當時(一八九三年)ベルリンに在り、ワグナーを通してビヒアの學風を知つて、これに私淑され、其の翌年ライプチヒに赴いて彼のゼミナールに参加し、親しく彼の指導を受けられた山崎覺次郎先生の彼に就いての想ひ出を承れば、當時四十八歳であつた彼は六尺豊かな堂々たる體軀の持主であつたが、極めて濃厚篤實な學者であり、懇切丁寧な人格者であつて、其の講義は華やかなといふものではなかつたが、決して濫晦な所はなく、丁度彼の文章のそのやうに明快なものであつた。そして特に熱中する程の趣味や嗜好は持たなかつた譯であつて、後進の指導誘掖を唯一の楽しみとしてゐる風があつたとの事である。

目次

改題改版改刻に際して

譯書第一版序

原著序

著者紹介

一、經濟原始の状態……………一

二、自然人の經濟……………四三

三、國民經濟の成立……………八九

1. 家内經濟……………九七

2. 都市經濟……………一二〇

3. 國民經濟……………一四〇

目次

4. 三段階の比較	二
四、工業經營式の史的發展	一六五
五、手工業の没落	二〇三
六、新聞業の起源	二三五
七、聯力と共力	二六九
1. 聯力	二八〇
2. 共力	二八九
八、分勞	三一
九、労働組織と社會階級構成	三四三
一〇、五千年來の大都會様式	三七三
一一、中世都市の社會組織	四〇五

一二、進化史的意義より見たる國內移住と都市制度	四四一
-------------------------	-----

索引
譯語對照表

一 經濟原始の狀態

經濟の科學的考察の一切は、人間には他の生物に存せざる「經濟的性質」¹⁾の固有するものなりてふ假定より出發して居る。而して此の經濟的性質より、欲望の満足を目的とする人間一切の行爲を支配する一原則、即ち經濟性の本則(經濟原則)なるものを發祥せしめてゐる。此の原則に曰く、人間は時の古今を問はず、地の東西を論せず、出來得る限りの最小の犠牲(勞働)を以て最高の満足を得んと力むるものである(最小手段の原則)、と。

此の本則に従へば、あらゆる經濟行爲は、目的を意識し價值判斷によつて指導せらるゝ行爲なりてふことを假定するものである。經濟とても其の最終動因を探り行かば、それは人間の本能生活(自己保存及び利己の本能)に歸して仕舞ふことが出来るかも知れぬ。さりながら此の本能の満足とても、多數の繼續する心的作用によつてのみ常に行はるゝものである。即ち人間は己が感ずる欲望を満足せしめざることより生ずべき不愉快の大きさを計量し、次に其の欲望の満足に必要な貨財を作り出すとせば、それよりして生じ得べき勞働の不愉快の度を計量する。斯くて此の二個の不愉快の感度を比較し來り、其中不快の比較的小なるものを選ぶ。即ち勞働によつて生ずる犠牲が、不充足の状態より起る犠牲よりも小なる場合に於てのみ、勞働に従事せんと決心を起すものである。而してその勞働を選ぶに當りても、更にその際考へ得べき種々の手續の中、面倒の最も小なるものを選ばんとするものであつて、従つて此處に亦、計量、評價、比較、判斷てふ一系列の行はれざるを得ざることとなるのである。

まこと經濟學の總べては如上の假定の下に立つものである。即ち一切の經濟行爲は此の假定に合理的基礎を有して高尚なる精神力を要求する行爲なりと説き、従つて經濟學は一種の經濟心理學を構成することとなり、依つて以て模型的過程を律して、かの經濟行爲を説明せんと試むるに至る。従つて經濟學に取り、經濟は人間に特有なるものであり、動物或はまた經濟を營むやてふ問題の如き、到底起り得べしとも思はれないのである。實にかの本則によれば、經濟性は

1) wirtschaftliche Natur

絶對的なものにして、人間の本性より分離せしめ得べからざるものとなる。

四

〔一〕『經濟性の特徴は人類の心身組織中に固き基礎を有するものにして、少くとも人類の歴史に表はれる時代に於ては、變化せざることを外界の如し』。ラーゲナー著『經濟學原論』(Wagner, Grundlegung der polit. Oekonomie)〔第三版〕第一卷第一篇、八二頁。

然れども従來の經濟學者が、その行爲行動よりしてかの經濟性の本則を演繹し來れる文明人の間に於てすら、かの經濟性なるものは各人夫々に其の強度を異にしるべきものなりとの多數の觀察が爲されてゐる。即ち勤勉なる者と懶惰なる者、細心の人と輕率なる人、節約者と浪費者、夫等の兩極端の中間に於て、所謂經濟性なるものには無数の段階が存するのである。今、物に對するや之を破壊するを以て快なりとなす幼兒の態度を觀察し來らんか、かの所謂『經濟性』なるものは、各人各個に絶えず新らたに習得せられ行くべきものにして、各人に對しては、それは教育及び習熟の結果であり、從つて人夫々にその全心身發達の異れるが如く、其の經濟性も亦、著しき程度の差を示すものあるを容易に知り得るであらう。

事態既に斯くの如くんば、抑々人類には、かの『經濟性』は生得のものには非ずして、寧ろ習得の結果に非ざるか、否か、又、人類進化の初期に當つては、吾人が動物に就ては常に假定しつゝある如き、純本能的の欲望満足の時代が、幾千百年を繼續せるものと考へらるべきではあるまいか、否か、の問題は最早や殆んど之を回避し得ないであらう。

此の問題に對する解答は、唯だ經驗的方法に訴へてのみ得らるべきものにして、原始人に就きて吾人が腦裡に描き出すべき像は、『古典的』經濟學者が採用する演繹法の中に頻出し來るが如き故意に構想せるもの、ロビンソンクルーソー式譚たるを許さない。即ちその原始人に就て考ふる特質は、全部之を實際に接して得來るものでなくてはならないの

である。而してこの原始人の特質は、彼の文化を缺ける人類の生活しつゝある實際的先行條件を示し、彼等が先づ以て行動し、而して後に思惟する所以の動機を明らかにするものでなくてはならぬ。惟ふに彼の演繹的方法は此處に述ぶるが如き歸納的方法に比して容易に違ひない。一體文明人なるものは、自己に固有せる見解や感じを原始人の精神中にも之あるが如く見來らんとする傾向が強いものである。けれども彼等文明人の能力の尙ほ極めて貧弱なる、かの原始人の發達せざる精神生活を了解するに、恰かも己が精神を基として讀解するが如きは到底望み得べからざる所である。

言ふまでもなく、今日に於ては最早、所謂原始人なるものを、何處に行くも實際に觀ることは出來ない。續々として吾人が觀察に入り來る自然人は、その數夥しきものあれど、何れも皆決して野蠻最下級の狀態に沈溺しつゝあるもの非ず。已に文化發達第一段の痕跡を示したのであり、何れも皆、殊に火を知り居るものである。

固より世の學者にして、進化論に心酔せるの結果、現今に至るまでも尙ほ原始の獸的狀態を維持しつゝある住民を、何處にか發見し得べしと信じるもの尠しとしない。サー・ジョン・ラボック¹⁾の如きすらなほ、南洋諸島の各種民族は火を識らざるものなりと説かんとしてゐる。オー・ベシエル²⁾はラボックの引證せる例の誤なるを指摘するのに骨を折つた。吾人は火と没交渉なる種族が今日なほ此の世界に存すべきであるといふ命題を、ベシエルと共に妥當なりと認めることは出來る。が然し、熊、野牛、馴鹿などと打ち混せて氷原時代の人類を我々に示す彼の前史時代の洞穴の發見物すら、なほ火を使用せる痕跡を示しつゝあるではないか。まこと、火は有力なる文化の覺醒者である。そは人類の榮養範圍を廣め、木もて作れる箭筒の穂先を硬くし、獨木舟を穿ち、猛獸を脅かして驅逐するを教ゆるものである。

〔一〕『人類學』(Völkerkunde)一三九頁以下。米人テイル(Teal)〔リッペルト(Ripperd)の前掲書の五二頁に引證されてゐる〕が、このベシエルの説に一度だけ反對してあるといふことを、余は決して知らない譯ではな。ムント・ラウフ(Munt-Lauf)

1) Sir John Lubbock 2) O. Peschel

も、ハシエル以後尙ほ、"Naturp." 一八七九年號、四七八頁で、フィリッペン諸島のネグリット族は煮沸したる食物の味を解せずといふことを述べてゐるのであるが、その議論は、"Zeitschrift für Ethnologie" 誌、一二卷（一八八〇年）、一四三頁以下にて、アー・シャーデンベルク (A. Schadenberg) より更に改めて反駁されてゐる。

他の學者は、現在類人猿も亦行ひつゝある如く、小群をなして樹上に群居し、木の實を食とし、唯だ石と棒とを武器ともし又道具ともして使用してゐる人類の、何處かに發見せらるゝなるべしと考へてゐるものがある。フリードリヒ・エンゲルス¹⁾は、斯かる假定を俟つてはじめて人類が大なる猛獸に抗して其の生存を維持し來れる事實を説明するを得るものなりと言つてゐる。此の事柄に就き一層精細なる研究をなせるリップpert²⁾は、埃及の神話に於ては、樹木が靈魂の住家として或る役割を演じてゐることを認めては居れど、さればとて、それよりして直ちに、人類祖先の住居は樹木なりと結論する程に輕率ではなかつた。此の點は言語學者のラツァール・ガイゲル³⁾が、今日南アメリカ・インディアンの間に使用されてゐる釣床を目して人類樹上生活の遺物なりとなしゐるに比すれば、遙かに用意の周到を認めなくてはならぬ。成る程、中央アフリカ(ガベリー黒人族の許にて)、スマトラ、ルソン、ニューギニア、サロモン諸島にては、大なる樹の枝と枝との間に營まれてゐる小屋が發見されたし、南米の森林種族の中には夫れに類せることを見ると傳ふるものがある。けれどもそれ等の原始的建築物は、それが嘗に一時的の防衛的建築物たるに過ぎざるのみならず、地上には恒久的な住宅があつて、之を補ひるる有様なるを見れば、夫等を稱して不完全極まる住宅となすことは、決して當を得たものではない。しかも況んや斯くの如き建物を利用してゐる種族にして、各種の道具、器具、家畜を所有し、加之その或る者に至つては、農業をさへ營むものがあるのである。此處に至つては、彼等は最早、文化の初期に停滯してゐるものなりとは云ひ得ないではないか。

1) F. Engels 2) Lippert 3) Lazar Geiger

〔三〕『家族、私有財産及び國家の起原』(Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates) 七頁。

〔四〕『人類文化史』(Kulturgeschichte der Menschheit) 六七頁以下。

〔五〕ナハティガル著『サララ及びスマダン』(Nachtigal, Sahara und Sudan) 第二卷、六二八頁以下。フィンシユ著『サモア群島紀行』(Finsch, Samoafahrten) 二七一頁以下。ラツェル著『人類學』(Ratzel, Völkerkunde) 〔第二版〕第一卷、一〇一、一〇五、二四五、三五六頁、及び第二卷、八三頁。

〔六〕ワイツ著『自然民族の人類學』(Witz, Anthropologie der Naturvölker) 第三卷、三九三頁。

論じ來つて乃ち知る、文化無き種族を求めて、それが敘述に筆を起すことは何の役にも立たぬことである事を。斯くの如きは、彼のクレム¹⁾が、其の『人類文化史總説』を説くに方つて、假令其の種族が文化の最下級に立ちゐることは拒まんとは欲せざれど、ブラジルの林間黒人族に先づ其の彼説の筆を下したそれである。然るに其のブラジルの林間黒人族と其の文化の程度に於て伯仲の間にある種族として他の學者より數へられてゐるものには、南アフリカのブッシュマン族、コンゴー河流域のバトゥア族、セイロン島のヴェツダ族、スマトラのクブ族、アンダマン諸島のミンコビー族、フィリッピン諸島のエータ族、濠洲大陸のオーストラリア土人、現在は絶滅し盡せるタスマニア族、フォイエラント人があるのである。而して此等諸民族中、其の何れに「野蠻」てふ讚辭を呈すべきやに至つては、何人もこれを決するに難しとなすであらう。オスカー・ベシエールは其等諸民族は皆、幾分の文化要素を示すものあるを認め、彼れ自らが以て原始状態に最も近しと爲しつゝあるボトクード族の間にさへ、なほ且つ然りとなしてゐる。

〔七〕『人類學』(Völkerkunde) 一四八頁以下。

然りと雖、人類が獸類の有してゐるより以外の何等の補助手段をも有せずして、生存競争に當らねばならぬといふ斯かる原始状態を假定することは、進化的に人類を研究せんとする科學の凡てが必然的に取り入れざるべからざる方便

1) Klemm 2) Allgemeine Kulturgeschichte der Menschheit

である。さりながら、此の原始状態を或る一定の民族の例證を藉り來つて明らかにせんとすることは斷念すべきである。之に反して、野蠻最下級の人類が有する共通的特徴を綜合し之を歸納して、經濟及び社會組織の初期の相貌に達せんと企てることは、學問上の效用に資する大なるものがあると云はねばならぬ。但し之を行ふに際しては、敢て前に述べし野蠻最下級の民族にのみ限る要がない。何となれば、斯の種の限界は徒らに異論を喚起する惧あるのみならず、吾人の眼界をして狹隘ならしめるが故である。而已ならず、精神的及び物質的文化の各種要素は決して、同じ歩武を取つて相伴に進化せざるべからずして、風に相互規定し合ふものに非ずして、殆んど凡ての現存自然人の間に、最も古き生活方法からのみ由來したりと目すべき特徴を發見するのである。然かも此等の諸特徴を聚集して觀念的に結合すること、これ正に吾人が第一着の課題でなくてはならぬ。

然るに此の點に就きても、從來は其れを取扱ふこと多くは輕率にして、原始人の性情を、經濟を營みつゝある文明人のそれより類推しつゝあつたのである。斯くて從來の學者は曰く「自然人の多種多様な欲望を満足せしめんには、個人にとつては堪へ得べからざる努力を要したのであつた。その猛獸及び自然の暴威に對する防衛の如き、同じく多數人の勞力によつて初めて爲し得られたのである」と。斯くの如くにして彼等は人類初期に於ける生存の鬭争は集合的に遂行せられたりと説き、以て『原始社會』及び一種の共產經濟を假構するに至つたのである。

けれども、人類が極めて長き期間、勞働せずして生存したりしことは疑ふべからざる事實である。若し望む者あらば、今日なほ西穀米樹、芭蕉、麵菓樹、コ、ア樹、無漏子樹によつて、極く僅量の勞力を費して生存し行き得る地域を地球上に發見すること決して難くない。此の處こそ物語に屢々現はれ來る所謂天國であり、人類の故里なのである。而して更に最近の研究とても、人類はその初め、斯くの如き自然の生活範圍に結び付けられてゐるのであるが、文化漸く進む

に伴れて、初めて全地球を己が支配下に隸屬せしむるを得るに至れるものなるべしとの假定を度外視する譯には行かなくなつてゐるのである。

若し夫れ組織的なる社會團體に至つては、吾人が觀察し得る野蠻最下級の人種の間には、殆んど其の痕跡をだも認めることが出来ないのである。彼等は、獸群と同じく、小群を作つて、食物を求めて漂泊し、穴の中、樹の下、若くは數分間にして作り得る柴の風障の蔭、又は僅かの地の窪みに夜營し、主に木實、塊根を食とし、蝸牛、蛆蟲、蠃斯、白蟻の如きものに至るまで、凡べて彼等が手に入れ得る限りの一切の動物性のものを食ふ。男子は普通、たゞ弓箭又は投木を裝ひ、女子は其の主要具として、尖れる棒の土掘杖を携へて、塊根を採るの用に供してゐる。彼等が比較的進歩したる種族と接觸する所にては、戰々兢々として、時には猜疑狡猾に、その不安定な生存を送つてゐる。而して此の生存にあつては、肉體のみは如何にも高度の輕快と敏捷とを來してはゐるが、技術上の熟練は極めて遅々たるものであり、しかも隻輪の進歩をなしてゐるに過ぎないのである。此等民族の多くは、燒物の術、金屬加工の術一般を心得居ざるのみか、木材、樹皮、石材、獸骨を極めて多方面に使用することすら解せず、假令斯かる使用ありとするも、器具道具として貯蓄することは斷じてないのである。蓋し、絶えざる食糧の探求に合適なその漂泊生活が、さなきだに、斯かる物を携行することを阻んでゐるからである。

〔八〕 其れに就いては、ヘルンスト・グロッセ著『家族の形態と經濟の形態』(E. Grosse, Die Formen der Familie und die Formen der Wirtschaft) 三七頁。アー・トナー著『モンゴロ獨立國に於ける原始人經濟組織論』(A. Thonnar, Essai sur le système économique des primitifs d'après les populations de l'Etat indépendant du Congo) 三頁參照。

〔九〕 アー・シャーテンマルク著前掲書中、ネグリット族に關する記述。Zeitschrift für Ethnologie 誌、第一九卷一頁以下の頁。

マンライナ (Ehrenreich) のネトグロッド族に関する記述。シュタイネン著『中央ブラジルの自然民族の下にて』(K. v. d. Steinen, Unter den Naturvölkern Zentral-Brasiliens) 三五八頁以下のパロロ族に関する記述。フリッチ著『南アフリカ土人』(Fritsch, die Eingeborenen Süd-Afrikas) 四一八頁以下のブッシュマン族に関する記事。ザラシン著『セイロン島のヴェタ族』(P. u. B. Sarasin, Die Veddas von Ceylon) のヴェタ族に関する記述。Zeitschrift für Sozial- u. Wirtschaftsgeschichte 誌 第一號 一三三頁以下のブレンカーン (Brentano) のオーストラリア土人に関する記事参照。

此等の民族を稱して「低級の狩獵民」と呼びうる學者がある。けれども眞の意味の狩獵が彼等の栄養の主なる源をなしてゐるといふことは容易に證し得ざる所である。彼等は皆、其の手に入れ得る限り好んで植物性食糧を食しつゝあるのであつて、彼等の中、暖かき地方に住む民族に於ては、殊に其の然るを見るのである。さればとて斯かる食料に供し得らるゝ果實及び塊根を集めて之を貯へ置くといふが如きことは行はない。豊饒なる發見地あれば、其處には多數の同民族の集まり來ること、恰かも豊富なる飼料場に獸群の集まるが如く、食料盡くれば、また四散し去る。この事は彼等の好んで食する軟體動物、昆蟲の如き動物性食糧の場合に於て、又同様である。各個人は其の發見したるものを直ちに其場に於て食ひ盡すのであつて、共同の家計の存するなく、又家なるものゝあるを見ない。比較的大なる獸を倒したるか又は之れが死せるを發見したる場合(腐敗した肉の嗜好は彼等の間に弘く行き渡つてゐるが)にのみ、全群が集り寄つて、各自は鱈腹(たがは)食ふのである。然し、斯かる大獸を狩獵することは、肉食獸が其の餌物を襲ふ遣り方と極めてよく似た所がある。彼等の武器が不完全な爲めに、獸を即座に倒すことは殆んど爲し得ず、獵者には唯だその射たる野獸の後を追迹して、夫れが氣力失せて斃るゝを待つといふのがその主なる役目となつてゐる。

[10] リットメルト著、前掲書、第一卷、二四六頁では、二三の未開種族の間に於て、糧食を發見するや、大聲に呼ばはつて夫れを告げ知らず慣習の存することから、それに依つて「家族への義務的顧慮」と稱すべきものが表はされてゐるに相違ないと結論

してゐる。されど多くの動物(例へば、我々の間にある家鴨)の間にも、同様なる慣習が存してゐることに注意すべきである。さりながら氏も亦、食糧の貯藏を考ふるものは彼の諸民族中一人もあるなしと力説してゐる。故に近時多方面より提起せらるゝ提案に基いて、此等の民族を「蒐集者」(Sammler)と呼ばんとするは、無意味なこと、云はればならぬ。

[11] フリッチ著『南アフリカ土人』三二四頁、ゴッゲ著『ムアタ・ヤムヅァー領域に於て』(Pogge, Im Reich des Muta Janwo) 三二八頁以下。ウィスマン著『アフリカ内地に於て』(Wismann, Im Innern Afrikas) 二六〇、三四一頁。マヤチヤス著『アメリカ、特にブラジルの種考』(Martius, Zur Ethnographie Amerikas, zumal Brasiliens) 六六五頁以下参照。

此の段階にある民族の家族制度は、従來色々論争的となつた。されど最近に於ける諸見解は、單なる姪交關係を超えて終生に渉る男女間の共同が彼等の間に存立してゐるものゝ、他面に於ては此の薄弱なる人間集團は、食料缺乏てふことに逢着せば、容易に分散するものであり、少くも各個成員は其の集團より離脱するものであるといふ事を否み得ないといふことに傾いてゐるのである。其の中にあつて比較的に永續的なるは、母子間の共同だけである。母はその漂泊に際し、其の兒を携行せねばならぬものであるから、之れを様々な方法で背に縛るを普通としてゐる。この事は凡べての自然人間に極めて汎く行はれてゐる風習であり、已に農業時代に移行せる民族の間にすら、尙ほ其の遺風を見るのである。幼児は斯くて多年、母の乳、母の口より養はれるのであるが、やがて間も無く獨立して食料の探求をなし得るに至るのであり、八歳もしくは十歳にして、已に其の共同より離脱するものも珍らしくない。

此れに數へらるべき民族は、何れも矮小なる人種であつて、其の體格は一見直ちに、進化の落伍者、畸形者てふ印象を吾人に與ふ。されど彼等を目して直ちに、退化せる殘存種族なりと考ふることは正當でない。寧ろ進歩せる民族の肉體的進化は幾百年來農業、牧畜が已に彼等に與へたる規則的にして豊富なる栄養にのみ歸すべきものであるかの觀を呈してゐるのに、之に反しかの「矮人種」にあつては、何時までも同一段階に止まつて舊態依然たるものがあるのである。

天候や獵の幸の盛衰のまに／＼、彼等蠻民は或る時は飽く程暴食し、想像し得られぬ程まで飽食するが、それにも増して屢々、甚しき缺乏に悩むのである。而して彼等が纏ふ一片の腰紐はこれ彼等が唯一の衣類であるが、それは彼等にとって、(譯者註)「まこと獨逸語にいふ、Schmuckriemen」である。彼等は、之れを以て己が腹を緊縛し、以て僅かに喰ひ入る如き激しき空腹の苦痛を減せんとしてゐる。⁽¹¹¹⁾

〔一三〕 フツシユマン族に就きては、フリッチ著前掲書、四〇五頁を、オーストラリア土人に就きては、マシエル著「人種學」(Peschel, Völkerkunde)三五〇頁を、ボトワード族に就きては、Zeitschrift f. Ethnol. 誌、第一九卷、(一八八七年)、二七頁 G. H. R. (Ehrenreich) の所論を参照せよ。
(譯者註)「餓凌ぎ紐」の義で、空腹の際腹帯を強く締める時は、一時それを堪へる事が出来ることから稱した「緊縛」「腹帯」に對する諧謔的な言ひ方である。

斯かる原始的人間生活よりして、人類が如何にして向上し來れるかの道程は、人種學の無數の類型的實例が之を明らかにしてゐる。先づ女子は野生の果實、塊根を蒐集せんとして、食用植物の栽培を引請けるし、初めの程はかの古くより使ひ慣れたる土掘杖を用ゆるけれども、後には漸く短かい柄の撞木鍬(しんぼく)を使用するに至る。次に男子は狩獵、漁撈を續けるが、今や一層精巧なる武器を以て、たゞ豊富なる漁獵場に於てのみこれを行つて從來に増す獲物を得、斯くて狩獵、漁撈が食料の大部分を供給してゐる。尙ほ之を補ふに、牧畜を以てして居るものも尠くないのである。かくて男女は夫々に、全く峻別されてゐる食糧獲得の範圍を有して居り、此の範圍には男女夫々に、進歩した技術上の見識と共に多種多様な産業的技術が結び付くのであるが、此の技術は通例、原始生産及び先占と極めて密接なる關係を有してゐるのである。進歩せる自然人の經濟は凡べて、これ等二個の要素の結合に歸することが出来るのであるが、其の各箇に

就きて考ふれば、全然その土地の自然的條件の如何に左右されるを免れ得ない。かるが故に、黒人種、バブア族、ポリネシア族、アメリカ・インディアンに共通に適用せしめ得るやうな進化の段階を構成せんとするは、誠に無意味な事であらう。

然しながら吾人が何處に自然人を観察するとしても、到る處で、彼等の欲望満足はその多くの特徴に於て、依然として獸類の本能的行爲を想起せしめるものがある。彼等の生活は到る處に於て、尙ほ未だ十分定住の域に達せずして、彼等が建てる簡單なる小屋さへ、多くはたゞ一時的の建物に過ぎず、土地と種族とにより多様の變化を示すとはいへ、其の模型的形式に於ては、雛が巢立つに至るや棄て去られる鳥の巢を想ひ出さしめるものがある。

リッペルトは文化發展の支配的根本動機を生命保護(生命保護)にありとなしてゐるが、これ確かに、古い學者に比して一進歩をなしてゐる所である。けれども言葉その物の選び方は、適切とは云ひ得ない。將來に懸念すてふ意味の「保護」なるものは、自然人の間には問題にはなり得ないのである。原始人は將來を考へるものではない。彼等は總じて、我々の言葉の意味でいふ思考なるものを有せず。彼等はたゞ意欲を有するのみであり、しかも自家の生命を保持せんと欲するのである。自己保存及び自己満足の本能、之れぞ即ち進化の能因であつて、之れと比すれば、かの性慾の如きすら、尙ほ遙かに其の及ばざるを見るのである。

斯かる原始状態にある人類を、長きに涉つて観察し得た歐洲人は、何時も、彼等原始民族が示す譬へ様なき程の魯鈍と思考の懶さを語り、崇高なる自然の現象に對して没交渉なる如き態度、自己以外に存するものに對する全くの無關心を報じて居る。未開人は食はんと欲する。天候の極めて酷烈なるに對し己を護るの必要あらば、眠らんと欲するのである。これが彼等の人生の全目的なのである。

従つてベシエルが、未開人には過度の宗教的妄想觀念ありとなし、其の自然状態に接近する益々甚しければ、斯種の信仰はいよ／＼盛なるものありと云つてゐるのは又全然謬見であつて、慎重に行はれたる多數の觀察に背反するものである。彼は太陽の運行其の他の天界の現象が文明人よりも自然人を漚しなきまでに烈しく激動させ、一層切實に考へさせるに違ひあるまいと、公然と假定してゐるけれども、實際上斯くの如き事は斷じて無い。ブラジルの印度族及び黑人族の許で、或る旅行者の此れに關する質問に對し、彼等の答ふる所は、「そんな事は決して考へた事はない」といふのであつた。スペイン¹⁾は、未開種族は全然新らしき現象に對して決して何等の興味をも示さざるものであるといふ許多の例證を集めてゐる。例へば、バタゴニア族に鏡を示し、彼等をして顔を映さしめたが、彼等は極めて平然たる態度を取つたといふ。デムビア²⁾は、己が船に伴ひ來れるオーストラリア土人が、宛行³⁾れたる食物に就いて考ふるの外、何物にも氣を留めざりしてふことを報じてゐる。バードゥン³⁾は東アフリカ人を稱して、「考ふれば、考へ得ざるには非ざれども、己が肉體的欲望を満足せしめんことにのみ思ひ煩ひ居るが爲めに、一切物を考へることを厭ふ人間であり、彼等の心は耳にし眼にし手に觸るゝを得る對象の上のみ限られて居り、たゞ刹那を、唯だ現在をのみ事とし得る丈けである」と云つてゐる。^{1) 2) 3)}

〔一三〕『社會學原論』(Principles of Sociology) 第七卷、四五頁以下。

〔一四〕アンドレー著『マートン、スピック探検記』(Andree, Die Expeditionen Burtons und Spekes) 一八六一年、ライプツヒ版)三五頁。

〔一五〕傳道師克蘭ツ著『グリーンランド史』(Kranz, Historie von Grönland) 一七八〇年、フランクフルト版)一六三頁の同様の批評及びラホック著『文明成立論』(Lahock, Entstehung der Zivilisation) 四三九頁以下参照。

かるが故に、動物の營むと同様のこと、即ち生命維持なるものが、又、自然人の標準的本能である。而して此の本能的空間的には個々の個人に限られ、時間的には缺乏感の瞬間に限られてゐる。言ひ換ふれば未開人はたゞ自己をのみ考へ、現在をのみ思ふものである。而してその自己を超え現在を絶してゐるものは、彼等の精神生活に取つては、密封されてゐるも同然なのである。かるが故に多數の觀察者は彼等の限なき利己心、同族に對する冷酷、貪慾、盜心、懶惰、將來に對する無頓着、健忘性等を非難するのであるが、これ同情、記憶、推理力が尙ほ全く不發達の状態にあることに由來するものである。然し財界に對する自然人の態度を理解せんが爲めには、正に此等の特徴より出發すべきを勧め度いのである。

未開人の利己心と、其の近親に對する冷酷とは、其處では各個人がたゞ己れ自らをのみ顧るにすぎない休みなき漂泊生活の結果である。斯かる性情は先づ、彼等の間に極めて弘く行はれつゝある嬰兒殺しの習俗に表はれてゐる。而して如何なる民族に於ても、その行はれぬことは殆んど無いと云つてよい。蓋し子供は漂泊に際し、食料探究に方つて、牧民群の足手纏ひである。これ實に其れが殺戮の主な原因である。斯くの如くにして一度、それが習俗となるに至れば、文化の漸く進める段階にあつても、そはなほ依然として踏襲せられ、その遺風は舊にアジア、アフリカ、オーストラリア、ポリネシアに住む自然人の間に存するのみならず、アラビヤ人、ローマ人及びギリシャ人の間にすらなほ認められたのである。

〔一六〕リッペルト著前掲書、第二卷、二〇一頁以下。ラツツェル著『人種學』(Ratzel, Völkerkunde) 第一卷、一〇八、一五四、二五二、二七七、三〇六、三三八、四二五頁参照。

未開種族の人口増加の極めて遅々たる原因を、一般にこの嬰兒殺しに歸してゐる。然れどもその原因は尙ほ亦、彼等

が短命なること、授乳期の長きことにも關係がある。即ち授乳期間には明らかに受胎せざるが爲めである。而して此の人口増加の遲緩といふことが同一文化段階に固執する主な原因を構成するものである。更らに親子間の自然的結合が一般に、決して鞏固なものでないといふ事は彼等の間に非常に弘く行はれてゐる「養子取」の習俗に於ても表はれてゐる。例へば、ミンコビー族に於ては、其の「家族」の中に實子よりも養子の數の方が多しといふ事になつてゐるではないか。しかもその實子と養子との間には通常何等の差異が設けられてゐないといふことは注目し得る。此の養子取は嬰兒を殺す代りに、これを棄てるといふことが生じたことから由來したものであらう。實の母親が嬰兒を携へて彷徨を續けることが出来なかつた場合、子供を有たぬ他の婦人は多分それをする事が出来たのであつて、同時に嬰兒の生命が救はれたのである。

〔一七〕 ラボック著「文明成立論」七七頁以下参照。

近代の人類學者は、母の愛の強さがあらゆる文化段階に共通なる相貌であると立證せんと大いに努めてゐる。誠に、多數の動物にあつてすら尙ほ如何にも樂しげに現はれてゐる此の感情が、我々人類の間に缺けてゐることを指摘することは如何にも心苦しい。けれども餘りにも多くの觀察が、未開種族にあつては、たゞ自己の生命をのみ顧慮するに甚だ急にして、一切の他の心的感動を、實に血屬關係に基く感情をも打ち消しつゝあつて、自己生存の顧慮以外に、全然崇高なる何物も現はれ來り得ないといふことを擧示してゐる。而して子供が一度自立自存し得るに至るや、彼等は易々として其の血屬より離脱し去るを見、凡べての觀察者は吃驚、否、厭惡をさへも感ずるのである。されど此の子供の無情なることの半面には、「夫は妻が、父は子が、此の者等が餓えつゝあるも、己れ一人それを樂しまんとする時は、食を頒つを拒み得る」冷酷の存することを語つてゐるのである。

〔一八〕 ラツツェル著「人類學」第二卷第一部、六七七頁にある著しい例を参照せよ。子供や女子を奴隷に賣ることは、たゞアフリカのみで行はれてゐるのではない。マルチウス著前掲書、一二三頁。ゴスト著「アフリカ法理論」(Post, Afrikanische Jurisprudenz) 第一卷、九四頁参照。

此れと同様な際限を知らぬ利己心の表現は、多くの自然人が健康者の足手纏となる病人、老者を其の彷徨の途上遺棄し、又は人無き場所に棄て去る無頓着に之を認めることが出来る。斯くの如き表現は迷信の一記號として、即ち病氣の原因と考へられてゐる悪魔の力に對する恐怖として幾度か説明されて來た。而して實際に、漸く進歩して已に定性的となり、其の食料は能く病人を給養し得て餘りあるべき民族に於ては、斯かる表現が如上の説明をおびき出すのである。さりながら此の際忘るべからざる事は、習俗は一度その根を下ろすや、假令それを喚び起した原因が已に失せ去りたる後までも、尙ほ長く固執してゐるものであるといふ事である。

〔一九〕 リッペルト著前掲書、二二九頁以下は、此の事柄を極めて精密に取扱つて居るが故に、余は其の事の例證を擧げ來る必要がないと思ふ。尙ほフリッチ著前掲書、一一六、三三四、三五一頁。ライツ著「人類學」(Waits, Anthropologie) 第二卷、四〇一頁をも参照せよ。

「遺棄」より「謀殺」に移る、それは唯だ僅かに一步である。餘程進める文化段階にある民族に取つてすら、高齢はまことに喜ばしからざる状態となつてゐるではあるまいか。然るを況んや、此の状態を近親の愛によつて美化(verschönern)する手段は未開蒙昧の時代に於て一として存するなく、止むことを得ずして、美化の代りに短縮(verkürzen)を擇ぶに至りしものである。斯くて其處に、遺棄の外に、老人、病者を穴埋にし、甚しきは之を屠殺して其の肉を啖つたと云ふ例が無數にヘロドトウス時代より近世に至るまで擧示されつゝあるのである。否、斯かる恐ろしき事柄を行ふに盛大

なる儀式を以てすることが、彼等原始人にとつては正に孝悌の一戒律と思はれたのである。⁽¹⁰⁾

〔一〇〕 リッヘルトが其の著の二三二頁に擧げたる例及びマルティウス著前掲書、一二六頁を参照すべし。エーレンライヒ著「ア

ラジル人類學論考」(Ehrenreich, Beiträge zur Völkerkunde Brasiliens)六九頁以下。ワイツ著「人類學」第一卷、一八九頁。シ

ユラテル著「インドゲルマン考古學百科辭書」(Schrafer, Reallexikon der indogerm. Altertumskunde)三六頁以下。

果しなき漂泊の生活に於ける食糧の心配が、人間を完全に憫まされた有様に接し、爲めに吾人に取りては極めて自然なものと思はれる感情さへそれと併んで現はれて來ず、遂には吾人の以て最も唾棄すべき罪惡なりと目してゐる事柄を宗教的義務と考へさせ得るに至つた以上の事實に見來れば、かの小群をなして彷徨する人の群を結合してゐる人的結合が、如何ばかり弛緩なるものなるかを感じ始めるのである。かの性交は到底彼等を結合せしむるの手段とはなり得なかつたのである。實に彼等の間には「吾人が稱する「愛」なるものは全然缺けてゐたのである。⁽¹¹⁾ 曰く共同經濟、曰く家事、曰く財産、夫等は殆んど無いも同然であつた。蓋し夫等は人類の欲望が單なる食糧需要を超えて擴張するに至つて、はじめて發生し得たのである。しかも其の然る状態に達するには、多數學者が思惟しつゝあるよりは遙かに長き時を要したのであつて、特に被服及び住居に對する欲望の如き、自然人にあつては、全然二次的性質を帯ぶるに過ぎざる有様なのである。

〔一一〕 今日家族に關して記述してゐる多くの筆者は、ラホック著「文明成立論」(Lubbock, Entstehung der Zivilisation)五九頁

以下に指摘してゐる正當なる觀點を餘りにも注意し無さざる。彼等は同じく家族と家計との關係をも見逃がしてゐる。

今や眼を轉じて、上述の事と劣らずに彼等の間に廣く行はれてゐる無思慮の特徴を見るならば、一見直ちに一驚を喫せざるを得ざるものがある。飢餓は彼等に大なる苦痛を與ふるものであるから、屢々過剩を來す食糧を後日の用に貯へ

置かんとの念慮を自ら彼等に起さしむるに至るべしと考ふべきであらうが、多數の觀察の一致する所によれば、彼等未開人は決してそれを考へるものではないのである。ヘックウエルダー¹⁾は北アメリカ・インディアンに就き述べて曰く、『彼等には食糧の貯藏を蒐集し、之を蓄へ置く習慣はない。その爲めに屢々甚しき困難に陥り、命の糧の全然缺乏することすら珍らしくない。こは戰時に於て殊に然りである』⁽¹²⁾と。又、南アメリカに住む諸民族に就ては、他の研究者が『精々一日以上の長期間食糧を占有するといふことは彼等の性質に反する』と報知してゐる。⁽¹³⁾後日の需要の爲め食糧を貯へ置くは、多くの黒人¹⁴⁾族に取つて、寧ろ不似合なこととなつてゐる。今其の理由を蔽けば、食物を喰ひ残し置くときは、妖靈を誘き寄せるやうにならうと云ふ迷信によるのである。⁽¹⁵⁾

〔一二〕 ヘックウエルダーのアメリカ・インディアン¹⁶⁾の歴史、風俗、習慣に關する報告、(エフ・ヘッセ譯、一八二二年、グッティンゲン版)三三〇、三六五頁。

〔一三〕 アップン著「熱帯地方にて」(Appun, Unter den Tropen)第二卷、三二二頁。尙ほ、四五三頁をも参照。

〔一四〕 リッヘルト著前掲書、第一卷、三九頁以下。ハンス・マイヤー著「バラムディー族」(Hans Meyer, Die Barundi)五六頁。

従つて此等民族が、短見なる慾心よりして、歐洲人より完全なる武器を手に入るゝ時は、彼等はその獵場に棲む獸類を信することの出来ない程に濫獲し盡すのを普通とする。かの北アメリカに無數に産した水牛群を根絶したことは實に其の較著なる例證となすことが出来る。彼等は「極めて多量の肉を無残々々と藪の中に遺棄して顧みざるに」、積雪野を埋めて狩をなすを得ざる冬となれば、激しき飢餓に襲はれて、草根、木皮、何の擇ぶ所なくこれを食ふのである。⁽¹⁷⁾今日にありても尙ほ、歐洲人と有利なる通商を營みるるアフリカの土人等は、其の收入の源なる象及び護謨樹を何の容赦なく剝絶しつゝあるのである。

1) Heckewelder

〔二五〕水牛馴滅の罪は、言ふまでもなく、其の大部分を白人種に歸すべきものなりといふことは、チャールズ・メア（Charles Mair）が『カナダ赤十字社の事業及び成績』（Proceedings and Transactions of the R. Society of Canada）第八巻に指摘してゐる。

較々進歩したる民族及び個人の間にも、なほ依然として斯かる現象を見るのである。ポグゲ曰く、『擔荷夫が新たな糧食を受取るや、必ず其の初め兩三日は余よりも美食をなし、上等の山羊、鶏を買ふ。余もし彼等に十四日分の糧食を與へたなら、彼等は必ずそれを初めの三四日中に面白可笑く喰ひ盡して、それ以後は、或は荷物の中から盗み取り、或は余に食を乞ひ、或は空しく空腹を抱へてゐるのであつた』と。ヴァグデーに於ては、その酋長の喰ひ残しは凡べて地に埋め、アメリカ・インディアンの播祭には、客人は肉と麵麩とをすつかり平けて仕舞はねばならぬこととなつて居り、爲めに『其の際には飽食と嘔吐とは普通のこととなつてゐる』といふ。

〔二六〕『アマ・ナムグー領域に於て』（Im Reiche des Muata Janwo）一四頁、尙ほその六頁。及びグイスマン、ウォルフ等共

編『アフリカ内地に於て』（Wissmann, Wolf etc., Im Innern Afrikas）一九頁参照。

〔二七〕ナハティガル著『サハラ及びスーダン』（Nachtigal, Sahara und Sudan）第三卷、二三〇頁。

〔二八〕ヘックヴェルター著『前掲書』三六五頁。

貯藏物を此のやうに荒して仕舞ふといふ事と密接の關係を有するものは、彼等未開人が時間¹⁾に就いての習慣である。世人は普通、彼等が時間を太陽の位置によつて計ることに特別の習練を有して居ると考へて居るが、それは全然誤つた考へである。即ち彼等は全然、時を計るものに非ず、従つて又それを分つことをしない。文明人が依つて以て其の仕事の統制をしてゐる一定の食事時間なるものをどの未開人も持たないのである。彼の比較的開化せるアラビヤのベッドウ

1) Pogge

イー族の如き種族にあつてすら、尙ほ且つ時の觀念を有せず、空腹なれば乃ち食ふのである。リヴィングストーン曾てアフリカを稱して『幸福なる地方なるかな。彼處には時は全然何等の値もなく、人は疲るれば乃ち腕を曲げて睡ると云つてゐる。』極く些細な然かも黒人¹⁾族にとつても切實に必要な労働すら、出來得る丈け、これを速くへ押しやつて、袖手無爲ならんとしてゐる。彼等は夜に入れば薪水を要することをよく辨へ居ながら、尙ほ怠慢と無爲に晝を寝ね暮らし、しかも尙ほ日の暮るゝ頃までも身を動かさんとせず。斯くて漸く夜に入り初めて、其の必需品を調達するのである。

〔二九〕タント著『倫理學』（W. Wundt, Ethik）二版、一四〇頁参照。

〔三〇〕『新傳道旅行』第一卷、九九頁。——加之、今日の印度人に就きて、フランスの一學者は次の如く云つてゐる。（A. Méhin, Musée social. Mem. et docum. Nr. 9 四三九頁）此の國に缺けたものが唯一つある。それは時間ではあるまいか。

〔三一〕メンケル著『アフリカ旅行』（W. Junkers Reise in Afrika）第二卷、二一四頁。

かう云つて來ると、非常に廣い範圍の自然人が陥つてゐる懶惰の習慣を已に非難したことになる譯である。されど觀察者には懶惰と思はれた事柄も、それは更らに、唯だ先見の明に缺け徒らに利那に生きつゝあると云ふのに過ぎないのである。彼等にしてその慾滿たされ、腹便々たるの時、何を苦んで、身を粉にして働くことを爲さう。さればとて彼等は働かぬものなるかといふに、決して然らず。實に彼等は總じて貧弱極まる道具を使用して、尙且つ一人一人の文明人に比して敢て遜色なき労働を營むことが珍しくない。唯だその異なるは其の労働たる規則的のものに非ず、規律立ちたる時間の順序で行ふものでは無くして、缺乏が彼等を強ひ、もしくは興奮せる情調が勃起したる時、躍進的且つ斷續的に遂行するの點にあり、而かも眞面目なる生活任務としてではなくて、寧ろ遊戯半分¹⁾に之を行ふの點に存するのである。

〔三二〕尙ほ詳細は拙著『労働とリズム』（Arbeit und Rhythmus）四版、一九〇九年ライプツヒ版、二頁以下を見よ。

1) Livingstone

【三三】 印度の工場労働者さへ、「彼等が必要なくべからざる物を獲れば、其の労働を停止する」故に、個數貨銀は彼等には行ひ得ない。(メタン著前掲書、四四一頁)

總じて原始人は常に最も手近き刺激にのみ従はんとするものであつて、彼等の行爲や實に純衝動的であり、謂はゞ單なる反射運動である。欲望と満足との距離いよ／＼近接し來れば、彼等には益々好適なのである。自然人は子供である。彼等は將來を考へず、また過去を顧みない。彼等は容易に萬事を忘る。新らしき印象あらば何れも、過ぎたる古き印象を逐ふ。如何程苦がき生活上の困難とても、彼等の精神の快活なる基本的情調を、假令一瞬時たりとも擾すことは出来ないのである。ニューカレドニア人、フィジー島民、タヒチ族、ニュージーランド人に就きて學者の記す所によれば、彼等は四六時中哄笑し諧謔しつゝあるといふことである。アフリカに於ては到る處、黒人^{ネグロ}族はそれと全く異なる所なく、他の民族に就きて觀察せる旅行者の各種各様の記録は皆、規を一にして、或は「笑談と嬉戯とに滿つ」といひ、或は「生氣潑刺たり」といひ、或は「快活にして饒舌なり」といひ、或は「大空に棲む鳥の如く常に樂しげなり」と敘べてゐる。

【三四】 スペンサー著前掲書、七六頁、尙ほ同氏著『記述社會學』(Descriptive Sociology)中にも亦「道德感情論」(Moral Sentiments)の題下に多數の材料がある。

然るにも拘らず、土人にして永く歐人に使役せらるれば、其の快活なる本性を失つて、氣六ヶ敷き陰鬱な性格に變ずるに至る例の甚だ多きは注意すべき事柄である。フリッチ^{フリッチ}はこの事を説明し、そは彼等が其の主人よりして漸次に、將來の事物に就きて顧慮する習慣を得るに至るが、一方彼等の感情は斯種の顧慮を取扱ふことに堪へ得ざるものあるによる爲めであると解してゐる。

【三五】 前掲書、五六頁。

【三六】 文明國で教育された未開人は、其の種族に歸り、全然野蠻狀態に復歸することを好むものである。ハシエル著『人種學』一五五頁以下。フリッチ著前掲書、四二三頁。ペーテルマン氏報告(Petermanns Mitteilungen)第二四卷(一八七八年)、六七頁のエング(K. E. Jung)の記述。

斯くの如き利那に生くる彼等の生活は、常に判斷、即ち未來の物の觀念を前提としてゐる價值觀念によつて擾され得るものではない。アメリカ及びアフリカに於ては、土人が外國の植民者に己が土地を、詰らぬ物、例へば吾人の目よりすれば三文の價すらなき少許の南京玉と換へたことがどんなに珍しくなかつたかといふ事は、皆人の周知する所であるが、今日に於ても尙ほ、實は最早野蠻最下級にありとはいひ得ざる黒人^{ネグロ}族が、その所有物にして、しかも彼等の生存に尙ほ極めて重要であるものにせよ、そのどれをも、たゞ彼等の眼を咬る綺麗美やかな我樂多と、何時でも喜んで交換しようとしてゐる事に度々接するのである。斯くの如くではあるが、然し他の方面より見れば、彼等の貪慾は殆んど飽く所を知らぬといふべきである。未開種族に招かれて饗應を受ける時は何時も、どの酋長も眼にしたものは、何にてもあれ、皆、引物として貰ひ受け度いといふ所から、綺麗に裸にされて仕舞ふといふのが、旅行者の常に發する歎聲である。此處にも亦、かの素朴的利己心、彼の無際限なる貪慾の表現に接するのではあるが、夫等を目して經濟を營む文明人の營利心と同日に論ずる譯には行かない。彼等蠻人の行爲の規矩となり準繩となるものは常に利那の印象のみにして、距りるものに對しては一顧をだも與へない。彼等は謂はゞ、二個の思想を併列せしめて、夫等を比較計量することを爲し得ず、常にたゞ一個の思想にのみ支配せられ、強烈なる斷案を抱いて、それを追及し行くものである。

【三七】 フリッチ著前掲書、三〇五頁参照。

かるが故に、經驗を集積し、知識を相傳し行くことは、彼等に取つては全然困難なこととなつてゐる。斯種民族が幾

千年を経て、然も尙ほ依然として同一段階に停滞し舊態を脱し得ざる所以の主なる原因は茲に横たはつてゐる。世間多數の人は文化の第一要素の創成を極めて無難作に解釋し勝ちである。即ち以爲らく、何れの發明も、即ち家の建築、被服技術、道具の使用に關するとの進歩も、それが一個人によつて成されば、それは不磨の財寶として其の種族の共有財産となつて、其處に更に効力を表はすべきものである、と。否、そののみか、焼物の發明、家畜の馴致、鐵鑛の熔解てふことから、全く新らしき文化時期を發祥せしめんとしたのである。

然しながら斯くの如き見解は、以て自然人の生活條件を解釋するには、殆ど無價値である！ 彼等自然人が、殆ど一年の日子を費し非常なる努力を捧げて作り上げたる石斧に對しては、特殊なる愛惜の念を懷き、それを自己身體の一部なりと迄考へつゝあるべしとは、吾人如何にも之を承認し得る所ではあるが、さりとて此の貴重なる財産が、子々孫孫に相傳せられ、以て子孫進歩の基礎となるものであると考へるならば、到底誤謬たるを免れ得ない。斯る物に於て始めて所有權の第一概念が展開するものなることは疑ふの餘地を見ずと雖も、然も同時に此の概念は當該個人に附着した儘であつて、個人死すれば、共に滅するものであるといふことは、多數の觀察の立證する所である。即ち人の存生中、彼れが身邊の修飾たりし所有物は、その所有者と共に墓場に埋められて仕舞ふのである。これ世界如何なる地方にも行はれ居たる習俗にして、文化時代に入つても、尙、その殘餘を多數民族の間に止めてゐるのである。

〔三八〕 一般に、アンドレー者「人種學上の類似と比較」(Andree, Ethnographische Parallelen und Vergleiche) 一八七八年、シュトゥットガルト版二二六頁以下。シュルツ著「貨幣起原史綱要」(Schurtz, Grundriss einer Entstehungsgeschichte der Geldes) 一八九八年、ライプツォル版五五六頁以下。Zeitschrift d. Geschichte f. Erdkunde zu Berlin 誌 第三一卷、一七二頁以下。下のパンコウ(Pancow)の所説參照。——尙ほザクセンに此の習慣の殘りあるもの著しきものに就きては「ザクセン民族學

會報告」(Mitteilungen d. Ver. f. deutsch. Volkskunde) 第二卷、二四頁以下。第四卷、一〇七頁。ロツシエル著「所見錄」(Roscher, Ansichten) 三、A、一六三頁以下參照。

斯くの如き風習は、先づ以て凡べてのアメリカ民族間に沿く行はれつゝある所にして、其の爲めに遺族が甚しき困窮の状態に陥ること屢々である。カリフォルニア土人は、死者の生存中使用したる武器、器具を一切纏めて、死者と共に葬るのである。『ウィントゥン方言を話すカリフォルニア族の死者に伴ひて墓場に入る不思議な財産の中には、小刀、フォーク、酢壺、ウイスキーの空壺、鐘詰の空鐘、弓、矢などさへ珍らしからぬのであつて、もし聞勉なる主婦死すれば、其の外更らに二三壺の櫛の實を振りかか』とは、一目擊者の談である。『テウエルチエ族(パタゴニア人)死すれば、その墓場の傍に於て、死者の有せし一切の馬、犬、其他の畜類を屠り、死者のボンチョー、^(譯者註)裝飾品、ボラ(投石機用の丸)、各種の器具を山と積み上げて、これを燒棄す』と傳ふるものがある。ブラジルのポロロ族にては、一朝その家族の一員にして死せんか、其の家族全體は非常なる損失を蒙るに至る。これ死者をして再び歸り來らしめざらんが爲め、彼が生前使用し居たる一切の物を或は燒棄し、或は川に投じ、或は骨壺に納むるが故であつて、その爲めに一家空虛となりるのである。

(譯者註) 四角な切布(きれ)の真中へ穴を明けその穴に首を通して着る無難作なる着物。

〔三九〕 シュタイネン著「ブラジル自然人記」(K. von den Steinen, Unter den Naturvölkern Brasiliens) 二版、三八九頁。なほエーレンライヒ著「ブラジル人種學論考」(Ehrenreich, Beiträge zur Völkerkunde Brasiliens) 三〇、六六頁。ハックウェル著「著前掲書、四六九、四七四頁參照。

南部ミンダオのバゴボ族に於ては、死者に盛裝させ、此の目的の爲めに殺したる奴隸と共に埋葬する。『墳墓には死者が生前用たりし飯炊釜に米を盛りて供へ、死者の使用せし薊醬の木箱をも据ゑる。其の他の品物は何人もこれに手

を觸れずして家に遺し、何人たりとも、其の家及び墓場に入るを禁じられてゐる。もし犯すものあらば、彼は死罰を受けるのである。斯くて死者の家は壊滅に委す¹⁾。

〔四〇〕 Zeitschrift f. Ethnol. 誌、第一七卷(一八八五年)、一二頁以下のシャールテンベルク(Schuldenberg)の所説。ハラヤラに於ける同一事實は同誌八三頁に、印度の山間種族にありては、同誌、第三卷、三七二、三七四頁のイェンクハクス(Tellinghaus)の所説。

オーストラリア及びアフリカに於ては、死者の貯へ置ける食糧品は、弔祭の際、會葬者によりて之を食ひ盡さるゝか、さに非ざれば、器具は之を破壊し、食料品は之を抛棄するの習俗が随分多い。多くの黒人族は死者を其の生前居住し居たる小屋に埋葬して、遺族は其の小屋を去り、徒らに荒廢するに任せ、若くは之を破壊する。酋長死すれば、全村移住するの風習がある。こはムアタ・ヤムヴォー、又はカセムへの如き比較的大なる國の首府にさへ行はるゝものである。ルンダ國にては、古き王都は焼き棄てられ、首都は、新たに主君の立つ毎に、其の位置を變ずといふ。又、古代ペルー人の間には國王の代る毎に、所謂世界更新すとの考行はれ、故王の宮殿は其の財寶を納めたるまゝ永久之を閉鎖し、爲めに新王は祖先の貯へたる寶を、曾て利用したことが無かつたのである。

〔四一〕 其の例は、ブホネル著『カメルーン』(M. Buchner, Kamerun) 二八頁。フリッチ著前掲書、五三五頁。バステイアン著『ロマンチ海岸』(Bastian, Ioangoküste) 第一卷、一六四頁。リヴィングストン著前掲書、第一卷、一三一頁にある。オーストラリアの就ては、バークスマン著『ボスマルタ群島』(Parkinson, Im Bismarck-Archipel) 一〇二頁以下、Zeitschr. f. Ethnol. 誌、第二一巻、二三頁、クバリー著『カロリン群島及び其の附近研究の人類學的論考』(Kuhary, Ethnogr. Beiträge zur Kenntnis der Karolinischen Inselgruppe und Nachbarschaft) 一八八五年ベルリン版、七〇頁以下、註。

〔四二〕 キック著前掲書、二二八、二三四頁。ヘーテルマン氏報告、第二一巻、(一八七五年)、一〇四頁に於けるリヴィングスト

ンの所説。

以上に據つて吾人は、自然人の間に於ける文化始源の成立と進展とは、最大の困難の隨伴してゐたことを知るのであるが、それと同時に忘るべからざることは、此處に選り出して展示した諸觀察は、極めて種類の異なる民族、文化發展の度を異にせる民族の間より取り來れるものであるといふことである。かの大陸に住むオーストラリア土人にして、もし獨力にしてトンガ族、タヒチ族の段階にまで向上せんとするならば、よく幾千年の長日月を要したことであらう。ブッシュマン族とコンゴ黒人族及びワンヤムヴェツィ族との間には、其れと同様なる溝渠の横たはるものあるを見る。然しながら余の考ふる所を以てすれば、その事が正に未開諸民族の欲望満足が行はるゝ精神的條件の長く變移せざるを語るものと云ふべく、吾人は此處に終らんとする思考範圍の一切を掲げて、種族もしくは民族の尙ほ未だ構成せられざるに先立ちて、計數し得べからざる程の幾千年間、斯かる状態が人類を支配するたるべしと推斷し得るに何等の疑義があり得ない。

然り而して斯かる状態が實に經濟の正反對を意味するものなるは、吾人が知り得たる一切よりして、これを斷ずることが出来る。蓋し經濟とは常に貨財準備によつて伸介されし人類の共同である。經濟は節制にして、單に目前に對する顧慮のみならず、又將來に對する心懸けである。節約せる時間分割であり、合目的なる時の順序である。經濟は勞動と、物の估價と、其の消費の統制と、財産蓄積と、文化獲得物の子々孫々への傳承を意味してゐる。而してこれ等一切のこと、之を彼の比較的進歩したる自然民族に就きてさへ求めんと欲して、遂に失敗に終らざるを得なかつたこと、幾度であつたらうか。然るを況んや、野蠻最下級の民族の間に求めんとす、殆ど其の萌芽をすら認め得ないのである。今もしブッシュマン族又はヴェツダ族の生活より、火の使用及び弓箭を除き去らんか、其處に個人的食料探求てふことより以外

の何物が残り得ようぞ。彼等の各人は全く孤立無援にして、赤裸に、何の武器を帯ぶるなく、その仲間と共に、狭き區域を彷徨する様、宛として同一場所に出没する野獸と異るなく、兩足を手と同様の輕快さもて働かして物を攫み、木に攀ぢつゝある。男女を問はず、手にて捕へ又は爪もて地中より掘り出したる下等動物、塊根、果實を生たまのまゝに之を食ふ。彼等は集つて小大の群を形作ることありと見れば、何時の間か分れて四散する。こは牧場又は獵場の豐饒なるか否かによつて然るのである。斯く、時に聚團を形成することありとは云へ、それは決して強固なる共同體を形作るに至らず。然もかの聚團は共同體とはならない。それは各個人の生存を輕易ならしむるものではない。

〔四三〕 アンドレー著『人種學上の類似と比較』(Andree, Ethnogr. Parallelen und Vergleiche) 新版、二二八頁以下の『把握機關としての足』

此處に描いた畫圖は、決して愉快なものではあり得ないかも知れぬ。さりながら比較研究より得來りたる結果は斯くの如き畫圖を構作するの餘儀なきに立ち至らしめたのである。其處には一點一畫たりとも、假構されるものはない。野蠻最下級の生活より確かに文化的なりと評し得る事柄、即ち武器と火との使用だけを除去去つた迄である。比較的開化せる自然人の間に於て、極めて多數の非經濟的なことが行はれてゐて、かの經濟原則を意識的に應用することが、常に、通則といはんよりは、寧ろ例外例に屬してゐることを認めねばならないとすれば、所謂かの『低級狩獵民』及び上述せる其の先驅者の間には、經濟てふ概念は之を一般に適用し得べからざることとなるのであるまいか。斯くの如くにして吾人は遂に、彼等が尙ほ未だ經濟なるものゝ發生せざりし經濟以前の進化段階に立ちつゝあるものなるを推論せねばならぬことゝなつた。然り而して何れの兒にも命名の要ありとせば、余は此の段階を稱して、個人的食料探求時代¹⁾と呼ばんと欲するのである。

1) die Stufe der individuellen Nahrungssuche

此の個人的食料探求より、如何にして經濟なるものゝ發展し來りしかは、今日にありて之を推測することは殆ど出来ない。さりながら、直ちに享樂せんがための天產物の占取に代つて、距れる目的を指す生産が現はれ、本能的の身體活動の代りに、目的を意識せる體力の使用としての勞働が生ずるに至る其處にこそ、轉回點が存すべきであると云ふのが、最も想到し易い考へではあるまいか。されど實はそれは唯だ純理論的な斷定たるに止まつて、何等吾人に利する所がないのである。惟ふに、自然人に於ける勞働ほど臙ろげなる怪しき姿を有するものはなく、愈々これを溯及し行かば、遂にはその形式より云ふも、又その内容より考ふるも、益々遊戯に近きものとなりるのである。

最も有り得べく考へらるゝ所に依れば、人類をして單なる食料探求以外に超脱せしむるに至りし抑々の根源は、高等動物にも見るを得る衝動に存するのである。即ち殊にそれは模倣衝動及び實驗衝動である。例へば家畜の馴致に就いて見るも、それは本來實用獸を以て始まれるものには非ずして、單に娛樂の爲め、若しくは神の禮拜の爲めにと考へられるたる種類の獸より始まれるものである。又工業行爲にしても、それは彩身、文身、身體局部の鑽通及び其他の畸形より起りて、次第に進化し、遂に裝飾、假面、木皮描畫、畫文字及び其れに類せる戲を作り出すに至れるものであらうと考へられる。此の際迄なく現はれ來る不可思議なる傾向と稱すべきは、彼等の好んで獸類を模寫せんとすることであるが、これは元來獸類が未開人と常に親しく相交渉し己が仲間の如く思はれる爲めである。此處にその數例を取り來たらんか、かのブッシュマン族、アメリカ・インディアン、オーストラリア族が一部は太古の時代に於て岩石に畫きたる繪及び彫刻は、殊に多く獸類と人間とを表はして居り、爰燒物、木彫のみならず、編細工さへ、其のはじめは獸類の形を表はし出さんとしてゐる、更らに進みて日用器具(壺、足掛等)を製作する程にまで進化してゐる民族にありてさへ、尙ほ且つ獸の模様模様の著しく目に立つものあるを見るのである。それ而已ならず彼等の舞踊に於ても亦、最も主な役割を演ずるもの

は獸の運動及び叫聲の模倣である。即ち均齊を保つて繼續して行く凡ての運動が律動的に組み立てられ、更に音楽と唱歌と合して渾然たる統體に融合されることが、以て觀者をして其處に又動物の動作及び叫聲を髣髴せしむるのである。

〔四四〕グロース著『歌類の遊戲』(K. Groos, Die Spiele der Tiere) (一八九六年イエナ版) 参照。

〔四五〕アンドレー著『人種學上の類似と比較』(二五八—二九九頁。エーレンライヒ著前掲書、四六頁以下)。

〔四六〕シュタイネン著前掲書、二三—二四頁以下、特に二四—二五頁以下の興味ある所説を参照すべし。

〔四七〕其の例は人種學叢書の何れにもある。もしそれに對して疑を挟む人あらば、乞ふ次の諸著を繰げ。ゴッス著『中央エスキマ人』(F. Bous, The Central Eskimo) 一八八八年、ロシントン版。スミソソン學會書記宛人類學年報第六十號 (Sixty annual Report of the Bureau of Ethnology to the Secretary of the Smithsonian Institution) 一八八四—八五年度。クラーク、シュ

メルツ共著『蘭領ニューギニア西北海岸の人種學的記述』(Ethnographische Beschreibung van de west-en noordkust van Netherlandisch Nieu Guinea door F. S. A. de Clercq en J. D. E. Schmeltz) 一八九三年、ライデン版。ヨースト筆『グイヤナ人種學論』(Joest, Ethnographisches aus Guyana) (Intern. Archiv. f. Ethnogr. 誌第五卷増刊)。更らにシュタイネン著前掲書二六—二七頁以下。及びフリッチ著前掲書、七三頁。シュヴァインフルト著『アフリカ内地』(Schweinfurth, Im Herzen von Afrika) 第一卷、一七八頁。グロッセ著『藝術起源論』(Grosse, Die Anfänge der Kunst) 第六、第七章を参照す。

〔四八〕グロッセ著前掲書、二〇—二八頁以下。

〔四九〕拙著『勞働と律動』中の詳細なる所論を参照せんことを希望す。

かるが故に、技術は遊戲の中に完成する。斯くて技術は遊戲的のものよりして極めて徐々に效用あるものへと移行行いたのである。斯くて從來學者の考へ來りし段階順序は正に正反對とならざるを得ない。即ち遊戲は勞働よりも古く、藝術は收益生産に先立つのである。かの高等なる自然人の間に於ては、夫等勞働と遊戲とふ二要素は已に互ひに分離せんとしつゝあれど、しかも尙ほ彼等が重要な勞働を營まんとするに當りては、必ず先づ舞踊して而して後に勞働する

か、もしくは勞働の後に舞踊するのである(戰舞、獵舞、收穫踊)。而已ならず歌ひつゝ勞働する。

〔五〇〕『バプア族の用ゆる器具、武器の多くの調査すれば、その何れにも、小なる裝飾を施しありてそれを作れる人の美感を偲ばしむるものがあるし、普通一般の實用でふことを超越しあるある物を含みざるものとは極めて稀にして、殆んど絶無なりと云つてよい位である』—セモン著『オーストラリアの叢中及び珊瑚海岸』(Semon, Im australischen Busch und an den Küsten des Korallenneers) 四二—六頁以下。

經濟なるものを民族の進化に溯つていよ／＼古く探り行かば、益々非經濟なるものに化し去るが如く、勞働も亦、窮極は其の反對なる非勞働に解消して仕舞つた。尙ほ其の他の更らに重要な一切の經濟現象にても、斯くの如き探究を續け行かば、多分同様なる結果に歸して仕舞ふであらう。而して其の中にあつて唯だ一つ永久にして不變なるものが存する。これ取りも直さず「消費」である。蓋し人類には何時如何なる所に於ても欲望なきを得ず。而してそれを満足させ得は濟まし得なかつたのである。さりながら人類の欲望なるものも、夫れが經濟的に表はれ來る範圍に於ては、自然的に存するものは極めて小部分に過ぎず。即ち自然的必要よりして生ずる消費と云はゞ、それは僅かに食物に關するものゝみにして、其の他に至つては凡べて、文化の所産、人間精神の自由なる創作的行爲の結果なのである。而して之れ無くんば、人類は永久に、球根を穿返り果實を探し廻る獸の状態を脱し得なかつたであらう。

斯くの如き事情よりして、吾人は、個人的食料探求の時代が終つて、經濟の始まる一定時點を劃する事を斷念せざるを得ない。抑々人類の文化史には轉回點てふ如きものゝ存し得るものに非ず。一切萬事は、草木のその如く、萌え出でては何時の間にか萎れ行つて仕舞ふ。變らぬ姿を持つものとても、實は自然と人間界との奇蹟を吾人の鈍き眼に解しよからしめん爲めの抽象にすぎない。經濟だとして、それは絶えず移行行く變遷の渦中にあるのである。されば、其の初めて

歴史に表はるゝに至るや、經濟は或る一定の行爲の規範により指導せらるゝ物質的の生活共同として現はれ来るものにして、此の生活共同は家族てふ人的道義的の生活共同と密接なる關係に立つて居るのである。此の家族てふ形態の下に人類は經濟を見たのであつて、其の本質を初めて言語の上で確定したのである。即ち中期高部獨逸語にては、Wirtてふ語は尙ほ「家父」と同意義にして、Wirtin は「正妻」である。又かのギリシャ語より由來せる *Ökonomie* なる語も同様にして作られたのである。(譯者註)

〔五一〕グロッセは其の著『家族の形態と經濟の形態』(Grosse, Die Formenw. der Familien die Formenn der Wirtschaft)

〔一八九六年、ライプチヒ版〕の中に、家族形式と經濟形式との關係を研究してゐる。其の際に彼は「狩獵民」「牧畜民」「農耕民」などいふ全く外面的の範疇に囚はれてゐて、經濟の内的生命、殊に家計には、十分の注意を拂つてゐないのである。

(譯者註) 中期高部獨逸語(Mittelhochdeutsch)とは一〇〇年頃より一五〇〇年頃までの南方獨逸語である。そして「經濟」といふことは獨逸語では今日「Wirtschaft」と云つてゐるが、語尾の「schaft」は英語の「ship」と同一の後綴で、Wirtといふのが肝腎の語幹となつてゐるのであつて、それは中期高部獨逸語の時代には「家父」といふ意味になつてゐた。であるから「經濟」といふことは、元は「家族の生活共同」といふ意味であつたといふことが解る。「Ökonomie」は英語の *Economy* と同じで、それも「經濟」といふ字である。

故に共同生活的な共同體ありて、其の目的に適へる物の生産及び使用がかの經濟原則に準據して行はれてゐる所、其處に經濟の事實の存在してゐるものと推定し得るであらう。而して斯かる状態は、比較的高等なる自然人の間に於ては、已にそれを認めることが出来るとは云へ、大部分はなほ、個人的食料探求てふ經濟前期時代を偲はしむるものである。斯くて經濟は、謂はゞ、此處彼處に僅に首を擡げらるるにすぎざる状態にある。

文化の低級にある何れの種族にても、男女兩性への勞働の分配は習慣により確然規定されてゐるものなるが、それに

は性に依る天賦の差のみが據點となつてゐるものではない。即ち少くとも總じて女子には容易な勞働が課せられるものなりとは云ひ得ないのである。文明人の普通の個別經濟に於ては、謂ふべくんば横の區劃ありと稱すべく、男子には生産的勞働、女子には消費の制馭てふ役目の課せられつゝあるに、自然人の經濟は、それを縦の區劃なりと稱すべく、即ち男女とも生産に従事し、時には消費さへ各別の範圍を有してゐることすら珍しからぬ状態にある。殊に最も著しき事實は、植物性食糧の獲得と調理とは全然女子の務にして、小屋を建てることも多くは女子の肩上に課せられ、男子は狩獵及びそれに依つて獲られた動物性材料の加工をその任務となしてゐることである。牧畜の行はれてゐる所にては獸類の監視、隔堵の建設及び搾乳等は男子の仕事となつてゐる。此等の區劃たる極めて截然たることも珍らしくなく、爲めに其の家族經濟を分類して、特殊男子經濟及び特殊女子經濟となすことが出来る位である。

ブラジルのシンダー族の食用植物に關する興味ある所論の中に、シュタイネン¹⁾は、此の種族の古き進化の結果を「男子は狩獵を營んだが、かゝる間に女子は耕耘の法を發見した」と云ふ言葉もて云ひ表はしてゐる。野蠻最下級のパロロ族の間に於ては、女子は尖杖を装うて森に赴き、塊根、球莖を求め、木に攀ちて椰子の實を採り、夫等を重き荷として家に携へ歸るの時、男子は獸類を追迹してゐる。彼等よりも進歩せる種族にあつては、女子は耕耘と、マンデイオカ^(譯者註)の栽培に従事し、『尖れる木片もて雜草を除き、棒を地に突き刺してマンデイオカを植を付けるのである。而して毎日、自分等の需要品を集めては、これを背負籠に詰め、以て家に擔ひ歸る』。家にあつては、彼等は果實を炊き、薄焼麵麩を焼き、椰子の實を焙り、酒を醸すのである。之に反し男子は狩獵、漁撈を營むが、又獸肉、魚肉の調理をもなし、それに必要な焼網をも編む。更らに男子が狩獵用具をも作るのであり、狩獵、漁撈が男性をして、切つたり、削いだり、磨いたり、刺したり、裂いたり、掘つたりする爲めの各種の道具を製出せしむるに至ると同時に、女子が炊事用の土器

1) K. von den Steinen

を作るといふことを附言するならば、男女兩性に就き自然に區別せられたる生産範圍が存し、其の各々の範圍に其の全體の勞働行爲が獨立に行はれてゐることを知るのである。然れども單にそのみに止まりゐるものに非ずして、消費も亦、主なる點よりして各別に區別されつゝあるのである。これは彼等の家族の間には相集りて食事をなすの風、絶えて存せざるに據つても知ることが出来る。各個人は夫々他人より離れて唯だ一人食事を取るの風があり、彼等は他人の食事をしつゝある際にその邪魔をなし、又は他人の面前に於て食事をなすことを非禮の甚しきことと考へつゝあるのである。

〔五二〕『中央ブラジルの自然人記』(Unter den Naturvölkern Zentral-Brasilien) 二〇六頁以下。

〔五三〕前掲書、一九七頁以下、二〇七頁以下、三一八頁。

〔五四〕シュタイボン著前掲書、六九頁及びエーレンライヒ著『ブラジル人類學論考』一七頁。ホルネオ土人に就いては Journ. of the Anthropol. Inst. 誌、第二三卷、一六〇頁のホース(Hoes)の所説。

(譯者註) マンデイオカとは、又、マニオークとも稱し、西印度及び南米に産する灌木にして、其の塊根は澱粉に富み、それより製したる麵粉は風味よく滋養分に富む。

それと似たる個人經濟的特徴は、已に完全なる家計を營むに至れるかの北アメリカの印度族の間にすら、尙ほ之を認め得るのである。彼等には土地に對する特殊所有權てふ觀念なきに拘らず、『彼等の家又は家族の中にある物にして、一定の所有者なきものは一つも之を見ることが出来ない。家族の成員は皆、何品が己れの所有に屬するかを知り、牛馬の大より犬、猫、小貓、雛鶏の小にまで及ぶのである。兩親は其の兒に贈物をなし、兒等も兩親に贈物をする。父が狩に赴かんとて、その馬の貸與を己が妻子に乞ふことすら決して珍らしいことでは無い。小貓、雛鶏の巢には、その小貓、雛鶏と同數の所有者ありて、一匹に一人といふ如き割合の又強ちに稀ならざるを見るのである。人あり、もし雌と共に牝

鶏を購はんとせば、其の家の多數の兒等に交渉するを要する場合の一再ならざるを見る』。『一夫多妻の俗の行はれるるアメリカ・インディアン族の間に於ては、妻毎に特別の小屋を建つるを常とし、よし共同生活を營む民族にありても、尙ほ妻毎に少くもその竈を別にしてゐるのである』。

〔五五〕ヘックウエルダー著前掲書、二五三頁。

〔五六〕ワイツ著『人類學』(Waitz, Anthropologie) 第三卷、一〇九頁。

ポリネシア族、マイクロネシア族の經濟、又それと同様なる基本特徴を示してゐる。唯だ僅かに異なるは狩獵に代ふるに漁撈と小家畜の牧養とを以てしてゐることのみである。男女によりて其の庖厨を別にするは南洋地方に於ても見るを得る風習にして、又男女各別に食事を取るの俗も同様である。即ちフィジー諸島にては、戶外に於て熱したる石もて調理する如き料理の調製は男子の役目である。『これは現今にては、豚の肉を炙る際にのみ限られ居れども、往時は人肉調理も亦、男子専門の業となつてゐたのである』。バラウ諸島に於ては、タロの料理、(譯者註) 甘き食物の調理は女子の務であつて、肉の料理は男子に課せられてゐる。オセアニア洲の大部分に於ては、『男女が食事を共にし、又は男子の調理せるものを女子が口にするには禁ぜられ、同一食器に盛れるものを他人と共に食することも亦、殆ど同様競々として、避へべきこととなつてゐる』。

〔五七〕パーキンソン著前掲書、一一三、一一二頁(ニューホームメンに就いて)を参照。

〔五八〕マズレル著『南洋事情』(Baseler, Südsee-Bilder) 二二六頁。

〔五九〕クパーリー著前掲書、一七三頁。

〔六〇〕ラッツェル著『人類學』第一卷、二四〇頁。

(譯者註) タロ(Taro, Taro)とは、濡した羽根の上に塊根を載せて焼いた食物である。

多くの黒人^{ネグロ}族の経済の中にも、男女両性による生産及び多くの消費部分の峻別といふことが表はれてゐる。否^{イナ}、それのみならず、斯る区分は更らに延いて財産及び財産権上の交換交通にまで及んでゐる。吾人の最も信頼し得べき観察者の一人ポグゲ¹⁾は、ゾング^{シゴ}黒人^{ネグロ}族に就き、簡潔に要を摘んで、「女子は其の夫の経済と相並んで、自己特有の経済を営む」と云つてゐる。又、バシランゲ^{バシラン}族を記述しては、「食事に當つては家族の各員は決して他の人のことに就きて思ひ煩ふものに非ず。家族の一部が食事するに際しても、他の一部は勝手氣儘に出入して、何等の顧慮をも爲さぬのである。されど女子は幼児と食事を共にするを常とする」といひ、最後にルンダ^{ルンダ}地方に就き次の如く述べてゐる。『隊商の一村に宿泊する時は、通常の場合には、其の地の女子は植物性食糧と鶏とを賣りに來、之に反して山羊、豚、羊は通常は男子によつて賣られる』。ウォルフ²⁾の敘ぶる所、またそれと似たものがある。即ちイバンシーの市場にては、凡べての農産物、布、産、焼物は女の手にて、山羊と酒とのみは男の手にて取扱はれた、と。乃ち知る、男女は其の各自特殊の労働生産物の所有者にして、これを獨立に自由に處分し得るものなることを。已に述べたるが如き氏族制度を有する種族の間に於てさへ、なほ且つ動産の大部分は各個人の特別所有權に屬し、夫等個人が自由なる状態にあると、不自由なる地位にあると、乃至男たると、女たるとを問はぬのである。

- 〔六一〕 男女食事を異にするといふことに就きては、スタンレー著『ヴィングストン運道始末』(Stanley, wie ich Livingstone fand) 第二卷、一七四頁。ナハティガ^{ナハティガ}ル著『サハラ及びスーダン』(Nachtigal, Sahara und Sudan) 第一卷、六六四頁——更にトナー著前掲書、一〇頁以下。
- 〔六二〕 『ムアマ・ヤムヴォー領域』(Im Reiche der Muta Jamwo) 四〇頁。
- 〔六三〕 ウィンストン著『獨逸國旗の下に縦断するアフリカ』(Wissmann, Unter deutscher Flagge quer durch Afrika) 三八七頁。
- 『ムアマ・ヤムヴォー領域』一七八、二三一頁。

1) P. Pogge 2) L. Wolf

- 〔六四〕 『ムアマ・ヤムヴォー領域』二九頁。
- 〔六五〕 ウィンストン等共著『アフリカ内地』(Wissmann etc, Im Innern Afrikas) 二四九頁。尙ほリヴィングストン著『新傳道旅行』(Livingstone, Neue Missionsreisen) 第一卷、一一五頁。第二卷、二七六頁以下。パウリチケ著『北東アフリカ人種學』(Paulitschke, Ethnographie Nordost-Afrikas) 第一卷、三三四頁。Deutsche Rundschau 誌、第五九號、二九〇頁のヘヒュー・ノ・ノ・ノ (Pechuel-Loesche) の所説。
- 〔六六〕 最早、野蠻最下級に屬しゐるとは云ひ得ざるワニヤムウェツィー (Wanyamwezi) 族の家族及び家計に就きて、バートマン (Barton) は次の様なことを云つてゐる。『子供は滿二ケ年間哺乳するのであつて、男の兒は五歳に達すれば已に弓矢を取扱ふことを覚え、尙ほ幼くして已に早く家畜を養ふことを知る。十歳をすぎれば、一人前の牧畜者となり、父より獨立し、煙草畑を耕し、己が小屋を建てる。女の兒は結婚適齡期に達するまで、父の小屋に止まれども、その期に達すれば、同年輩の者が七人より十二人位まで集まりて一つの共同小屋を作り、其處にて各自其の情人を迎ふるのであるが、父母はそれに對して何等の容喩をしないのである。…家族間の關係は總じて極めて薄弱にして、例へば夫は海岸地方より品物を澤山携へ歸るとも、其の極く少部分をすら尙ほ己が妻に與へんとはしないのである。又、妻の方にしても、相續せる物品をその夫に與ふことを爲さず、假令夫が飢ゑて死なんとしつゝ、あるも、恬として顧みない。男は牛、山羊、羊、鳥類を飼養し、女は穀物、栗實の收穫に従事してゐる。而して男女共に各自の使用料として煙草を栽培すれども、夫が煙草を使ひ盡して其の妻の分の貯を借りんとするも、妻は決して之れに應じない。——此の國にては、男女両性が、食事を共にすることなく、小兒にても男兒ならば其の母親と之れを共にすることなきものである。』
- 〔六七〕 トナー著前掲書、四四頁以下。

男女の間に生産労働を分割することは、アフリカに於ては、其の巨細の點に於ては、種族によつて其の趣を異にしてゐるが、此の地にても、耕耘及び凡べて植物性食糧の調達は普通女子の任務に屬し、狩獵、牧畜、揉皮、織布は男子の仕

事となつてゐる。此の秩序を維持すべく迷信的の慣習を以てすることが、決して珍しくないものである。ウガンダ地方には、搾乳は徹頭徹尾男子の仕事とし、女子が牝牛の乳房に觸るゝことを嚴禁してゐる。ルンダ國には、更らに落花生油を取る時には、男子の其の場にあるを許さぬのである。蓋し男子のそれを窺ふあらば製作の結果宜しからずと信じられ居るによる。旅行者にして、彼等種族の間より雇へる人足に命ずるに女子のなすべき種類の仕事を以てすれば、彼等は必ずそれを拒む。十二歳になれる男の兒が、ある歐人に薪を持ち來れと命ぜられし時、『お母さんを呼んで來ませう』と答へたといふことである。リヴィングストンは、或る地方にて女子が居なかつた爲め、眼前に穀物を有しながら、然かもそれを粉にすることを得ずして、男子は飢餓に苦みつゝあつたと云つてゐる。男女各自の間に、その消費を別にし居ることは、半ば宗教的性質を帯びてゐる食物禁止の習慣が彼等の間に行はれてゐることによつても十分に確證し得るものである。即ち其の食物禁止の習慣によれば、一定の種類の肉の享樂は、これを女子に禁じて男子にのみ許してゐるのである。

- 〔六八〕 特に、フリッチ著前掲書、七九頁以下、一八三、二二九、三二五頁参照。リヴィングストン著「新傳道旅行」第一卷、七二、一一一、三二七頁以下。現今にて詳しくは、シュルツ著「アフリカの工藝」(H. Schurtz, Das afrikanische Gewerbe) 一九〇〇年、ライプチヒ版七頁以下、及びトナー著前掲書、五、三七頁以下。
- 〔六九〕 エーテルマン氏報告第二卷(一八七九年)、三九二頁のエミン・バイ(Emin Bey)の記事。
- 〔七〇〕 ウィスマン、ウォルフ等共著「アフリカ内地」六三頁。
- 〔七一〕 前掲書、一八〇、二六六頁——アメリカ・インディアンにも、同様の風がある。ロイツ著前掲書、第三卷、一〇〇頁。
- 〔七二〕 ボリネシア人中には、尙ほ一層盛んに行はれてゐる。アンドレー著「人種學上の類似と比較」一四頁以下参照。
- 〔七三〕 此の經濟の獨得の發展に就きてはナハティガル著「サワラ及びスーダン」第三卷、二四九、一六二、二四四頁を参照せよ。

— 男女の活動範圍が分割されてゐることは更らに進んで、兩性間の精神生活にまでも及んでゐる。カライマン族の多くにては、女子は多數の物品に對して、男子の使用してゐる名とは全く別名を以てこれを呼び、従つて男子特有の言葉と、女子特有の言葉とを分けて考へ得る程である。而して此の現象は、最近にて兩性の社會的地位の差等及び彼等の活動範圍の峻別てふことに歸すべきものであると云はれてゐる。Intern. Archiv f. Ethnogr. 誌、第一〇卷、五六頁以下のザッセル(Gappert)の所説参照。

總じて蠻人の小兒等は極めて早く獨立して兩親の膝下を去り、二三年の間は獨得の共同生活を營むことも屢々ある。然し既婚の男子にもこれが行はれる。此の共同の小屋は種々の年齢の男子の間に存し、未婚の女子またこれを有する場合多く、其の弘布の範圍極めて廣くして、アフリカ、アメリカ、殊に太平洋洲に之を見る。而してそれは集會場、仕事場、娛樂場となり、青年男女の爲めには寢る場ともなり、旅行者の宿泊所となる。斯くて此れが共同家計の完成に對して一層の障礙たること言ふ迄もなく、殊に家族が多數の住居パーティーに分散する時、然りである。例へばカロリン群島中のヤップ島にては、何れの家族にも、未婚者の寢小屋の傍に家父の住む主家あり、各妻夫々其の住宅を異にしてゐる。而して「食物の調理は住宅内にてなすを禁じられてゐる、且つ家族員各自の爲めの各別の小屋を設け、其處が火焚場となり、臺所となつてゐる」。ニューヘブリデス群島のマレクラ島に於ける亦然り。經濟的個人主義も茲に至つて其の極に達せりと云はねばならぬのである。

- 〔七四〕 クバーリ著「カロリン群島の研究の爲の人種學的論考」(Kubary, Ethnogr. Beiträge zur Kenntnis des Karol. Archip.) [ライデン版]、三九頁。
- 〔七五〕 Journal of the Anthropol. Institute of Great Britain and Ireland 誌、第二三卷(一八九四年)、三八一頁。

ルー族の間に於ては、一家計を維持して行き得る成年者には殆んど皆、各別の小屋が建てられてゐる。即ちその男子の爲めに住居一つ、其の母の爲めに一つ、其の妻の一人々々及び其の他の成年の家族成員の夫々に住宅一つ宛を構ふ。此等の小屋は集りて半圓形を畫き、其の中心に家長の住宅を有してゐる。妻は夫々、各自の畑と器具、貯藏室と乳牛を所有してゐる。

〔七六〕二三の例證を擧ぐれば、フンティレン群島の例は、シュマルケ著『原始家族』(Starcke, Die primitive Familie)四三頁。ミダナオ島の例は、Zeitschr. f. Ethnol. 誌、第一七卷、一二頁のシャードンベルク(Schadenberg)の所説。バグバ族の間に於ける例は、ウィスマン著『アフリカ内地』二〇九頁。モンアツツ族の間に於ける例は、Zeitschr. f. Ethnol. 誌、第五卷、一二頁のシュロインフルト(Schweinfurth)の所説。及び同人著『中央アフリカ』(Im Herzen Afrikas)第二卷、一九頁以下。カサリー著『バースト族』(Casalis, Les Basoutos)一三二頁。リヒテル著『南アフリカバントゥー黒人種の經濟』(Richter, Die Wirtschaft der südfr. Bantuneger)一〇頁以下。

尙ほいくらでも容易に追加することの出来る此等の例から認め得らるゝ如く、比較的進歩した自然民族の間にあつてさへ、一般に、尙ほ多數の民族には個別經濟の統一的な緊密性が缺けてゐるのである。然るに歐洲の文化民族は、その太古の時代より傳へられてゐる一切の事實よりすれば、此の統一的緊密性ある個別經濟を以つて歴史に足を踏み込んだのである。家族の共同的家計は彼等自然民族には問題となり得ない。到る處尙ほ深き溝渠の穿たるゝものあり、かくて吾人にとりては怪訝に堪へ得ざる經濟的特殊生存が各個人に認められる。勿論斯くの如き各人孤立の状態に心を奪はれ、爲めに相互の爲めの勞働及び扶助と結合的要素あるを觀過してはならぬし、又夫れと同時に、此處に支配しつゝある遠心的勢力を誇大視してはならぬのであるが、此等一切の現象は一箇の共通的根源に、即ち何千年を通じて此等民

族の一切によつて行はれ來りし個人的食料探求に歸すべきものであることを否定し得ないのである。

本篇で行つた研究方法、即ち極めて異なる種族及び文化階級に屬する民族を總括して、其の經濟現象を孤立させて觀察した此の研究方法を方法的に基礎づけることは、實に此處に存するのである。

斯くの如き研究法は國民經濟學並びに社會的なる人間に關する一切の科學に於て、其の正當なことが完全に證されてゐる。尤もそれは宛然大きな我樂多小屋のその如くに人種學を滿たしてゐる雜然たる個別事實の龐大なる塊の中から、其の比較的多數のものに公分母を立て、簡単な方法で説明することが出来るといふ事を前提としてあることは言ふ迄もない。特に經濟學に取つては、勝手氣儘に構想して文化人から抽象した野蠻人といふ人形が舞臺から消え失せて、之に代ふるに眞實から引き出して來た形像を以てするといふ——尤もその眞實を我々に仲介してくれた觀察として、之れに精確さを望むことは尙ほ依然として殘されてはゐるかも知れないが——馬鹿に出来ない利益が此の方法によつて所期され得るのである。

〔七七〕ウォドン著『未開種族研究法の二三誤謬に就て』(D. Wodon, Sur quelques erreurs de méthode dans l'étude de l'homme primitif)一九〇六年リュッセル版は、勿論此の研究法に反對して、『心理學的』方法の應用を提唱してゐる。然れども悲しい哉、彼は此の發見に對しては、已に百五十年も生れ方が遅かつたのである。

二 自然人の經濟

の場合には、一民族が自然人と見らるべきか否かの争の如きは曾て殆んど生じなかつたといふことを見落してはならない。

従來の學者は、普通に、自然人を其の食糧獲得の方法如何に據つて之れを區別して、狩獵民、漁撈民、牧畜民、農耕民となしてゐた。而して同時に又それは各民族が文化への上昇に際して經過すべき經濟的進化の階段と等しいものとして信じてゐた。これ蓋し原始人は其の初め動物性の食糧より出發したが、漸く其の缺乏に壓迫せらるゝや、始めて、植物性の食料に移り行けるものなるべしといふ暗黙的假定より出發してゐるのであつて、更らに植物性食糧の獲得は、動物性のそれと比して困難なりと考へるが爲めなのであるが、然かも此の抑々の理由は輓獸並びに道具及び器具を要する我歐洲人の農業の姿を眼前に想起した事にあるのである。

然しながら斯くの如き解釋の誤れるは、そが出發してゐる前提の謬れるが如く然りである。凡ての經濟は、其の出發點を食糧獲得に有してゐることは確かであつて、然かもこの食糧獲得は徹頭徹尾天産物の土地的分布に依存してゐる。人間は其の初めよりして先づ以て植物性の食料を頼りとしてゐたのであつて、木實、珠果、塊根を手にし得たる地方にありては到る處、最初に之を食ひ、此等盡きて初めて生食し得る貝類、蠕蟲類、甲蟲類、益斯類、蟻類等の小動物にも赴いたのである。獸と同じく絶えず食を求めて彷徨し、食を得るや直ちに其の場にて喰ひ盡し、斯くて毫も將來に對して豫慮する所がないのである。

斯くの如き段階よりして次の段階に如何にして遷移したかは、少しく考察するに、彼等原始人が球莖、堅果を地に落せば、それ等が新らしく芽を吹くものなりといふ經驗を得ることの決して難事ではあり得なかつたことが解るのである。こは獸類を馴致し、又は狩獵へと移行行く爲めには缺き得なかつた釣鈎、弓箭を發明すると比して、難事なりとは云ふべからざるものであつた。技術の巧拙を點よりすれば、今日に於てもなほ多數の狩獵民、遊牧民は、所謂農耕民

に比して遙かに優つてゐる。否な最近に於ては遊牧民なるものは、寧ろ農耕民の退化して遂に茲に至れるものなりとの假定に到達したのであつて、獸類を馴致して、乳、卵、肉を得んとする考を原始の狩獵民が直ちに案出したる所なりとするは、これ實に事實に迂なる議論なりと云はねばならぬ。然かも況んや、かの極北地方に住める種族を除いては、如何なる漁撈民も狩獵民も又牧畜民も、食料の多少を植物界に求めるざるもの無きに於てをや。此等民族の多數は、此の爲に已に長年月間、農耕を營める隣接民族との交通を頼としつゝあるが爲めに、吾人の研究が一般的妥當性を贏ち得べき結果に到達するに必要な經濟的獨立性を失ふに至つてゐる。

〔一〕 一般に、ハーン著『家畜及びそれと人類の經濟との關係』(E. Hahn, Die Haustiere und ihre Beziehungen zur Wirtschaft der Menschen) (一八九六年ライプツィヒ版) Intern. Archiv f. Ethnographie 誌、第一〇卷(一八九七年)一八七頁以下のボス

第『文化段階としての狩獵、牧畜及び農業』(P. R. Bos, Jagd, Viehzucht und Ackerbau als Kulturstufen) を参照せよ。

それ狩獵民といひ、漁撈民といひ、又遊牧民といふ、その類型的なる例證を示し得るは、殆んど他種の食糧獲得を許さざる全く特殊なる地理的併びに氣候的事情の下に於てのみである(即ち極北地方に於ける狩獵民及び漁撈民の如き、舊世界の荒原地方及び沙漠地方に住める遊牧民の如きこれである)が故に、吾人の此の研究を進めるに方つては、此等の民族は全然之を除外して、吾人が研究の範圍をアメリカ、アフリカ、オーストラリア、マレー諸島、メラネシア及びポリネシアの回歸線の間を横たはれる地域に限ることの得策なるを覺ゆるのである。此の地域として尙ほ且つ廣大なる地域なるが故に、其の域内に於ては尙ほ、自然條件の差異が人間の物質生活上に多大なる特殊性を示現し來るのではあるが、尙ほ此等各種族間の差異は、此の物質生活の點に於てはまだ以て、例へばかのエスキモー人とポリネシア人との間に於けるが如く、然かく大いなるものあるを見ないのである。然かも此の地域に住む人間は種族の全く異なるにも拘らず、その

生活條件及び生活法の中に、吾人の注目を惹くに足る共通點が十分に存するのである。加之、此の地域は、又、人類最古の播布地域にして、熱帯の自然が豊饒なるに拘らず、否寧ろ豊饒なるが爲めに、却つて人類の進化が甚しく遅々たる地域であるやに思はれる所なのである。

此の緯度内に住む自然人は、彼等が如何なる進化の段階に属しつゝあるにせよ、其の食料の基礎を明らかに植物性の食物に置いてゐる。これ極めて簡單なる理由よりして已に然るのであつて、即ち彼等に取つては動物性の食物は古くより植物性のそれに比して遙かに獲得に困難があるからである。斯く云へばとて、多數此等蠻人の間に時々強烈なる肉に對する慾求が勃發して、其の結果人間の肉をさへも啖ふを辭せざるに至る事實と決して矛盾するものではない。蓋し人體を正常に維持し行かんには一定量の鹽を必要とするものであるが、純然たる植物性食料のみにては之を得る能はざるに、時々生肉を食すれば、鹽なくして生活し得ると云ふ事に由來するものとなすことが出来るからである。實に斯かる鹽への欲求は我々が飼養してゐる家畜中の純然たる植物性飼料を食する種類の間にも同じく存するのである。

抑々食慾なるものは、人間を驅つて活動せしめ、其の充足を得るまでは、彼等をして休みなく徘徊せしめるに至る最も痛切にして、本來から云へば唯一の欲望なのである。上に敍べたる域内に住む種族中最も低級なるものにあつては、男子は弓箭を裝つて狩獵に従ふに對して、女子は木に攀ちて果實を得、珠果を集め、又は尖杖もて地を穿つて塊根を得て食慾を満足せしめてゐる。斯くの如くなるが故に此の原始的なる食料探求に方つてすら、已に男女兩性間に分業の行はれるを見るべく、其の最高點に達するや、女子は植物性食料を、男子は動物性食料を探求するに至り、かくして得たる食物は其の場に於て喰ひ盡すを常とし、毫も他の人の飢饉を念としない。爲めに兩性間の榮養に差異を生ぜしめ、遂に延いては兩性間の肉體的發達の差異をも齎らしたのではあるまいかとさへ思はれる。

かの原始的漂泊民族が如何にその生を送りつゝあるかに就きては、茲に深く論究するを得ずと雖も、彼等の間に表はれ來るか分業は、稍々高き進化の段階にまでも繼續するものであつて、遂には極めて截然たる特徴を呈するに至り、男女に就いて嚴に區別されてゐる活動の範圍は正に第二次的なる性的特徴の一種にまで進み、それを知悉することは、やがて自然人の經濟方法を闡明する鍵鑰を與ふるものなりといふ位にまでなつて居る。殊に彼等の貨財生産の全體は殆ど之に依つて支配されてゐるのである。

今、此の貨財生産に就きて考へんか、自然人の大多數は、彼等が歐洲人の視界に入れる時、已に農耕の道を知り、これを行ひつゝあつたのである。極く僅數の除外例ありとはいへ、アフリカの全黒人族、マレー族、ポリネシア族、メラネシア族及び極北極南に棲む種族を除けるアメリカの原住民は皆然りであつた。北アメリカの印度族を以て純然たる狩獵民なりと爲すは、我々の少年讀み本によつて世に流布されし謬想に過ぎない。ミスシッピー以東、ローレンツォー川以南に住む一切の種族は、歐洲人との接觸以前、已に食用植物の栽培を知り、それ以外の地域の住民とて、少くも水米(譯者註)の粒種を集め、マンツァニタの果實を挽きて粉を得つゝあつたのである。

〔三〕 ヲイツ著『自然人の人類學』(Waiz, Anthropologie der Naturvölker) 第三卷、八頁以下。

(譯者註) 水米(Wasserreis)は學名を *Zizania aquatica* と稱し、北アメリカ及び北東アジアの河川の岸に生ずる二―三メートルの高きある蘆草の一種にしてアメリカ・インディアン(譯者註)の食料となるものである。

斯くの如く然りと雖、自然人の農耕は全く彼等に獨得なる一種特別のものである。先づ以て彼等は、吾人が農業には缺くべからずとなす道具、即ち鋤を知らず、又、車輪、車、輓獸を心得てゐない。而して最後に牧畜を以て農業の一部なりと考へてもゐない。土地の施肥は行はれてゐる所時に無きには非ざれども、極めて稀にして、灌溉の設備に至つて

は、僅かに米及びタローの栽培に際して行はれるのみであり、一個所の養分にして取り盡さるれば、他の土地に替へるといふを常態とするのである。これ土地に對する特殊の私有財産なるものゝ存するなく、土地は種族又は村落共同體の共有財産となつてゐるといふことが、それをして然かく容易ならしめてゐるのである。而して農耕のことは殆ど全く女子の仕事と云ふべく、たゞ土地を新たに開墾する場合にのみ、纔かに男子の助力を俟つばかりである。

〔四〕 ハーン著前掲書、三八八頁以下。尙ほ併せて Zischr. f. Sozialwissenschaft 誌、第七卷、二五頁以下、九七頁以下、一九〇頁以下、二四八頁以下のラツシュ (R. Lusch) の周到なる研究を参照せよ。

〔譯者註〕 タロー (Taro) は濕地に耕作せらるゝ塊根であつて、サンドウイッチ諸島に産し、其の土民はそれよりポエー (Po) と稱する主要食料を作る。

近時、學者は自然人のかゝる農耕を稱して『耒耜耕作』と呼んでゐる。蓋し、其の農耕に於ては柄の短き撞木鋤が主要なる道具となつてゐるが故である。しかし二三民族の間には原始的なる土掘り棒が尙ほ依然として使用されてゐるのに接する。植物生産の基底を形作つてゐるものはマニオック、^(譯者註一) イヤム、^(譯者註二) タロー、^(譯者註三) バターテ、^(譯者註四) 落花生の如き熱帯産の塊根類より、芭蕉實、各種の瓜類、豆類、並びに穀類にては米、^(譯者註五) デュラー、^(譯者註六) 玉蜀黍等に及ぶ。米は南部支那を其の本地地と見るを得べく、デュラーはアフリカを、玉蜀黍は明らかにアメリカをそれと見る事が出来る。尙ほ最後に西穀米椰子樹、大粟椰子樹、椰子樹、麴果樹等の熱帯産果樹も亦、彼等の農業の範圍に屬するものである。

〔譯者註一〕 マニオック (Manioc) は西インド及び南米に産する灌木にして、その塊根は大にして燕膏の如く、澱粉に富む。

〔譯者註二〕 イヤム (Yam) は鐘狀六瓣の花蓋を有し、その丸く太き塊根は食料に供せしめ得べく、東西兩印度に於て一般の食糧となりある芋薯 (いも) の一種。

〔譯者註三〕 バターテ (Batata) は東西兩インド、アフリカ、南歐に産する蔓草にして、馬鈴薯に似たる塊根を生ず。

〔譯者註四〕 デュラー (Durrah) はアラビヤ及び北アフリカに産する玉蜀黍の一種。

道具の不完全はかの耒耜耕作をして常に極めて小さい地域の土地を耕やさせ得るにすぎない。故に其の外見よりするも、又その經營の方法よりするも、そは我が國に行はれつゝある園藝と大差なきを覺ゆるのである。畑地は多く何段にも分割され、模範的に培はれ、雜草が見事に除かれてゐるのを珍らしとしない。而して野獸の侵入を防がんと爲め、全體に繞らすに柵を以てしてゐる。熱帯地方に於て收穫上特に恐るべき穀食鳥を防ぐべく、マレー人の間には巧妙な案山子が立てられ、アフリカにては特別に番舎を畑の傍に建て、若き娘をこれに住まはしめ、大聲に叱呼せしめて獸類を驅逐することが多い。土地は一度收穫を終れば、其の儘遺棄されることが多いが、既に一定の輪栽が行はれてゐるのが普通となつてゐる。例へば、コンゴ流域地方に於ては、新たに開墾した畑には、最初先づ豆類を植ゑ、その收穫を終るや、稗を播く。その豆と稗との間に、マニオックの挿苗をなすことも亦珍らしくなく、一年半乃至二年後に始めて、十分の收穫を得る事が出来るのであつて、塊根の硬化し始めざる間は、其の土地を使用することが出来るけれども、漸く硬くなり初むれば、更らに新らしき開墾地を手に入れねばならない。ニューボムメルンにては初めにイヤムの塊根、次いでタロー、最後に芭蕉樹、甘蔗等が輪栽せられるのである。

〔五〕 コンゴ地方のアンゴラに於ける耒耜耕作の記事は、ホッケ著『ムアマタムウォー領域』(Pogge, Im Reiche des Muata Janwo) 八頁以下、及びウキスマン著『ドイツ國旗の下に縦斷せるアフリカ』(Wissmann, Unter deutscher Flagge quer durch Afrika) 三三三頁以下。モンパツツ族に於けるものは、シュロインフェルト著『アフリカ内地』(Schweinfurth, Im Herzen von Afrika) 第二卷、九一頁以下。ミンダナオに於けるものは、Zischr. f. Ethnol. 誌、第一七卷、一九頁以下。ニューギニヤに於けるものは、フィンシュ著『サモア群島紀行』(Finsch, Samoafahrten) 五六頁以下。ニューボムメルンに於けるものは、マイキンスン著『ウスワレク群島』(Purkinson, Im Bismarck-Archipel) 一一八頁以下。南米に於けるものは、マルティウス著『アメリカ

人種學 (Martius, Zur Ethnographie Amerikas) 八四頁以下、四八九頁以下。又、ラッセルの前掲記事一一四頁以下をも参照。

旅行者の屢々説く所によれば、斧鉞を入れぬ自然林を脱け出でて、土人が美しく耕せる畑地に突然出會する其の時ほど、深き印象を得るものはないとの事である。アフリカに於て、人口比較的密なる地方にありては、斯くの如き耕地の數時間程を續くことが決して珍らしくない。生活の不安定と打續く争鬭、掠奪の爲めに、よし種を播くとも、果して能く夫れを刈り入れ得べきかを何人も全然豫測し難き悲惨なる状態にあることに思ひ及べば、黒人女子の非常なる驅勉はいよいよ其の光彩を放ち來るものがある。リヴィングストン曾て奴隸狩の惨況を感傷的に述べて、『人間は屠られ家は破壊され終んぬ。されど畑には禾已に實りて、何人のありてそれが收穫をなす者あるなし』と。斯くの如くなれども、しかも彼等の生存は、尙ほ未だしかく強固にその土地と結合してゐるものではない。何世代も一所に定住することは、これを見る極めて稀である。彼等の家は樹枝草葉より成れる一時的建設物にして、其の他の財産はそれを背にして持ち運ぶこと極めて容易に、失ふも再び之を得る餘り難しとしないのである。故に僅かに數日を費さば、他の場所に新らしき村を建て得べく、しかも以前の村と毫も變る所なく、缺けるは唯だ毒蟲のみである。

〔六〕ラッセル著『人種學』(Tatsel, Völkerkunde) 第一卷、八五頁。マンゴツ著前掲書、一六七頁以下。

斯くの如き生活にこそ、かの耒耜耕作がうつて附けである。その耕作には小なる撞木鋏又は土掘杖以外何等の固定せる生産手段を要しない。たゞ穀物の栽培をなす地方にては、更に穂を截るべき刃物あれば乃ち足るのである。收穫物貯藏の要がない。これ氣候の關係により一年中數回の收穫を爲し得るが故である。たゞ穀物のみは、これを杖上に建てたる小なる物置小屋又は穴藏若しくは大型の土器中に蓄へ置くを通例となせども、それとても成るべく早く消費すべき事となつてゐる。それは濕氣、穀蟲、白蟻等によつて侵されて仕舞はない爲めである。黒人族が豊饒に際して非常に多量

の麥酒を醸す所以が此の點にあると云ふのは、リヴィングストンの説である。

〔七〕『南アフリカ新傳道旅行』(マルティン譯)、第一卷、六〇頁。

耒耜耕作は嘗に今日にても尙ほ、最も廣く行はれつゝある農業法の一つであつて、全中央アフリカ(北緯十八度より南緯廿二度に至る)、南米及び中米、オーストラリア諸島、後印度併びに東印度群島の大部分に行はれてゐる。而してそれは元來、女子の仕事であつたものらしく、然かも女子の仕事として文化促進に資する偉大なる力なのである。女子は太古より行ひ來れる塊根の採取より、遂に此の耕作に到達したものであることは明らかな事である。従つて女子の耕作の主要物は澱粉に富める球莖及び塊根である。斯くして女子は男子に全く缺けてゐた技術上の經驗を得るに至つたのである。かくて女子の勞働は、やがて生活需要の最も重要な部分を供給することとなり、依つて以つて恒久的なる家族組織の基礎が据ゑらるゝに至つたのである。此處に至つて男子の任務は、其の家族の保護と、動物性食料の獲得とを引受けることとなつた。但し狩獵に適する動物の餘り多からざる地方に於ては、男子も亦、農耕に従事すること、例へば彼のマレー族に見る如くである。

次に、第二の食料源たる狩獵及び漁撈を檢せんか、自然民族の狩獵は、その得物の不完全なるが爲め、肉食獸がその獲物を窺ひ獲る有様と大差がなかつたのである。比較的大きい動物は弓にて射、投槍もて中つるも、纔かに傷を負はせ得こそすれ、到底それを其の場に於て斃すことは出来ぬ。其處でその獸が力衰えて自ら斃るゝに至るまで、其の跡を追跡し行くを以て獵者の任務なりとしてゐるのである。然れども斯かる狩獵の方法は、時に甚しき危険なきを保し難い爲めに、此處に各種の捕獲法(陷阱・鹿柴・吊棚)を案出し、又は野獸を直接襲撃するには、種族又は全村大舉してそれを行ふこととなつたのである。かくて狩獵地に對する共同財産制の完成と、獲物の分配に關する詳細なる規則の確定とが、早

くより現はれるに至つたのであるが、此の事に就きては、此處に詳しく論述してゐることが出来ない。されど吾人に取
りて重要な事柄は、狩獵てふ食物獲得の此の部分は共力の法則に基ける或る労働の一組織を作成せしむる前提となり
るものなりてふことであつて、換言すれば原始的なる政治的共同體の成立に對して確かに重要な意味のあつた情況を作
り出す前提をなしてゐると云ふこと、即ち之れである。

〔八〕 例へばカプフェル族の狩獵法に就きては、フリッツ著『南アフリカ土人』(G. Fritsch, Die Eingeborenen Süd-Afrikas) 八
一頁以下を、南米土人のそれに就きては、マティウス著前掲書、八二、一〇一頁を見よ。

〔九〕 夫等に關する二三は、纏めてポスト著『アフリカ法理論』(Post, Afrikanische Jurisprudenz) 第二卷、一六二頁以下、及び
ラボック著『文明成立論』(パソツ譯) 三七七頁以下にあり。

漁撈に就きても亦同様な事が云はれる。殊に海岸に於て多人數の労働を俟ちて初めて製作され取扱はれ得る舟及び大
網等を使用して行はれる漁撈に於て一層然り。例へばニュージールランド人は長さ一千エルン(二百七十尺)を算する網を
編むが、それを使用するに方つては、幾百人の人手を要するものである。自然人が漁撈に就きて案出したる捕獲法は、
蓋し無數にして、釣、網の外に、矢、鎗、藥、痲醉藥が使用される。斯くの如くにして吾人が知り得る一切を綜合し來
れば、文化の此の段階に於ては漁撈は狩獵に比して遙かに規則的な性質を有し、更らに深く社會生活に影響してゐる
ものあるを知り得るのである。南洋の多くの島嶼に於ては、ある一定の曜日を期して共同の漁撈にだけ従事する風があ
るが、此の際の指揮者は同時に戦時の指揮官である。河川漁撈は殊に南アメリカに住む原始住民の間に發達し居て、其
の中には、遊牧の民ならぬ「遊漁の民」¹⁾とも稱すべきものがある。蓋し夫等は川より川へと川魚を追ひて漂泊して生活
しるるが故である。アフリカに於ても往々之に類することを見ることがある。然かも到る處、本來の漁撈は男子の仕事

1) Fischnomade

であつて、僅にポリネシアの二三地方に於てのみ、極く狭き範圍に女子が助力してゐるのを見るばかりである。

〔一〇〕 漁撈に就いては、一般にラツフェル著『人種學』第一卷、二三四、三九六、五〇六、五三一頁を参照すべし。

抑々肉類は腐敗し易きものなるが故に、熱帯地方に於ては狩獵及び漁撈の多くは、植物性食料に對する僅に一時的な
る補充を供するに過ぎぬのである。固より魚類及び細く切つた肉類を干物にし或は之を燻製することは、古くより案出
され實行されてゐる所であり、ポリネシア人、マレー人、アメリカ土人のみならず、黒人¹⁾及びオーストラリア人の間
にすら、尙ほ之を發見することが出来るけれども、斯の如く規則的に作り出される食料は極めて僅少に過ぎないのであ
つて、多數の民族の間に於ては、或る種の野獸肉は之を食し得るはたゞ上流の階級にのみ限られてゐることあり、又或
る種の肉類を食することは之を女子に禁じてゐるといふ風が可なりに廣く行はれてゐる程である。故に狩獵及び漁撈が
經濟の基礎を形作り得る種族ありとせば、それは乾製せる肉を以て隣接の農耕種族と交換交通をなし得る事情にある小部
落の林間種族又は沿岸種族にのみ限られてゐるのである。

かるが故に、自然人は早くよりして動物を馴致し、動物性の食料を規則的に得る爲めに畜養することを思ひ付いたも
のであるに違ひないと假定するかも知れないけれども、本來の意味で云ふ牧畜は、熱帯地方の諸民族に就ては、殆ん
ど言ふ事が出来ないものである。一般に行き涉つてゐるのは、我々の家畜の中では唯だ鶏のみであつて、其の外に、ア
リカにては山羊、マレー人とポリネシア人の許では豕、アメリカ土人の間には七面鳥、麝香鴨、天竺鼠がある。牛は僅か
にマレーの一部及びナイル上流地方のディンカ及びバリー族より、南方ホッテントット及びナマクアイ族に至るまでの
東アフリカの殆んど全洲を貫いてゐる或は廣い、或は狭い地帯にゐるに過ぎない。然かも此等種族の大部分は、牛を輓
獸として使用するに非ず、更らに其の乳を飲むものも又多くない。其の肉を喰はんと欲せば、彼等の多數は、他の種族

より掠奪し來れるものゝみを屠殺して、之に充つるのである。アフリカの赤道地方に於ては、間々、牡牛を騎乗及び載荷の用に充てゐる所なきにあらねど、一般には牛の所有は、黒人族にとりてはたゞ「富の代表物として、妄想的尊敬の對象」たるに過ぎないのであり、——換言すれば、單なる愛玩たるに過ぎない。

〔一〕 シュロインフルト著「アフリカ内地」第一卷、一七六頁。リヴィンゲストーン著「ザンベジ—遠征」(Livingstone, Expedition to Zanzibar) 五二八頁。ゴッゲ著前掲書二三頁。ウィスマン、ウォルフ共著「中央亞非利加」二五、一二七頁。

此の愛玩てふ性質は極めて廣い範圍に及ぶ自然人の動物飼養が之を示してゐる。ブラジル内地のアメリカ・インディアンの村は、宛かも一大動物園の如き觀を呈し、小屋の内や傍には、鸚鵡、猿などより、鷹、蜥蜴に至るまで、其の地方に棲息するもの一切を飼養し、生ける鳥類の羽根に彩色を施すの技術をすら心得てゐる。されど、此等の動物は一つとして經濟的効用の爲めに飼養されてゐるものなく、無數に飼育してゐる鶏の卵すら、之を食用に供しない。此等の動物は彼等にとりては玩具にすぎず。それを以て己が心を娯ましめゐるものである。故に此の動物飼養は、明らかに、農業よりも、寧ろ狩獵に縁近いものである。即ち馴致せる野獸が主眼なのであつて、家畜は問題とされて居ない。太平洋民族の家計に於ける家の地位も、甚だしくそれに似たものがある。即ち家は全家族の鍾愛を受け、其の仔は家婦の乳もて養はれることすら珍らしくないが、其の肉は祭日に貴人が之を食ふのみである。あらゆる自然人の間に廣く飼はれてゐる唯一の動物なる犬は、純然たる警澤獸であつて、狩獵に使用されること甚だ稀である。尤も二三の種族にあつては、其の肉を喰ふものなきにあらねど、それは食人の俗を有する種族の間のみ又行はれてゐることを知り得たのである。

〔二〕 エーレンライヒ著前掲書、一三頁以下、五四頁。マルティウス著前掲書、六七二頁以下。シュタイネン著前掲書二二〇、三七九頁。太平洋の民族にもそれと同様のことあり。ラツツェル著「人類學」第一卷、二三六頁。

隨つて大觀すれば、牧畜は、自然人の食料生産に對し何等の意義を有するものに非ざるを知るべく、彼等の經濟に於て、殆んど單に一消費的要素を形成するものたるに過ぎぬのである。

然れども此等民族の欲望は單に食物にのみ限りゐるものに非ず。彼等の中、最低級の文化に立てる者すら、彩身し又は其他の方法を以て身體を飾り、弓矢に施すに彫刻を以てす。少しく進化したるものにおいて、家屋を建て、各種の布を織り又は編み、器具に彫刻し、土器を焼く。彼等は皆、火もて食物を調理し、僅かの例外を除いては、酒を醸すことをも心得てゐる。而して此等の一切をなす爲めには、我々が簡潔に材料變形又は材料精製なる表現を以て稱し得て、其の主要點に於ては、我々が工業と名付くるものを包括してゐる多様の労働を必要とする。然り而して斯くの如き労働は自然民族の間にあつては、如何に配置されて居たであらうか、又現に如何に配置されつゝあるであらうか。

此の問題に答へざるべからずとせば、吾人は二つの事項を嚴に區別するの要を感ずる。二つの事項とは、曰く、工業の技術的側面と其の經濟的側面である。

材料變形の技術は先づ以て自然的條件に制約さるゝものなるが故に、多數の自然民族にありては、それは唯だ偏頗な發達をなしてゐるに過ぎない。彼等の道具はその初めには單なる自然物であつて、即ち石、獸骨、貝殻又は尖らしたる木片の如き、殆んど唯だ人間の四肢の力の作用を強めるを目的としたものに過ぎぬ。複合的器具とし云へば、それは僅かに手挽臼と舂臼とを數ふるのみ。手挽臼の原始形式は動かし得る石と、据を付けたる石とより成るものにして、其の狀宛かも我が國の職人が搗石もて顏料を粉碎するが如く、その間に穀物を置きて、それを粉磨するのである。舂臼は樹幹に穴を割れるものと、木の杵とより成れるものである。楔子、槓杆、鉗子、螺旋の如き極めて簡單なる人力節減の機械的補助手段すら尙ほ彼等は識らぬのである。彼等の小舟は木の幹を火もて焼き、以て孔を穿てるものに非んば、木皮を縫り合

せたるものであつて、その槌は柄の短かき匙の形をした木片であり、手掌を大きくしたに過ぎざるものである。木片、其他の堅き物質を栓、釘、鈎形止め、膠等にて結合する技術は徹頭徹尾彼等には解し得ざる所であつて、僅かに柔軟なる纖維、繩、もしくは單に蔓草の蔓もて結び合はせる術を知る許り。サモア諸島民は數百人を載せ得る大型の戦用カヌーを建造するに際して、尙ほ鐵釘の一本をも使用せずして、板の一枚一枚を椰子の纖維もて綯へる繩で結び付けてゐる。冶金の術は、オーストラリア人、メラネシア人、ポリネシア人及び大部分のアメリカ・インディアンにして、歐州人との接觸以前に、之を知つて居たものは無い。之に反し黒人族の間には到る處に鐵の、そして所によりては又銅の採鑛と冶金とが行はれてゐる。然れども金屬に對する技術の最も進歩し居るものはマレー人のみである。然し黒人族は鐵の細工に極めて拙劣であつて、其の鍛工すら尙ほ自家の道具を鐵もて作る事に思ひ及ばないのであり、槌、臺砧は石もて作り、鉗子の如きは棕櫚の葉脈にて作られてゐることが珍らしからぬ有様である。

〔一三〕 以下の事に就いては拙著『労働と律動』第四版、一〇頁以下を参照せよ。

斯くの如く技術上に於ては進歩し居ざるに拘らず、多數の自然人は其の貧弱なる道具を使用して、實に巧妙なる製作品を作り出し、藝術趣味を働かせて、吾人の驚歎に値するものを製出するのである。これ果して何によつて然るか。思ふに、材料の局地的分布と關聯して、或る一定の技術が、極めて一方的なりとは云へ、同時に最も包括的な方法によつて應用せらるゝが爲めにのみ據るのであつて、殊に編物、焼物、木彫に於て然りである。かの熱帯地方の民族は、其の森に産する靱皮及び纖維の材料、柔軟なる草及び葦もて、樹皮織物、蓆を始め、水を透さぬ籠、皿、塚の類に至るまで、有りとあらゆるものを作りつゝあるではないか。印度人や東亞の民は、竹を以て、大は家の柱より、小は水瓶、樂器までをも作りつゝあるではないか。バプア族の木材製作の技術は驚くべき進歩をなしてゐると同時に、その製作には異常

なる忍耐と根氣とを要するものではあるまいか。かのサモア族がバグマスにて製する繊細な蓆の製作には時に滿一年を要し、ラフィアの纖維もて一片の布を織り出すにさへ、マダガスカルにては尙よく數個月を費すことが珍しく無い。南米に於て、アメリカ・インディアンが懸床ハンシマを作り上げるにも、夫れと等しき日子を要する。ブラジルのウアウベ族が其の頸の周りに纏ふ乳白色の石英片を研ぎて、それに穴を穿つ爲めには二世代の長年月を要することさへ珍らしからざらうといふ。此處に、吾人は直ちに、眼を材料變形の經濟的組織に投げねばならぬこととなる。元來自然人の間には、此の材料變形の爲めの専門の職業労働者の存せざるを普通とする。各家族はその家族員の間此の方向に向つて起り來る一切の欲望を家族自身の労働によつて満足させて行かねばならぬものであるが、男女兩性間のかの特異なる職能分割によつて、之を満足せしめることは、已に吾人の知る所である。即ち男女兩性は食料獲得に就て、夫々一定の分野を有するのみならず、其の各々はその食料獲得の夫々の分野と關聯してゐる變形作業の一切を夫々に引請けてゐる。即ち女子は植物性の材料に關係する一切のものを掌り、男子は狩獵、漁撈、牧畜の爲めの武器、器具を製作し、獸骨、獸皮に加工し、輕舟の建造に當る。通常、男子は又肉食物の炙焼、魚類の乾燥に當り、女子は己が收穫せる穀物を骨折つて粉磨し、酒を醸し、土瓶を作つて之を燒き、又小屋の建造に當ることが多い。其の外尙ほ多種多様の材料變形があつて、或物は男子に、又或物は女子によつて營まれつゝあるのである。紡績、機織、編物、椰子酒の醸造、樹皮布の製作等の如き、即ち之である。然しながら大體に於て労働範圍の分割は極めて嚴密に行はれてゐるのであつて、それは更に進んで消費の範圍にまでも及んでゐる。

〔一四〕 上の三二頁以下を参照せよ。

獨得な完成を示してゐる自然民族の間にある此の家内經濟の二元論を此處に詳論してゐることが出来ない。さりながら労働が家族員の間斯くも個別的に分割されてゐることは、經濟生活の一切の任務に對して之を満足せしむるに十分

であり得ないといふ事は確言し得るのである。此處に夫れを補ふ爲めに先づ現はれて來ることは、一軒の家の力にては到底爲し果たし得ざる勞働を爲すに當りては、隣人の手傳ひを乞ふか、又は凡ての人に一樣に、全村相擧つて之をなすかといふことである。アフリカに於て畑地を得んとして森林の開墾を爲し、猛獸を捕獲せんとして鹿柴、陷穿を設け、又は象狩を爲さんとする時、ポリネシアに於て大漁網を編み、大家を建て、共同竈にて麩麩果を焼く時など、何れも皆、然りである。而して氏族制度の行はれてゐる所にては、其の制度によつて家族の勞働力が増大せしめられ、依つて以て單獨の力にては營むを得ざる高度の仕事を果たすを得せしむるものである。

氏族が一夫多妻の基礎の上に成り立ちる時には、此の事は特に著しく表はれるのである。生産的勞働の大部分が傳習的に女子に委ねられてゐるが故に、家父の有する妻の數にしていよゝゝ多からんか、氏族の經濟力はいよゝゝ増大するに至る。故に妻を贖ひ求むるを得ざる男子が、その無援孤立を仰つてゐる際に、近親の氏族の首長が己が爲めに妻を買求めて呉れるものがあり、其處に寄寓を求め得れば、甚しく愉快を感じるも無理で無い。また時によりては、家人又は奴隸てふ關係を以てして尙ほ他の氏族に加はるものすら無いではない。尙ほ女子の數に連れて、子供の數も亦殖すものであるから、氏族は自然の經濟的膨脹力をその中に藏するものと云はねばならぬ。即ちそれは豊富なる男女の勞働力を統御し、以て共力及び分勞を必要に應じ又思ふがまゝに應用する能力を有するものである。

(一五) トナー著前掲書、一七頁以下の明快な記述を参照せよ。

故に各氏族經濟中に於て原料の變形及び精製が全く獨立的に行はれる爲めに、個々の種族内に専門的の職業の生ずる機會がないのである。固より物の外觀のみによつて判断を下さんとする旅行者の云ふ所に従つて、各種の自然民族の照には己に手工業者發生しつゝありと主張されて、南洋の二三島嶼には専門の大工、舟大工、編網工、木彫工ありと稱す

れども、夫々の場合に就きて之を仔細に調査し來れば、この言の謬なるを解し得るのである。唯だ此處に少しく疑の存するは馬來人の間に於ける事情であつて、彼等の間に土着の金屬工の存することだけは證されてゐるやうに思はれる。アフリカにては唯だスーダンの半開民族の間にのみ營業者の或る特殊階級の萌芽を認め得るに過ぎない。而して其他の自然民族の間に職業的工業てふ如きものを求め得たと思ふのも、それは實はたゞ或る技術に特に熟達してゐる個々人が特別に旅行者の觀察に入つたが爲めか、又は全種族もしくは或る地方が特殊の家の内的技藝を好んで營みることが彼等旅行者の眼に映じたるが爲めか依るものである。これに就きては直ちに次に詳述せんと欲する所である。但し歐洲の影響を蒙りて始めて生じたる職業が無いが、夫等に關しては此處に論述すべきにあらざるは云ふまでもない。

されど種族と種族との間には材料變形の領域に於て非常な差異の存するるのであつて、各種族は夫々得意の工業行爲を有し、其の各員は此の點に於て他の種族に卓越してゐる。例へば善き陶土を産する地方にては、その地の女子は燒物の巧妙なる技術を知悉し易く、鐵鏝の存する所にては鍛冶を、森林の豊富なる海岸地方にては造船を發達せしめる如きそれである。更らに眼を他の種族もしくは他の土地に轉ぜんか、或は植物灰よりの鹽の採收に、或は椰子酒、革、裘の調製に、或は瓢箪、籠、簾、織物等の製作に秀でたものがある。而かも凡て此等の技術たる、該種族もしくは其の土地の何れの男女を問はず、皆これを心得てゐるのであつて、必要に應じて何人もこれを行ひ得るのである。斯くの如くなるが故に、旅行者より或は鍛冶工と呼ばれ、或は製鹽工と稱され、或は籠職人と目され、或は織布工と云はれてゐるものもこれ實は一個の迷見にして、それは宛かも我が國の農民がほんの一次的に行ふ仕事によつて、人稱して彼を耕転者とし、草刈人とし、刈收者とし、打禾者とするとか何等異なる所を見ないのである。即ちそれは一定の人の全生涯を通じて從事せしむべき職業行爲と見るべきものに非ずして、各家族の自己經濟に於る分離せしむべからざる成分を形成してゐる

業務なりと考ふるの適當なるを覺ゆる。さればとて各個々人にして其の工業に於ける技術の優秀なる點が他の儕輩を凌駕することがあつたとて、それを決して不都合なりと爲すを得ざることは文明諸國に於ける農婦の間に、特別に技術卓抜なる紡績工を見、農夫の間に、拔群の馴馬者、養蜂家を見、彼等が共進會等に際して賞牌を得ることあると、何等擇ぶ所がないのである。

斯くの如き種族毎に又は村落毎に異なる工業的技術の分配は屢々旅行者の注目を惹いた所であつて、ベルギーの一觀察者はコンゴ下流地方に就き次の如く報告してゐる、『土人の村落は集團的に相集つてゐることが屢々であり、其の各村は相互相倚り相助けてゐる。而して各集團は夫々多少の特色を具へた特性を有してゐるのであつて、或る者は漁獵を營み、或る者は椰子酒を醸し、或る者は商賣に従事し、他のものの銀行家の役を勤め、外より來る物資を其の村に輸すものあり、又或る者は鐵銅の仕事にたづさはつて、戦争、狩獵の用に供する武器、其他各種の器具を作るものがある。而して何人たりとも其の専門の仕事の範圍を踏み越すことを許されずして、もし犯すものあらば彼は世間の批難嘲罵の的となるを覺悟せねばならぬ』。ロアンゴ一沿岸地方に就きて、バステイアンは斯かる一定の家内工業的産物を産出する産地の多數に關する報告をしてゐるが、これに類する觀察は尙ほ如何程にてもこれを引例し來るを得るものである。然かもそは單にアフリカ^(二)のみに止まらず、南洋諸島より延いては中央アメリカ、南アメリカ^(三)にまで及んでゐる。

〔一六〕 アフリカに就きては、今日にては、シュメツ(H. Schurtz)がその著『アフリカの工業』(Afr. Gewerbe)の二九頁より六五頁に至るまでに蒐めてゐる。尙ほフッター著『カメルーン北方後地探検記』(Hinter, Wanderungen u. Forsch. in Nord-Hinterland von Kamerun)〔一九〇二年版〕三六〇頁以下をも参照。

〔一七〕 ザッセル著『北部中央アメリカ』(K. Sapper, Das nordl. Mittel-Amerika)〔一八九七年アラウンシュライク版〕二九九

1) Bastian

頁以下及び其の他の場所に引照せる例を參考せよ。

斯くの如き種族工業の中に、自然民族の經濟的發展を支配する法則を發見し得たと爲す見解は決して甚しき過なきものであらう。げにや此の種族工業によりて始めて、個々集團併びに全集團の欲望満足といふことが、彼等の直接の生産能力を超えて擴張され得る手段を發見し得たのである。蓋しそれを製作する人々の間にのみ存し、しかも此等野蠻民族の單純なる生活に對し相當の價値を有してゐる工業製作品は、やがて其の周圍に住む諸民族の欲望を唆らずに止み得ないが故である。さりながら欲求より享樂への道程は、此の純然たる自己獲得に基いて築かれてゐる經濟組織にあつては、交換取引の上に建設されてゐる我が社會狀態の下に考へられ勝ちであるよりも、遙かに遠き迂路を取らざるべからざるものである。

自然民族の間に行はれる交換取引に關しては、弘く不明瞭な見解が行はれてゐる。吾人の知る所によれば、全中央アフリカの西はポルトガル領より東は英領に至る間、二三哩毎に必ず一個の市場ありて、四日乃至六日目毎に、其の周圍に住む種族集り來りて交換をなす。又、ボルネオ及びセレベスの馬來族に就きて聞く所によれば、其の大村には何れも週市ありといふ。南洋諸島を初めて發見せし人も已に、土人が生産物を互ひに交換せんが爲めに島より島へと廣き範圍の「行商」を營むあるを報告した。アメリカに於ては、一局所にのみ發見せらるゝ原料より製出されし一定の生産物、例へば一定種類の石もて作れる矢の根、石斧の類が、米大陸の大部分に廣く分布してゐるのが發見されたのである。^(一)又オーストラリア土人の間にありてすら、尙且つ、或る地點にのみ特に産する或る種の天産物(例へばビッチェリーの葉、酸化石顏料)が國中大部分に普及してゐる例がある。斯くの如き現象は、これ商業が文明を播布せしむるに與りて力あるといふことの一新らしき證左なりと云はねばならぬ。而してその力がヨーロッパの原史時代に於ても廣く働き

つゝあつたと云ふことは、藝術作品がその原料の産地より極めて遠く隔れる地方より發掘されたことによつて解し得るのである。斯くの如きを以て我が書契前史は軟玉石斧のみを以てして太古の全商業系統を立てるに至りしのみならず、更らにそれを進めて有史以前の『工業區域』といふ如きものをすら捻出するに至つたのである。而して今日の人種學の文献も亦、それと同じやうにボルネオに於ける武器及び蓆の製作、ニューギニアの諸地方に於ける焼物の製造、デューク・オヴ・ヨーク群島の二三沿岸地方に於ける造船、黒人族諸國の織細工の爲めの工業場を述べてゐる。

〔一八〕ワイツ著『人類學』(Waits, Anthropologie)第三卷、七五頁。南米に於ける市場に就きては、同書、同卷、三八〇頁。メキシコに於けるものは、同書、第四卷、九九頁以下。

吾人は夫れに反對して次のやうに確言せねばならぬ。國民經濟的意味の商業、換言すれば利潤を得て轉賣する目的を持つ規則的なるそして職業的に組織されてゐる貨財購入なるものは、これ決して自然民族の間には存しない。吾人がアフリカに於て土人にして商賣に従事するものに接することあるも、それはヨーロッパもしくはアラビヤの商人より刺激せられて、始めて生じたる仲介業に非ずんば、スーダンの如き半開地に於ける現象と見るべきものである。而して其他の各地方には、種族相互間の交換取引があるのではあるが、これは天産物分布の不均等なるが爲めか、或は個々の種族間に於ける生産技術の發達に差異の存するが爲めか起因してゐる。然るに同一種族内の各員の間には、規則的なる交換取引なるものを見る事が出来ないのである。蓋し彼等は皆同一の貨財を生産し、従つて職業に基く人口の組織に缺けてゐる爲めである。而して斯かる人口の職業的組織なきの時、何を苦しんでか、各家族間に恒久的なる相倚り相扶くる組織の要があるであらうか。

在來の學者がその交換の成立を説くや、餘りに無雜作の憾なき能はず。惟ふに、文明人はその使用するものを何にて

もあれ、市場もしくは倉庫に赴かば直ちに調へることが出來、貨幣もて何時にても之を手にし得ることに慣れてゐるが故である。然れども自然人には、文明人との接觸以前に於ては、價值といひ、價格といふ如き觀念は全然沒交渉のものであつた。初めてオーストラリアを發見せし人々は、大陸に於ても、その附近の島嶼に於ても、土人は交換てふことを寸毫も心得てゐないことを經驗し得たのであつた。即ち彼等に裝飾物を提供するも些の顧る所無く、強ひて與へた贈物が後に至りて、何の容赦なく森林中に拋棄しありしを發見したとのことである。エレンライヒもシュタイネンも極最近にブラジルのアメリカ・インディアンに就き夫れと類せる經驗をした。斯かる有様なるに拘らず、其の各種族間には活潑なる交通行はれ、土器、石斧、懸床、木綿絲、貝殻を綴れる頸鏈及びそれに類せる生産物が交換されてゐたのである。然かも既に説けるが如く、交換なく又商業の存するなくして、それは果して如何にして行はれたのであらうか。

〔一九〕ユハンナ著『貨幣流通』(Büsch, Geldumlauf) A、四四頁。Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte) 誌第四卷、五頁以下のザルトリウス・フォン・ワルテルスハウゼン(Sartorius von Waltershausen)の所説。シュルツ著『貨幣起原史綱要』(Schurtz, Entstehungsgeschichte des Geldes) 六六頁參照。

〔二〇〕『ブラジル人種學論考』(Beiträge zur Völkerkunde Brasiliens) 五三頁。

〔二一〕『中央ブラジル自然人記』(Unter den Naturvölkern Zentral-Brasiliens) 第二版、二八七頁以下。

此の謎に對する解はまことに簡單である。即ち其の貨財移轉は贈與てふ道を取り、時によりては又、盜奪、戰利品、調貢、財産刑、賠償、賭博の儲けと云ふ道筋で行はれた。同一種族各員の間には、食料品については殆んど財産共同が行はれてゐるのであつて、家畜の一头を屠殺する際、之を隣人に告げず、或は食事をなしるる際、通り掛れる旅人を招待せざることは、窃盜と同等に考へられて居る。如何なる人にも隨意に他の人の小屋に入つて、食事を乞ひ得るのであつて、家人はこれを拒む譯には行かぬ。凶作の場合には、全村を擧つて其の隣村に就きて、暫しの寄食を乞ひ得るのである。

器具や道具に就きては貸與てふ一般的習慣存し、それは正に一個の義務たるが如き觀をすら呈してゐる。土地に對しては特別所有權がない。各世帯何れも同一の物を生産し、飢饉に際しては相互に扶け合ふ此等種族の間にありては、過剰の貯蓄物はこれを消費するより以外に、其の利用の途を發見し得ぬものであつて、特殊の報償を得て貨財を一つの經濟より他の經濟に移轉させ得るが如き動因が存しないのである。尤も女子購入の場合とか、醫者、誦歌者、舞者、樂人などいふ特殊なる職業を營める二三の人々に對する贈物贈與の場合とかは、その例外をなすものである。

何れの種族の間にも賓客接待（Gastfreundschaft）の規則が行はれ、凡べての自然人の間に、殆ど符節を合す如くに繰返し行はれつゝある現象である。面識なき人と雖も、或る家を訪へば、彼は其の家より贈物を得るのであるが、彼は程經て後にそれに対して返禮をなすも、愈々其の家を辭去するに當つては、更らに第二の贈物を贈らるゝのである。而して斯かる贈物に就ては、主客の雙方より各自の希望が述べ得られるのであつて、仍つて以て各自が必要とし又は得んと欲する品物を手にする機會が與へられるのである。尙ほ其の際、對手方が満足の意を表せざる限り、他の片方は賓客接待の義務を免れ得ざるものであるから、一層確實に其の結果を期待し得るのである。

〔一二〕 此れに關しては、ハヤベルラント著『低級文化段階に於ける賓客接待』(K. Haberland, Die Gastfreundschaft auf niederen Kulturstufen)「外國の部」、一八七八年版、二八二頁以下を參照。

〔一三〕 贈物に對し返禮を爲さざるは、總じて文明の進める段階にして初めて之を認め得るのである。Zeitschr. f. deutsche Kulturgeschichte 誌、第五卷、一八頁以下のリカント・ム・マイヘル(Richard M. Meyer)の所説。

斯くの如き主客雙方より致す賓客贈與の風習によつて、一地方の珍稀なる産物若くは一種族に特殊なる藝術作品が民族より民族へと移轉し行きて、今日商業によると何等擇ぶ所なく、其の發生地より極めて隔絶してゐる地方にまで輸送

れ得たと云ふことは、傳説や童話がそれと同一方法によつて弘まり行き、遂には世界の半分に普遍するに至つた事實に考へ來るも、尙ほよく之を解し得ると思ふ。かのホーマーの詩に於ても已に、多數の例もて其の賓客贈與の風の存するを證據立てるにも拘らず、世人が長く之を徒らに觀過し來りしことは、殆んど了解に苦しむ所である。ホーマーの詩では、テレマコスはメネラオス王の贈物としてスパルタより銀の混和器を携へ歸るが、これは元、メネラオス王自身がドンにてファイアディモス王の賓客贈物として手に入れたものであつた。又テレマコスの父オディソイスはフェアーク人より衣服、麻布、黄金の器併びに鼎鉢の一揃を贈られるが、オディソイスはその郷國なるイタカの巖島に歸るや、これ等一切を纏めてニンプの聖洞に隠匿すると云ふのは、衆人の周知する所である。今、もし此の詩人の物語を歴史的出來事なりと假定して、オディソイスが己が皇后の求愛者達より逸早く發見されて弑せられたとした時には、どんな事が起つたであらうかと想像して見よ。その時には、かのフェアーク人の贈物は、其の儘によく藏されて今日まで、其の隠匿所に藏せられて居たことであらう。そして近世の一考古學者によつて、初めて發掘されるといふ様なことになつたであらう。其の時には此の考古學者はその財寶を以てギリシャ英雄時代に於ける旅商人の倉庫であると説明しないで居たであらうか。殊にホーマーの時代に於て實際の交換が行はれてゐると云ふ事を證し得たであらうからに於てをやである。

多數の自然民族の間には、贈與より交換への過渡を示す特殊なる風習を維持してゐるものがある。例へば中央オーストラリアのディーリー族の間には、贈物を受くれば、一人の男なり、一人の女なりは其の贈與者に對し彼が望む物品を返禮として調製したり、其の人の爲めに山野に狩をしたり、或は其の人の爲めに其他の勞を營むの義務を負ふものであつて、斯かる義務を負へる者をユッチン(Yutchin)と呼び、その義務を忘れざらんが爲め、それを履行し終るまで、頸に一縲の紐を纏ふのである。かくて望みの品物は通常遠隔の地より得ることとなつてゐる。ニュージーランドに於てはワ

ンガウィー川沿岸の住民は、多數に捕へてそれを炙り脂肪漬にした鸚鵡を利用して、其の島の他の地方の住民より干魚その他の返禮を得るの料にあてゝゐる。中央ブラジルのアメリカ・インディアンの間では、今日なほ物の交換は賓客贈與物の交易てふことによつて行はれてゐる。パカイリー族はポルトガル語の *comprar* (買ふ) なる語を翻譯するに「住み込む」といふ意味の語を以てしてゐる。蓋し、客あり、其の相當せる返禮を受けざる間は、何時までもその家に住み込みざるべからざるが故である。スーダン地方にては、「營舎にて受くる贈與は良俗に屬するものであつて、これは非常に希望されてゐるのである。されど少しく大なる都會に滞在すれば、盛んに價高きもの或は低きもの、贈與を受くるのであるが、これは一見、白人に對して敬意を表せんが爲めの如くなれど、實際は、その贈與者が歐洲人の氣前よきことを見込んで、三倍若くは四倍の返禮を目當としての故にのみ行はれてゐるのである」。

[114] Journal of the Anthrop. Inst. 誌、第二〇卷(一八一九年)七六頁以下のホワイター(A. W. Howitt)の所説。

[115] ショートランド著『ニュージールランド人の傳説と迷信』(Shortland, Traditions and Superstitions of the New Zealanders) (一八五六年、ロンドン版)二一四頁以下。

[116] シュタウディング著『ハッサ地方内部』(Staudinger, Im Herzen der Haussaländer) (第二版)二一六頁以下。尙ほザロフ著『シリア及びメソポタミア紀行』(Sachau, Reisen in Syrien und Mesopotamien) 一九一頁、及びフォン・フューゲル著『カシュミール』(v. Hügel, Kaschnir) 四〇六頁以下を参照せよ。

斯くて一度交換の生ずるも、尙ほ長くその起源の特徴は此の交換と結び付いて居り、贈與の風習から直接發生した諸規則の中に保持されてゐるのである。此の事は自然民族の間に一般に行はれてゐる前拂の習慣に先づ以て示されてゐる。即ち醫者は病者の家族の者より先づ以て報酬を受け、満足の意を表して而して後に、始めて病者に手を觸るゝのである。賣買は賣手と買手が、立會人の前に於て、その品物で雙方満足してゐると言明せざる限り、決して完了したも

のとはならない。多數民族の間には、慣例として交換の前若くはその後に贈物をなすの風がある。歐洲の田舎において小賣商人が景品を添へ、もしくは酒賣買に方りて酒を飲ましめる習俗あるは實にその遺風である。黒人族の間において、一旦申し出せる交換を理由なくして拒絶するは、我々の間に於て贈物を拒むの侮辱と擇ぶなしと考へられてゐる。而して其の交換に際し、給付及び反對給付が其の價値に於て相適應せねばならぬと云ふことは、自然人に取つては解し得ざる所であつて、兒童は己が勞働に對して大人と同等の支拂を得んとし、一時間の手傳ひをした者も一日中働ける者と均等の報酬を得んとしてゐる。然るに雙方の欲望は無際限なるが故に、何れの交換をなすに方りても、其の成立には極めて長き掛合ひを要するのである。それと類似の掛合ひは賓客贈與の際にも亦、それを受けし者がその贈與物を以て自分の體面に相叶はざるものと思ふ場合に生じ勝ちなのである。

[117] 歐洲の商人でも、アフリカにては、自分等の使用してゐる土人の商業仲介人に供すべき品物の價を前拂しなくてはならぬ。

例へば、ボグゲ著『ムアタ・ナムウォー領域』(Pogge, Im Reiche des Muata Janwo) 一一、一四一頁以下。アヒネル著『カメルーン』(M. Buchner, Kamerun) 九八頁以下参照。東洋にては雇傭契約にあつても同様のことが行はる。ザヒアウ著前掲書三四頁。神への捧物さへ、この段階にある民族は、神より與へらるべき給付に對する前拂にすぎぬものと考へてゐるらしい。ヘックウエルダー著前掲書、三六七頁。尙ほ四〇五、四一一頁をも参照。

[118] シュルツ著『貨幣起原史綱要』(Schultz, Entstehungsgesch. d. Geldes) 六七頁以下。ランドール著『禁制の道』(Chambers) [Tandor, Auf verbotenen Wegen (Tibet)] 二九六、三一一頁。

然るに、種族間の交換交通にその手数を簡便にする爲めの特有の施設が、時と共に、生ずるに至る。而して其の中にありて最も重要なもの、これを市場及び貨幣となす。

市場はその黒人族なると、アメリカ・インディアンなると、ポリネシア族なるとを問はず、何れも皆、夫等各種族の境

界に存する廣場に、時としては原始林の眞ん中に開かれるのである。その地域は中立地帯にして、種族間の鬭争によつて犯さるべからざることとなつて居り、市場の平和を擾すものあらば、彼は最も重き刑罰に處せらるゝのである。各種族は其の種族に特有なる品物を携へてその市場に赴く。即ち或るものは蜂蜜を、或る者は椰子酒を、又ある者は干肉を、更らに他のものは土器、鐵器、蓆、織物を携へ來りて交換を行ふのである。其の交換の目的たる、己が屬する種族の間には曾て産せず、よし産するあるも、其の近隣種族の間に作らるゝ如き品質の優良にして技術の巧妙なるものを得る能はざる如き生産物を得んとするにあるのである。此の爲めに、各種族にては、他の種族間に珍重せらるゝ種類の産物を夥しく製作せんとするに至る。蓋し、よくこれを利用せば、自己種族の間には之を求むることを得ずして他種族の間には過剰してゐる品物を容易に手に入れ得るが爲めである。然しながら何れの種族にあつても、斯る特殊の市場交換品を製作するものは夫々の個別經濟なのである。而して此の事は、土器、樹皮具などいふ如き家内工業的製作品の製作が行はれる場合にあつては、村全體、種族領域の總體が渾然たる一大工業地域の夫れの如き觀を旅行者の眼に投ずるに至るものなのである。併し實際は職業的工業者なるもの固より彼等の間に存するなく、何れの家族もその使用する物一切を自ら製作しつゝあるのである。固より彼等が使用し慣れて居り然も唯だ他種族の間にのみ作られる僅數の物品にして、交換によりて自己生産の單なる補缺物として入手してゐるものが無いではないけれども、それは全く例外たるに過ぎぬものなのである。

〔一九〕多くの自然人は、歐洲の商品にして彼等がその眞價を知つて、それを重寶がつてゐるものには己が所有してゐるすべての物を提供して之に換へようとする位ではあるが、彼等の間に行はれる規則的の交換取引は全然一方的なもので、二三少數の物品にのみ制限されてゐる。ライツ著『人類學』第四卷、一〇〇頁。第六卷、七六頁以下を参照せよ。彼等の多數の日用品は、如何なる

代價を以てするも、彼等はそれを手に入れることは出來ぬ。裝飾品に於て殊に然りである。例へば、フィンシュ著『サモア諸島紀行』一〇八、一一九、二二六、二八二以下、三二五頁。マルティウス著『前掲書』八九、五九六頁。Zeitchrift für Ethnographie 誌、第一七卷、二四、六二頁。リヴィンガストン著『前掲書』第一卷、二五七頁参照。

以上は自然民族の間に於ける市場の簡單なる仕組なるが、次に貨幣は如何。自然民族の間にある多種の貨幣に關してはその記す所のもの極めて多く、夫に對する推測、亦甚だ多様なりと雖も、其の成立に至つては之を説く極めて容易である。即ち貨幣は各種族が各自自身にては産出することを得ざるも、交換により他の種族より規則的に得ることの出來る交換商品なのである。此の故他にあらず、斯かる物品は自ら、各種族が己が生産物を以て之と代ふるを辭せざる一般的交換手段となるからである。而してそれは、他の方法を以てしては到底換算し得ない自己の所有物を估價し得る價値の尺度となる。それは自由勝手に増殖せしめ得ざるものなるが故に、それを以て人は己が富と爲し、更らにそれが稀少なりてふことよりして凡べての者に等しく歡迎せられることに依つて、それはやがて種族仲間の價値移轉の具に供せらるゝに至るのである。かるが故に、各種族毎に、否な村と村との間に於てさへ、其の流通しつゝある貨幣は其の類を異にし、即ち或る種の貝殻とか眞珠とか木綿の切布を以てして、今日は何物をも購ひ得るに拘らず、次ぎの夜營地に於ては已に、何人のあつて之を顧みるものなき有様であり、従つて市場に赴きて物を仕入れんが爲めには、豫めその以前に其の土地にて特に通用すべき交換貨幣を手に入れて置かねばならぬと云ふ結果になることは、歐洲の旅行者が屢々觸目する所である。故に鹽、コラ堅果、寶貝の殻、銅塊の如きその産出を一地方にのみ限りゐる天産物や、眞鍮線、鐵鋤、土燒皿、樹皮布の如きその製作に特殊の技巧を要する製作物は、其等を缺いてゐる多數の種族の間には、貨幣と考へられてゐる事が更らに觀察されるのである。而して殊に著しき現象は、歐洲産の綿布、獵銃、火藥、小刀の如き外國貿易品が一

般的交換手段となつてゐる其の事である。

〔三〇〕 アンデル著『人類學上の類似及び比較』(R. Andree, Ethnogr. Parallelen und Vergleiche) 一八七八年、シュトゥットガルト版) 二二頁以下。レンツ著『自然民族の貨幣』(O. Lenz, Ueber Geld bei den Naturvölkern) 一八九五年、ハンブルク版。イルウォフ著『古今交換商業及び貨幣代用物』(F. Ilwof, Tauschhandel und Geldsurrogate in alter und neuer Zeit) 一八八二年、グラーツ版。シュルツ著『貨幣起源史綱要』(H. Schurtz, Grundriss einer Entstehungsgeschichte der Gelder) 一八九八年、ライプツォック版。Intern. Archiv für Ethnogr. 誌、第六卷、五七頁参照。

斯くの如くにして或る種の貨幣種類は他のものと比して一層大なる流通の範囲を得るに至り、同一種族間の内部取引にまで使用せらるゝに至るのである。即ち或は嫁の買入、賠償、租税等の支拂手段に使用せられ、或る種の契約に至つては、それによつてのみ締結せらるゝに至る。然しながら自然民族が歐洲の影響を受けずして、然かも尙ほ種類と額とを論ぜざる債務に對する法律上の支拂手段たる本位貨幣に到達し得たであらうといふ實例は、未だ曾て之に接したことがない。寧ろ普通は各種の貨幣が相併んで使用され、其等は傳習的に定められた交換比率を以て流通しつゝあり、一定の債務は唯だ一定種類の貨幣によつてのみ支拂はるべきものと定められてゐる場合が非常に多いのではあるまいか。貨幣使用に變化を來して、曾て値ありしものが今全く夫を失墜するの例に乏しくないが、それと反對の例も亦稀ではない。即ち或る種類の貨幣は、其れの生じたる抑々の根元たる種族間の交通が全く杜絶するも、尙ほ長くその使用を續けられ、實際を考ふれば、それによりては最早、生命維持の爲めの何物をも賣買し得ざるに至りしにも拘らず、尙ほ依然一種族内部に使用せられ、一個不可思議にして、殆んど妖魔の如き役目を演じつゝあるのである。斯くの如く、以前種族間に行はれし交通が後に至つて絶えたといふことよりして、初めてミンダナオのバゴボス族、ボルネオのダヤーク族の間に古き支那の陶壺が貨幣として使用せられ、メラネシア族の間に貝殻貨幣(Dewaria)が行はれ、カロリン群島に於て不思議

なる貨幣の流通してゐる理由が、始めて能く説明され得るのである。殊にカロリン群島にては、此の効力を失へる貨幣を汎ねく流通せしめんが爲めに特別の法律と特別の國家施設とを必要としてゐる。^(三二)然れども其他の地方に於ては、國家は通例、此の事項に干渉しない。かのムアタムゾオ國の如きアフリカに於ける比較的大なる國家構成體にては、各種族毎に異なる種類の貨幣が生じてゐる。其の中一種の貨幣が比較的廣き流通範囲を有してゐるとするも、其の貨幣が有する價值は市場の異なる毎に非常に大きな幅の變動を示してゐる。たゞ一般には、貨幣の價值は貨幣材料原産地より遠ざかり行くに従ひて、益々増加し行くものなのである。^(三三)

〔三一〕 クバヤー著『カロリン群島研究人類學的論考』(Kuhary, Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen-Archipels) 一頁以下。メーキンソン著『カスマンク群島』(Parkinson, Im Bismarck-Archipel) 七九、一〇一頁以下。

〔三二〕 チェンペー著『東部アフリカに於ける五年間』(Cecchi, Fünf Jahre in Ostafrika) 二七一頁。

貨幣が其の元來の性質に於て交換手段と見られてゐる限り、市場と貨幣とは極めて密接な關係を有してゐる。さりながら、自然民族の間に存する貨幣種類の何れもが、皆、市場取引より生じたるものなりと爲すを得ないのである。貨幣なるものはそれが十分に完成せる場合には極めて複雑なる社會現象にして、その中には種々雑多なる發展の要素が參雜してゐるものなるべしと推測することが正しいと思はれる。例へば、かの家畜貨幣なるものは、家畜が其の民族にとりては富の代表物にして、資産蓄積の手段となりゐる事實に基くものと思はれる。又、多數種族にありては、嫁の買入及び其れに類したる目的の爲めには、一般に流通してゐる貨幣を使用するを許さずして、その爲め特定せる一種の財を以て之に宛てゝあるといふ事柄は、貨幣制度の完成に方つては、其の本流となるものゝ外、更に幾つかの支流の存するあつて、其等は皆、貨幣制度の發達に資する所があつたのであらうとの推測を下すことが正當であることを覺えしめるの

である。

〔三三〕 ヲルクス(K. Marx)が其の著『資本論』(Das Kapital)(二版)第一卷、六七頁に『貨幣形態は、或は他國より得たる最も重要な交換物にして、實際内地生産物の交換價値を示す自然生現體なるか、或は使用物にして、内地に産し他と授受し得べき占有物の主要素を構成するもの、例へば家畜の如きものに附着するものなり』と、極めて簡潔に述べてゐることは、蓋し正鵠を得たるものではあるまいか。尙ほ、Jahrbuch für Nationalökonomie und Stat. 誌、第三年號、第七號、三四五頁のロツツ(W. Lotz)の所説をも参照せよ。

然しながら以上の觀察の諸結果の中、人類の全文化發展に對して最も決定的なる事實は、特に選ばれたる交換貨財としての貨幣が種族間相互の人々を規則的にして平和なる交通に結び付け、生産の點に於て種族分化の道を拓くに至つた一手段となつたといふ事である。同一種族又は同じ村の住民を擧つて、單なる食料獲得てふこと以外、或る一定の生産範圍を喜んで開拓するに至らしめたといふ其處に、技術上の達識と機巧が進歩する抑々の可能が横はつてゐるのである。其の當初は小範圍ながら國際的な或は超地方的な分業と稱すべきものがあつたが、漸く進むに従つて初めて各個人の間には國民的な或は地方的な分業が現はるゝに至つた。而して市場が個人的交通に對して直接的重要さを有してゐたことも、此の段階に於ては到底輕視し得ざる所であつて、市場以外に於て貨財の交換をなすことは極めて異例で、旅行者が品物をそれを製作してゐる者の手より直接購はんとなれば、必ず『市場へお出でなさい』といつて謝絶せらるゝ地方に於て殊に然りである。而已ならず市場は同様に、通信の交換、人的關係の結合てふことにも役立つのであつて、ギリシヤ・ローマの古代の民族の社會生活及び政治生活に對してそれが優秀なる地位を占めて居たことが、當然此處に想ひ起されるのである。

今述べたるが如き生産及び交換の組織をエ々の種族の間に生ずるに至つた所以は、實に極めて偏頗なる發達の結果に過ぎないのであつて、大陸内地の如き或る技術的熟練が一種族より他種族に轉移するに何等交通上の障礙なき地方にありながら、一方極めて古風なる經濟的行相を示す種族があるかと見れば、他方之と相併んで大いに進歩せる種族棲息し、かくて幾千百年を経來りし洵に驚くべき現象もこれによつて能く説明し得られるのである。其の最も著しき例證の一つはバトウア族又はアッカ族と呼ぶ中央アフリカに住む矮小民族である。彼等は全く依然たる低級狩獵民の段階に停滯し、原始林地帯中に蟠居して、或る一定の日を期して周圍に住める黒人族の市場に集まり、彼等が經濟の主要産物たる乾燥せる野獸肉を携へ來りて芭蕉實、落花生、玉蜀黍等と交換する。實に二三地方に於ては、此等矮小種が其の隣接種族と行ふ交換の古き形式を尙ほ今日に存續する所がある。即ち果實の實る頃ともなれば、彼等は黒人族の如に忍び行きて芭蕉實、球莖、穀物を盗み、其の代償として肉を其の場に殘して行くのである。かくバトウア族が狩獵に巧みなる結果、其の周圍に住む諸種族をして狩獵及び牧畜による肉生産をなすの要ならしめると同時に、一方彼等バトウア族をして決して其の武器を自ら製作することを爲さしめず、これをモムズー其の他の種族より交換によつて入手せしめるに至つたのである。

〔三四〕 カザチー著『赤道地方に於ける十年間』(Zehn Jahre in Äquatoria)第一卷、一五一頁。シュロインフォルト著『アフリカ内地』(Schweinfurth, Im Herzen von Afrika)第二卷、一三二頁以下。エンケル博士アフリカ紀行』(Dr. W. Junkers Reisen in Afrika)第三卷、八六頁以下。ウイスマン、ウォルフ其他共著『中央アフリカ』(Wisemann, Wolf etc., Im Innern Afrikas)二五六、二五八頁以下。バックス著『侏儒國』(Barrows, The Land of the Pygmies)及びシモン著『ウガンダ保護領』(Johnston, The Uganda Protectorate)一九〇二年版。——ガイゲル著『セイロン——旅行の日誌と思ひ出』(W. Geiger Ceylon, Tagebuchblätter und Reiseerinnerungen)一八九七年、ウイスバーテン版』も亦、ウエツダ族に就き、それに似た。

斯かる偏頗なる發達の更らに較著なる他の實例を供するものは鍛冶匠である。彼等はアフリカにすむ多數種族間のみならず、アジア及び東南ヨーロッパに於ては散在的ではあるが、其他の種族とは別箇なる階級を形作り、夫れに屬する部落の者は其他の種族より、或は敬遠され、或は侮蔑されて、其等と婚姻を結ぶを得ず、又其他社會的結合をなすことも出來ない。世人はこの不可思議なる現象を從來次の如くに説明して居た。即ち彼等は實に被征服民族の殘餘にして、其の征服民族には不得手なる金屬加工の技術を心得るが爲め、緩かに滅ぼされずして存したものである、と。然しながら又別箇の説を爲すものもあり得たのであつて、即ち斯かる種族は元來自己の自由意志によつて四方に散在するに至りしものなるが、彼等が特別の種族性を有すること、他種族に到底解し得ざる技術を行ふこと、が相結んで、彼等が永住するに至つたその土地の民族協同體より除け者にされるやうになつたものであらう、と。

〔三五〕 アンドレー著「人類學上の類似及び比較」一五三頁以下。

かゝる種族工業の偏頗なる經營は此處彼處に散在的に、旅行者の或は工業民族と呼び或は商業民族と稱する民族を發生せしむるに至る。而して其の工業民族といふは、これ彼等がその隣接諸民族の爲めに勞働してゐるが爲めであり、その商業民族と稱する所以は、これ近隣諸民族の爲めに或る種の物品の交換に當るからである。然り而して前者は消費者が己が要求する品物を生産地に至りて交換せんとして或る種族工業の榮ゆる地方を探し求める際に生じ、後者は生産者が自己需要を超えて過剰に製出したる品物をそれが缺乏してゐる種族に輸送する時に現はれるものである。

此の發展の第一形式なる工業民族の例を示すものは、ロロ川の東方オゴウエ流域に住み、人口豊かなる隣接諸民族の間に位置するオサカと稱する小種族である。此の種族は五乃至六の村落に分住し、各村六十戸乃至百戸の小屋を有してゐる。レント¹⁾は彼等の間に非常に異なる種族に屬して中には餘程遠隔の地方より來れるものも珍らしからざる他の種族が多數に混じてゐるのを發見した。而して此のオサカ族は特に鍛冶に堪能にして、四圍に住む諸種族は何れも皆此の種族より狩獵用及び闘争用の武器の大部分を購入する。然るにこれは種族より種族へと交換され行きて、遂には遠く海岸地方に迄及んでゐる。『武器の代價としてオサカ族に支拂ふにオシエボ・アドゥマ族は普通に椰子油、落花生を以てし、ファン族は此等各種の種族中最も狩獵に巧みなるが故に、乾燥し又は燻製したる獸肉を以て槍及び劍形の小刀に代へてゐる。斯くの如き状態なるを以て、オサカ村落は到る處その生活活氣を呈し、多數種族集せば必ず起るべきものと定まつてゐる闘争が頻々としてしかも大袈裟に行はれつゝあるを見る。』

〔三六〕 ウィーン地理學協會報告(Mitteilungen der Geogr. Gesellschaft in Wien)一八七八年號、四七六頁。

發展の第二形式たる商業民族の典型的例證はコンゴ河床の南部地方に住むキオコ族に見ることが出来る。彼等はルンダ國に住み、然かもカルンダ族の間に散住して、固有の酋長を戴いて居り、其の酋長はムアタ・ヤムヴォ國に貢納の義務がある。此の民族は好んで森林中にその村落を營む。蓋し彼等は第一に狩獵に巧みなると、森林を漁つて護謨を得蜜蠟を得んが爲め一種の野蜂の飼育をなすのである。而已ならず彼等は鍛冶に對しても優秀なる技能を有して巧妙なる斧を製作するのみならず、古き燧石銃を修復し更らに之に新らしき銃床及び銃床尾をすら附することが出来るのである。彼等は着るに獸の鬃を以てし、植物性の材料もて織物を作る技術を殆んど解してゐない。その女子は主にマニオク、玉蜀黍、黍、落花生及び豆類の培養に従事す。彼等がその森を漁り盡して得たる生産物はこれを西海岸に携へ行きて、品物殊に火薬と交換し、夫れを持つて内地深く進み入り、象牙及び奴隸と代ふ。而して其の象牙は更に又之を賣却すれど、贖ひ得たる奴隸は之を伴ひ歸りて己が家族の一員とする。彼等は遠く東方に狩し、いよ／＼歸途に就

1) Lenz

かんとする時、必ず先づ其の銃の一部を以て奴隷に換ふ。而して自身の護身としては弓箭を以て之に宛つるのである。

〔三七〕 ポグ著『ムンタ・ナムツォ領域』(Pogge, Im Reich der Munda Jankwo) 四五―四七頁及びウイスマン、ウォルフ其他共著『中部アフリカ』(Wisnmann, Wolf etc., Im Innern Afrikas) 五九・六二頁による。——又、シュルツ著『アフリカの工業』(Schurtz, Afr. Gew.) 五〇頁参照。——カンシカ族も亦、同じである。ウイスマン著『第二回アフリカ横断記』(Wisnmann, Zweite Durchquerung Afrikas) 八四頁。

黒人地方に於ても、斯かる現象に接することがまた珍らしくない。従來の經濟史的範疇の何れとも合致しないことが容易に解し得るのである。かのキオコ族は狩獵民に非ず、遊牧民に非ず、農耕民にも非ず、更に又工業民族にても商業民族にても非ずして、實に其等の全體を兼ねるものである。彼等は海岸に於てはヨーロッパ人が營める代理商館との交換交通の一部を仲介して、仲買の如きことを營むのであるが、此の際彼等は黒人族に固有なる天性に基いて、盛んに暴利を伴ふ小賣商賣を行ふ。斯くても尙ほ彼等が生活の大部分は、これを直接、狩獵若しくは耕耘に俟つてゐるのである。

此の工業民族と商業民族といふが如き進化の二形式は、ニューギニアに於て燒物製作に従事してゐる二島、即ちビリビリー及びチャスに、相併んで存するを見るのである。此の二島に於ては陶器製作は女子の手によつて行はる。而して四邊の島嶼の住民のみならず、可なり遠隔の島民すら其の各自の産物を携へチャス島に來りて、該島の陶器と換ふ。ビリビリー島の男子は製作せる土器を小艇に満載して、沿岸到る處にこれを頒布するのである。此の二島の製陶女は何れも其の製作せる陶器に固有の記號を付し居れるが、この記號は、歐洲の或る學者の説けるが如く、之を商標と見るべきものなりやは、遽かに斷じ得べからざるものがある様に思はれる。

〔三八〕 フインシュ著『サモア群島紀行』八二頁以下、二八一頁以下。セモン著『オーストラリアの叢中』(Semon, Im austral. Busch) 三四八頁以下参照。アフリカにある其れと相似たる土器製作地はシュルツ著前掲書、五四頁に掲げてある。——ヨーロッパ

の僻遠の地にも其れに類せること残存す。Zeitschrift f. österr. Volkskunde 誌、第二卷、(一八五六年) 六二頁は、プエグイナ侯國のリップローネル族に就き報じて曰く、彼等は元來手工を習ひしにはあらねど、多くの道具を自分の手にて作る。彼等は同時に畫工であり、鍛冶匠であり、皮革匠であり、網匠であり、車匠であり、木彫匠であり、其他凡べてである。彼等の間に居る職業的工業者としても、師匠ありてその技藝を修得せるものには非ずして、たゞ錠前職のみは近頃に至りて正則にその職を習ふこととなつたのである。彼等は又、秀拔なる農夫として周知されてゐるも、その主なる仕事は果實の商賣である。この爲めに彼等は、自己所有の果樹園に十分の手入をなすのみならず、他より果實の仕入をもなす。而してこの仕入は果實の僅かに熟し初めし頃已にこれを行ひ、成熟して後、これを町や村に賣り出すのである。なほ同書一卷(一九〇五年)、一〇六頁以下にあるボイケン族の家事に關する極めて興味ある記述をも参照せよ。ボヘミアに於ける同一例は同誌五卷(一八九九年) 一四五頁以下にあり。

自然民族の經濟に於ける重要な部分を閑却せざらんが爲め、吾人は更らに彼等の交通制度と、その公家計とに忽卒なる一瞥を投げようと思ふ。交通制度と公家計、此の兩者は相互親密なる關係に立つてゐる。蓋し交通なるものは、元來公的事項にして、此等自然民族の間には、個人的交通設備なるものを得んとするも、到底之を求め得ざるが故である。かるが故に此の段階に於ける交通は尙ほ未だ經濟的性質を帯び居ざるものなりと、大膽に斷言し得るのである。

交通路は陸上にありて人獸の一度足を踏みて拓きたる場合にのみ限らる。陸上の交通を簡易ならしめる唯一の人工的施設は原始的の橋にして、そは多く單なる一本の丸太より成るに過ぎない。又は川を越す爲めの渡船がそれであるが、その使用には旅行者は村の酋長に料金を支拂はざるを得ない。然も其の料金たる通例甚しき強請を伴つてゐる。之に反し自然の水路は到る處周到に利用せられ、海岸及び河流地方に住む自然民族にして、彼等に固有なる舟を使用しるざるもの一つも之れ無き有様である。今此の舟及び漕具を列舉して説明せんか、そは後に一卷をなすに至るべく、下はアメ

リカ・インディアンの輕舟、樹皮舟より、上は南洋諸島族の精巧なる彫刻を施せる機艇、帆艇に至るまで、一切の型式が現はれて來るのである。然りと雖之を通觀し來らば、此等自然民族の間に於ける造船操艇の技術は尙未だ進歩し居ざるものである。彼等の有する舟の何れもが、本來の意味よりしてそれに舟てふ名を宛て得べきもので無い。そは交通機關と見んよりは、寧ろ生産機關と考ふるの至當なるを思ふのである。蓋し彼等の舟たる漁魚、海賊、争鬭の用に役立つるものにして、それが纔かに旅客交通に對して幾分の値打を得るに至りしは始めて後世のことに屬し、貨財交通に至りては唯だ特殊の場合に於てのみ、纔かに其の重要さが認められたに過ぎないのである。

〔三九〕 ホッゲ著前掲書、六四、七〇、七八、九五、九七、一一五、一六九頁。ウィスマン著『ドイツ國旗の下に縦斷せるアフリカ』三四三、三六一、三六四、三九四頁、及び『第二回縦斷』(Zweite Durchquerung)五六頁參照。

此處に我々をして奇異の感を起さしめる事は、交通制度の一分派なる通信交通なるものは、吾人には最高文化の結果なりとのみ思はれ易いものであるが、事實は甚しく之に反し、それが自然民族の間に著しき發達を示してゐることである。實にこれは彼等自然民族が之が爲めに恒久的なる組織を設けてゐるものなのである。組織とは即ち飛脚制度及び遠隔通話設備にして、この兩者は、本來、原始的施政及び原始的作戰の手段と解すべきものなのである。

平時なり戰時なりに飛脚及び使者を隣接種族に送るといふことは、やがて文化の程度の極めて低き種族の間に象徴的なる記號、もしくは信號手段の統一ある一系統を生ぜしめる原因となるのである。かのオーストラリア内地に住む野蠻最下級の種族の間にすら、各種の身體彩色や頭髮修飾及びその他の慣習的な記號があつて、それに依つて戰爭の開始、祭禮の執行、危機の襲來を近隣諸民族に知らせ、或る目的の爲めに種族全員を集合させる等に使用されてゐる。南アメリカの土人の間に於ては、綱もしくは革紐に種々なる結び目を付けしもの(Quipus)、北アメリカの種族にあつては有

名なるかのワンプム(譯者註)を同様の用途に使用し、アフリカに於ては記號を彫めるもの又はその無き使者杖なるもの使用せられ、馬來族及びポリネシア族の間にも、それと似たるものゝ存するあるを見る。急迫の際には、使者はその命令を暗んじて、これを口づから傳ふべきである。黑人國に於ては、酋長の支配權が酋長自身もしくはその氏人の手によつて干渉し得る範圍に丈け及ぶのであるが、此處では酋長の使者は極めて重要な地位を占めてゐる。蓋し、酋長は此の使者に依つてその領土到る處に君臨するを得、如何なる新らしき出來事も驚くべき迅速さもて酋長の耳に達するを得るが故である。而してそは常に酋長の爲めのみならず、種族各員間の思想交通の用にも亦、供されて居り、例へば狩獵、戰爭などに際しては、極めて巧妙に考案された交通記號があつて、他種族の者に對しては通常嚴秘に付されてゐるのである。

〔四〇〕 その概觀としてはアンドレー著『人類學上の類似及び比較』一八四頁以下のアンドレー筆『記號と繩文字』(R. Andree, Merksichen und Knotenschrift)を參照せよ。——ロイツ著『人類學』第四卷、八九頁。

〔四一〕 尙ほ詳細は Journal of the Anthropological Institute 誌、第二〇卷、七一頁以下にあり。

〔四二〕 ヤンティウス著『アメリカ殊にブラジル人種學』(Martius, Zur Ethnographie Amerikas, zumal Brasiliens)九八頁以下、六九四頁。ロイツ著『自然民族人類學』(Waits, Anthropologie der Naturvölker)第三卷、一三八頁以下。西部アフリカの繩文字に就きてはバステイアン著『ロアンテ沿岸遠征記』(Bastian, D. Exps. n. d. Loango-Küste)第一卷、一八一頁。

〔四三〕 リヴィングストン著『傳道紀行』(マルティン譯)第一卷、二九七頁。又カサリー著『バースト族』(Casalis, Les Basoutos)二三四頁以下の麗ばしき一節をも參照せよ、曰く『此の使者は驚嘆すべき記憶力を有し、彼等に報告を齎らすことを托す時は確かにそれを果し得べきを期待することが出来る』。

〔四四〕 加之、それは半開國の政治状態にも該當する。ロールフス著『アフリカの土地及び人民』(G. Kohls, Land und Volk in Afrika)一六三頁に曰く『アピシニヤ人は酋長の近くに於てのみ、之に服従するものにして、一度その酋長の聲の達する城外に逸するや、最早毫も酋長の言に頓着しない。それは凡べての半開種族間に見得る所であつて、トルコ人、モロッコ人、エジブ

ト人、ホレメ人亦然りである。
〔譯者註〕ランブム(Wampum)とは、北アメリカの野蠻民間に行はれる記號帶であつて、種々の色や、色々の形をした貝殻を珠
數つなぎにしたものである。

飛脚制度と比して劣らざるものは遠隔通話設備である。そは太鼓を極めて巧妙に使用することによつて行はれるものにして、太鼓は自然民族の間に最も弘く行はれる樂器である。而してその太鼓の用法は或はアメリカ・インディアン及びメラネシア族の間に如き發達せる信號法に基くか、或はアフリカに於て屢々見る如き人の言語を模するかに依つて、極めて遠隔の地にありても、尙ほ且つ遺憾なく思想の交換を爲し得るのである。然れどもこの太鼓の言葉を解し得るは普通酋長と其の家族のみにして、爲めにこれに使用する樂器を所有してゐるといふことは、やがて其の位階の標號となるに至れること、宛かも文明國に於ける王冠もしくは笏の如き觀がある。かの種族を招集し、もしくは報告を傳達せんが爲めに發火信號を用ゆること亦なきにあらねど、其の使用さるゝ區域は餘りに廣くない。

- 〔四五〕 ヲルティウス著前掲書、六五頁。カトウクイナル・インド族の間に行はれてゐる不可思議なる遠隔通話裝置に就きては、Archiv f. Post u. Telegraphie 誌、一八九九年號、八七頁以下を参照せよ。
- 〔四六〕 バークンソン著前掲書、一二七頁。尙ほ同書七二、一二二頁をも参照。ライプチヒ人種學博物館年報「Jahrb. des Mus. f. Völkerk. zu Leipzig」第一卷、一四三頁以下のクラウセ(F. Krause)の所説。フィンシュ著「サマ群島紀行」六八頁。シムライフルト著「中部アフリカ」第一卷、九四頁。第二卷、二七頁参照。
- 〔四七〕 其の詳細を説けるものは、フヒネル著「カメルーン」三七頁以下。ウイスマン、ウォルフ其他共著「アフリカ内地」四、二二八、二二二頁。獨逸保護領報告「Mitt. aus d. deutschen Schutzgebieten」第一卷(一八九八年)一頁より八六頁に至るフヘッツ(Vetz)の所説。ウイスマン著「獨逸國旗の下に縦斷せるアフリカ」二一五頁。ヒュッス・シュライデン著「エテイオピ

- 人」(Hühner-Schleiden, Ethiopien)二〇三頁。スタンレー著「闇黒世界横斷記」(Stanley, Durch den dunkeln Weltteil)二五〇、二六一頁。リヴィングストン著前掲書、八八頁。——テイモール人の間に行はるゝ吹笛信號に就きてはヤコブセン著「バクタ海の島嶼界旅行記」(Jacobsen, Reise in der Inselwelt des Banda-Meers)二六二頁。
- 〔四八〕 例へば「ペーターマン氏報告」(Petermanns Mitteilungen)第二卷、(一八七五年)、三八一頁を見よ。尙ほ此の信號法の詳細なる説明はフロベニウス著「人類搖籃紀論」(Frobenius, Aus den Flegeljahren der Menschheit)(一九〇一年ハノーヴァー版)四九一六二頁。

今日吾人が解してゐる意味の公家計なるものは彼等の間に發見し得ない。固より酋長の權力が比較的確立してゐる地方に於ては、酋長は其の種族が狩獵農耕によりて得たるものゝ一部分を傳習的に確定せる歩合にて徵收し、橋梁、渡船、市場等の使用料を徵するが、更らに大なる國にては、次酋長等には酋長に對する調貢の義務がある。然しながら此等は何れも多少附與てふ形式を帯びてゐるのであつて、酋長は之に對して返禮をなす義務を有するものである。尤も此の返禮たるや、其の調貢を携へ來れる者を饗應するといふに過ぎざれど、兎にも角にも酋長にはこの返禮の義務がある。かの販賣者が市場主に支拂ふ市場手数料すら、コンゴ地方に於ては、市場主は夫に對して反對給付を爲さざるべからざることとなつてゐる。即ちその酋長は市場に集まれる人々を娯しましめんが爲めに彼等の面前にて舞踊するのである。此等の中にありて特に吾人の興味を惹くものは、旅行者がその通過する土地の村主に贈物をなすことである。蓋し文明諸國に見る關稅は其の源を此處に發したのである。其れと相併んで閑却すべからざること、比較的大なる國にありては、其の被征服種族より輸す調貢は各種族に特産して彼等が常に夫れを市場に携へ來る生産物より成つてゐることである。例へばルンダ國に就いて見るに、或る地方よりは象牙、獸皮を、他の地方よりは鹽、銅を、北部よりは麥稈細工を、海岸近く住む次酋長等は火藥及び歐洲産の木綿織物を捧げてゐる。其の結果、酋長をしてその手に集積されたる多量の生産物

を以て商業を営み、又は其等の專賣をなさしむるに至つたことも珍らしくない。従つて王は即ち最初の商人と同義語であるといふ事に、此處に一層深刻な意義があるのである。

〔五〇〕 ボッケ著『ムアタ・ナムヴォー領域』二二六頁以下。尚ほウイスマン著『中部アフリカ』一七一頁以下。二〇二、二四九、二六七、二八六、二八九、三〇八頁。『獨逸國旗の下に横断せるアフリカ』九五、三三二、三三九頁をも参照せよ。ザムベシーの北方なるマルトセ領域にも同様のことあり、ホルプ著『南アフリカの七年間』(E. Holub, Sieben Jahre in Südafrika)第二卷、一七三、一八七、二五三、二五七、二六八、二七一頁。

總じて酋長の財政権の大小はたゞ其の物質的権力の大小によつてのみ定められてゐるのであり、臣下の財産は文明國が法律によつて與へてゐる保護を缺いてゐる。黒人^{ネグロ}族の王が調貢、税租の徴收の爲め派遣する遠征隊は屢々奪略隊に墮して、償金の請求は司法をして強奪機關たらしむるの例に乏しくない。而してかの一切の公的關係を支配して居る贈與制度は兎角に贈賄制度に變じ易いのである。

此等の事情が私經濟に對して不利益なる影響を與ふことは、贅言の要がないと思ふ。人口少なき種族の間に現はれる不斷の私闘、比較的人口多き國家の組成には殆んど附き物となつてゐる内政上の專恣政治の爲め、大部分の自然民族は四六時中その生命財産の危殆を感じつゝある。斯かる状態は永い間の習慣によつて、纔に堪へ忍ばれつゝあるとはいへ、それが經濟的發展を阻止せずには措かない。土地に對しては共同所有權あり、何時如何なる所に於ても贈與を爲さざるべからざる義務あり、食料はこれを殆んど自由貨財として見るの風習あることは、これやがて個人の利己心を十分に活動せしむる餘地を奪ふものである。或る一英人は曰ふ、「風習によつて強制される此の分與は彼等をして貪食に耽るの習慣を旺ならしめるに至る。蓋し彼等にとりて確實なりと云ひ得べきもの、そはたゞ彼等が腹中に入れたるもの、

みに限られるからである。又彼等をして分別ある將來豫慮の念の發生を妨ぐるに至る。思ふに或る種の貯蓄を爲さんとすることは彼等の状態に於ては極めて困難なことである」と。此の言たる蓋し歐洲の經濟の立場よりせば正鵠を得たるものであらう。又多數自然民族が歐人と取引をなす際に「乞丐根性」及び「盜癖」を示すものあるを見るが、これはかの贈與の風習と自他辨別の不完全とに關係があると説いたのは相當理由のある所である。更らに彼等にアルコール性飲料を暴飲する風あるは、同じく又生活豫慮の觀念に缺乏せる結果である。然りと雖此等一切の事柄を、その依つて現はれ來る彼等の文化状態より評價せんとするならば、其等は實に所謂「善惡の彼岸」に立つものなることを容易に識ることが出来るのであり、近世英國人の立脚地よりせば能く罪惡と思はれるものも、尙ほ其の裡に沒利己心、寛容の心、不悖の徳といふ如き美德の藏せられつゝあるを容易に認め得るのである。

〔五一〕 フリッチ著『南アフリカ土人』(Fritsch, Die Eingeborenen Südafrikas)三五二頁。外に三六二頁をも参照。ロイツ著『人類學』第二卷、四〇二頁。第三卷、八〇頁。

〔五二〕 ロイツ著『人類學』第三卷、一六三頁以下参照。

かの黒色や銅色の同胞に對して我れこそは文明の承來者ぞと誇りがに振舞ふ今日の文明人の眼には、自然民族なるものは有りとあらゆる一切の經濟的背徳、即ち懶惰、不規律、無考、無駄遣、不信、貪慾、盜癖、無情、道樂の凝つて成れる模型と映ずるであらう。それは正しい。彼等自然民族はたゞ利那の爲めに生き、如何なる規則的なる労働をも之れを厭ひ、義務の觀念を有せず、職業を道義的なる人生の任務と解して居ない。然しながら其の事に劣らず眞實なる事は、彼等が總體に極めて貧弱なる道具を使用して、しかも吾人の最大の驚歎を呼び起す底の多數の労働を營むと云ふ事である。まこと吾人は隨處に、彼等自然人の婦女の手に營まれてゐる瀟洒たる穀田に接し、歐洲の博物館に於て彼等の男子の無限

の辛苦の餘に成りし武器、器具を見得るではないか。而して殊に彼等の經濟の方法は、彼等に一定量の生活歡喜と、常住の快活さとを確證してゐる。思、一度、之に及べば、勞働を苦しみ辛苦に壓迫されつゝある我々ヨーロッパ人はうたた羨望の念に堪へ得ないものがある。

多數自然民族が歐洲文明と接觸してより以來退化し、中には全然絶滅し終れるものすらあるは、これ何の故ぞ。慧眼なる識者は解いて曰く、これ主として我が歐洲文明民族の經濟方法及び技術が彼等に及ぼしたる破壊的影響に歸すべきものなり、と。我等歐洲人は嬰兒の如き彼等の生活の中に投ずるに、吾人の營利生活に伴ふ神經質的不安の念、激烈なる射利心、頽廢せる逸樂の情、宗教的爭鬭反目の思想を以てした。吾人が齎せる完全なる道具は忽焉として彼等の激しき勞役を減殺せしめた。彼等がその石斧を用る數ヶ月を費して完成したりし仕事も、吾人が傳來せる鐵斧を揮へば、僅か數時間にして果し得、僅少の獵銃は以て幾百の弓箭に代ることが出來た。斯くの如くにして舊きその勞働方法が自然人の肉體と精神とを絶えず維持して來、殊に彼等の欲望示度が同一程度の低き水準線を固執してゐた効果ある緊張感は消え失せて仕舞つた。斯くして自然人は滅びて行つたのである、恰も物蔭に生ふる植物が激しい眞晝の日影に晒されて、枯れ萎み行くその如くに。

さりながら凡ゆる自然民族は皆斯る悲惨なる運命に遭逢するものなりとは云ひ得ない。黒人^{ネグロ}族の如きは全種族が上述の影響に對抗し得たのである。然しながら彼等自然人を統轄するに至つた文明國民にして眞に彼等が友人たるの實を示さんと欲せば、幾千年の間に根を下ろしてゐる此等民族の經濟形式、勞働方法及び消費慣習を徹底せる眞摯なる科學的觀察の對象となし、斯くて得たる結果にその植民的處置を適合せしめねばならぬであらう。わが文明國民にしてよく理解せる自己の利益に於て、これを早き以前より實行してゐた事が至囑に堪へない所である。

然も悲しい哉、吾人が最も多く典據としつゝある報告を齎らし來る旅行者は、自然民族の經濟に就きては殆んど注意を拂ふ所がなかつた。彼等の目的は此處に存するに非ずして、儀式、信仰、婚姻の風、裝飾、藝術、技術を觀察するに方つて、最も手近かなる事象を閑却してゐることを珍らしとしない。斯くて人種學的蒐集の多數の目錄中に『經濟』てふ刺語を見出すことが出來ないと同時に、自然人の家族制度に關する許多の研究の目錄中に『家計』てふ語を發見し得ないのである。然しながら翻つて考ふるに、斯かる状態の中にこそ却つて、此處に手を着け始めた研究に取つても亦、或る長所があるかも知れぬ。蓋し本篇に利用された諸觀察は從來多くは唯だ副次的になされて、經濟學者の手によつて行はれたものではなかつたが故に、それには高度の信憑性が内在してゐるからである。即ちかるが故に夫等の觀察は、通例また、我々文化人の文化状態より抽象したるが爲めに、文化に乏しき民族の種類を異にせる生活には到底相適應し得ざる範疇式に押し嵌められる事の悲運に遭遇すに止み得たからである。

三 國民經濟の成立

近代人が其の多數の欲望を満足せしめつゝある方法が絶えざる變遷を閲しつゝあるは、何人も知る所である。此の目的を遂行せんが爲め吾人に必要なる多數の施設及び設備は、これ吾人の祖父母の時代にありては到底夢想だもし得ざりし所なれど、翻つて考ふるに、少し以前まで吾人を驚歎せしめたりし許多の事象も、吾人が子孫の時代に至らば、凡庸爲すなきの愚事と化し終るであらう。

一 國民全體の欲望満足を達成せしめる施設、設備、過程の總體が國民經濟を形作る。此の國民經濟は更らに多數の個別經濟に分たるゝが、斯く分たれたる個別經濟は交換交通によりて相互に結合せられ、極めて錯綜せる依存關係に立つて、相互相倚り相扶けてゐるのである。

斯くの如く各方面に對して相互依存關係に立ちつゝある構成を取れるが故に、國民經濟は過去に起れる全文化發展の結果なのである。而してかの特殊經濟が、その私經濟なると公經濟なると、將たそれに直接從事してゐる人員の大なると小なるとに論なく、何れも變化せざるを得ざるものなるが如く、此の國民經濟も絶えざる變遷の渦中に存するのである。又國民經濟現象の一切は史的文化的現象である。今此の國民經濟的現象を科學的な目的の爲めに概念的に確定し、その合法的な過程を明かにする人は、その國民經濟の本質的特徴及びその運動の法則は決して絶對的性質を有するものには非ず、即ち凡ての時代凡ての文化狀態を通じて適應さるべきものに非ずてふことを、知らざるを得ない。

かるが故に國民經濟に對する學問に課せられる任務は、先づ以て現在の事實 (What is) を認めて、之を説明するにあるけれども、經濟的過程の單に動的なる取扱を以て満足すべきものに非ず、更らに進んで夫れを發生學的に溯源せねばならぬのである。史的文化的事實を遺憾なく了解することは、それが如何にして生じたるかを知る時初めて達し得られるものであるが、従つて文化民族の經濟が今日見る如き國民經濟の形相を取る迄には、如何なる發展分位を經過し來れる

ものなるか、更に其の際、各箇の經濟現象が如何なる變遷を經來りしものなるかを研究すべき任務あることも閑却するを許さざるものである。然り而して此の任務の第二の部分を遂行すべき材料は歐洲文化民族の經濟史が供給すべきである。蓋し歴史研究によりて遺憾なく解明され居るのみならず、其の經過中強力なる外的攪亂の爲めに軌道を逸すること無かりし發展の行程を示すものを求めんと欲せば、この歐洲文化民族を措いて他に求むるを得ざるが故である。さればとて吾人は此の發展行程を以て停止、逆轉等を驗せずして、常に向上してのみ來りしものなりとは言ひ得ざることは言ふ迄もない。

抑々一國民の經濟を其の遠き過去に溯りて了解せんとする經濟學者が、先づ以て提起し來らざるべからざる第一の問題は、「その經濟は果して國民經濟なりや？ 其の現象は今日の交易經濟の現象と本質的に相等しきものなりや如何？ 其の兩者は本質的に相異なるものなりや？」¹⁾とふことであらう。然るに此の問題に答へ得るは、かの舊式の「抽象的」經濟學の大家の手によつて現在の經濟に美事に其の眞なることが證された其の概念的分解即ち心理學的孤立化的演繹法の手段を以て過去の經濟現象を研究することを侮蔑せざる時に於てのみである。

然るに一方翻つて、近時の「歴史」派を見るに、彼等は斯種の研究法によつて舊き經濟時代の本質に突入することをせずして、近世國民經濟の現象より抽象し來れる慣行の範疇を殆んど其の儘に過去の事實に適用せんとするに非ずんば、徒らに交易經濟的概念を何時までも捏ね廻して、遂に其等の概念が善かれ悪かれ一切の經濟時代に適應するやうに見えるまで之を續けて居るとの非難を免れ得まい。斯くの如くにしてかの歴史的现象を科學的に理解する途が阻止せられたことの尠少ならざりしは疑を挾むの要なき所にして、悲しい哉、世に提供されてゐる凡百の經濟史的材料は其の大部分が死せる財寶たるに止まつて、今や手を舉げて、眞箇の科學的利用を仰望しつゝある現状にある。

從來の研究法の不完全なりしことを最も明かに認めしめるものは、舊き時代の經濟或は文化に乏しき民族の經濟に對して文化民族の現在の經濟方法を區別する特徴を與へる方法、即ち之である。そのことは所謂進化段階を立てることによつて行はれるのであつて、其の各段階に附したる名稱によつて、經濟史的進化段階の主相を標語式に包括してゐるのである。

斯かる「經濟段階」を立てることは缺くべからざる方法論的補助手段である。實にそれは依つて以て經濟學説が經濟史の研究結果を善用し得る唯一の方法である。然しながらかの進化段階は、かの歴史家がその材料を分類してゐる時代分けと混同さるべきでない。歴史家にありては、一「時代」内には其の間に生起せる重要事項の一切を擧げて數へねばならぬものであるが、理論家に於ては即ち然らず。彼れが立てる段階なるものはたゞ正常なる事項をのみ表すべく、偶發の事項は平然之を過眼し去り得るものである。かの一切の經濟現象と經濟設備とを生じ來る緩慢にして多くの場合數百年以上にも渉る改變過程に際しては、ある場所にては駁々乎たる進歩をなしてゐるに拘らず、他の場所にては其の發達極めて遅々たるを見るは、實際に於て決して稀有の事態ではない。斯かる變態現象は歴史家に取つては特に重要なものであるかも知れぬが、理論家の當に力むべきは大に之と異り、全發展をその主分位に於て把握するてふ其の事のみ止まつて、あらゆる現象の生滅流轉するかの所謂過渡時代なるものは、之を拋棄して顧るの要がないのである。かるが故に理論家の取扱ふべきは唯だ進化状態のみであつて、此處に進化の法則を發見するのである。

然も舊來の斯種の企圖は果してどうであつたか。其等は皆、到底事物の本質に透徹するを得ずして、徒らに其の皮相にのみ停滞するの不運に沈溺しつゝあるのである。

その中にありて最も著名なるはフリードリッヒ・リスト¹⁾によつて初めて立てられたる段階である。そは生産の主要方

1) Friedrich List

向によつて分類するものであつて、五つの時期を劃し、これを以て温帯に住む各民族が經濟的正常状態に到達する迄に必ず経過せざるべからざる段階なりと説いてゐる。五時期とは曰く、(一)狩獵生活の時代、(二)牧畜生活の時代、(三)農耕の時代、(四)農業製造業の時代、(五)農業製造業商業の時代即ち之れである。ブルノー・ヒルデブランド¹⁾の案出した別種の段階は交換交通の状態を以て判別の標準と爲せるものであつて、依つて以て三箇の進化段階を立てゝゐる。即ち實物經濟、貨幣經濟及び信用經濟これである。

今此の兩箇の段階の立て方を見るに、其等は何れも「原始状態」のみを除いて、凡べての時代に於ては貨財交換を基礎とせる國民經濟の存しむたることを假定するものであつて、生産及び交換の形式が時代の異なるに伴れて異りるを別にする丈けである。斯くて經濟生活の基本現象は凡べての時代を通じて、本來同一種類のものなりと云ふ事も斷じて疑つてゐない。従つて彼等の爲すべき一切は、過去の諸時代に於ける各種の經濟政策的處置及び設備は生産又は交易の方法が夫々相異なる處に其の根據を有するものであつて、現在に於ても、その状態にして變化せんか、處置も亦従つて變化せざるを得ぬものであることを説明するに過ぎない。

經濟學の最近の綜合的敘述にして、歴史派の範圍より出でたるものにあつても、尙ほ依然として斯かる見解を持して晏如たるもの比々皆然りである。然も安ぞ知らん、それは英國人の抽象的經濟學說中に好んで採用されてゐる全然唯理論的な歴史構造と五十歩百歩を出でずとは。今、之を明らかにすべく、余に數節を割き給へかし。

アダム・スミス²⁾とリカルド³⁾とが、據つて以てその舊式の學說を築き上げたる状態は、分業的交易經濟の状態、言ひ換ふれば言葉の本來の意味でいふ國民經濟の状態である。即ち各人は己が使用する貨財を自ら生産するには非ずして、他の人の用ゆる(と思ひ做す)貨財を生産し、それを以て己が必要とする雜多の貨財及び勤勞に換ふる状態であつて、約

1) Bruno Hildebrand 2) Adam Smith 3) Ricardo

言すれば、一個人を養ふべく多數人若くは一切人の協力を必要となす状態である。かるが故に英國の經濟學は實は交易論たるに過ぎずして、分業、資本、價格、勞銀、地代、資本利潤の現象及び法則が其の主要なる内容を占め、生産の全理論、就中消費のそれに至つては、之を取扱ふ宛として繼母の繼子に於けると異らぬものがある。一切の注意は貨財流通に傾注され、貨財分配も亦この中に併せられつゝあるのである。

會ては交易無き社會状態あり得たりしならんとは、彼等が夢想だもし得ない所で、時に斯かる状態を方法論的方便として假定することが無いではないが、それは却つて荒誕無稽なる虚構に墮して、新人の嘲笑を購ふに過ぎないのである。しかのみならず普通には彼等は原始状態よりして直ちに複雑せる交易過程を演繹しつゝあるのである。アダム・スミスは人類には天性として交換の性嚮ありとなし、分業すら尙その結果として初めて現れ來るものなりとしてゐる。リカルドは原始時代の狩獵民と漁撈民とを目して二個の資本主義的企業家の如くに取扱ひ、彼等の間に勞銀の支拂、資本利潤の獲得ありと説き、彼等の生産費及び生産物價格に高低の現象ありと説いてゐる。斯かる思想傾向を有する著しい學者を獨逸に於て求むるならば、それはチューネン¹⁾であつて、彼は其の「孤立國」の構成を説くに當り、全然交易經濟の假定より出發してゐる。即ちかの農耕の段階にまでも發達しむる極めて遠隔の地帯さへ、唯だ中央都市に於て彼等の生産物を販賣することを念頭に置いてのみ經濟してゐると云ふのである。

〔一〕 已に重農主義者がこれに似てゐることは言ふまでもない。チュルノー著『回想録』(Turgot, Reflexions) 二頁以下参照。

歴史的人種學的研究にして、自ら近世交易經濟の觀念に囚はれず、これを以て過去を推論するの愚を敢てしなかつたならば、上述の如き荒誕なる虚構が原始民族の眞の經濟状態とは甚しく相違し居れることを、已に早く悟り得たであらうに、思、久しく之に及ばなかつたことは遺憾の事であつた。然るに此處に、過去の生活條件を眞によく了解し、其の

1) Thünen

現象を現代の尺度もて推測せざる徹底せる研究が現はれた。而してそれが到達すべき當然の結果は將に次の如くであらう。曰く、國民經濟は幾千年に渉る歴史的發展の產物にして、近世國家より古きものに非ず、それが成立する迄には人類は永き間交換取引なく、よし有りとするも到底國民經濟的のそれとは云ひ得ざる生産物及び業績の交換の形式下に經濟し來れるものなり、と。

此の全發展を一箇の觀點の下に解釋せんとせば、その解釋は國民經濟の本質的現象に透徹するものなるは言ふ迄もなく、更らに舊き經濟時代の組織的要素を解明するものでなくてはならぬ。而してそれは貨財の生産がその消費に對する關係を了解するの意に他ならない。即ち貨財が生産者より消費者に到達するまでの道程の長短によつて區別し得るのである。此の觀點に立つて、吾人は全經濟的發展を、少くとも十分な精確さを以て歴史的に探究し得る中央及び西部ヨーロッパ民族に對しては、三段階に分つことが出来る。即ち、

- (一)閉鎖的・家内經濟の段階(純粹の自己生産、交換無き經濟)……此の段階に於ては、貨財はそれが生産されたる經濟内にて消費さる。
- (二)都市經濟の段階(顧客生産、直接交換の段階)……此の段階に於ては、貨財は生産する經濟より直ちに消費する經濟に移さる。
- (三)國民經濟の段階(商品生産、貨物流通の段階)……此の段階に於ては、貨財は通例、企業的に生産せられ、それが消費さるゝまでには幾段かの經濟を経なくてはならぬ。

吾人は此の三つの經濟段階を一層細密に知らんと欲するのである。過渡的形相、即ち過ぎ去りし狀態の遺物若くは來るべき時代の前驅として或る時代に點出し來り、歴史的には或はこれを取扱ふことが出来るにしても、此處には其等が偶發的に現はれ來ることに迷はされずして、此等三つの經濟段階の夫々を、典型的な純粹さに於て把握せんと努めようと思ふ。斯かる手法によつて始めて、吾人はこの三段階の深刻なる差別とこの各自に固有なる現象とを明確に意識することが出来るのである。

一家内經濟

閉鎖的・家内經濟段階の特徴は、已に述べたるが如く、生産より消費への經濟の全循環が家(家族、氏族)てふ閉鎖された範圍内に於て完結せらるゝの點に存す。その生産の種類及び尺度は家族員の消費需要に準じて、各家夫々に規定されてゐる。生産物は何れもそが原料の獲得より享樂に供せられ得べき狀態に到達する迄の全變遷を同一經濟中に經過するものであつて、其の間何等の仲介者の在するなくして直ちに消費に推移し、此處に遂に元の無に歸して仕舞ふのである。かるが故に、貨財生産と貨財消費とは相互内・存的關係に立ちつゝあるものにして、中斷さるゝことなく又差別を附し得ざる唯一の過程を形作つてゐる。營利經濟と家計とは到底之を區別するの途がない。共同經濟を營みつゝある人間團體夫々の營利はその勞働の生産物と一にして離すべからず。更らに此の生産物は彼等の需要充足、即ち彼等の消費と一にして差別すべからざるものである。

交換なるものは、本來に於ては全く知られてゐない(六四頁以下参照)。原始人は生れながらに交換の性向を有してゐないのみならず、寧ろ反對にそれに對して嫌惡の情をさへ懐いてゐる。「換へくらする」(tauschen)といふことゝ「欺くらかす」(täuschen)といふことゝは古語に於ては同じものであつた。これ一般的に認容される價値の尺度を缺きゐるが爲めに交換をなさば欺かるゝに非ずやを慮るの要があつた。而已ならず己が額に汗して得たる生産物は、それを作り

出せる人の身體の一部ともいふべく、これを他人に渡すことは、之れ取りも直さず己が身體の一部を分割して人に與ふるを意味するものにして、やがて惡魔に魅入らるに至るべしと考へられてゐた。斯くの如くなるが故に、中世の餘程末期まで、交換は政府、立會人を前にしての締結、象徴的方式の使用の保護の下に、成立してゐたのである。

斯くの如き自主的經濟は先づ第一に、其れが支配する土地に依存してゐる。主人公が獵者又は漁夫として、自然より自由に提供せられる天産物を得てゐるにせよ、遊牧者として、家畜の群を伴うて遊牧してゐるにせよ、或は其の傍に田畑を耕作してゐるにせよ、或は主として農業によつて生活してゐるにせよ、彼の勞作と心勞は常に彼が支配してゐる一片の土地によつて制約されつゝあるのである。斯くて達識と技術的熟練とがいよ／＼進歩し行き、欲望満足の機構が愈々計畫的に又益々豊富となり以て行けば、この依從關係は層一層大を加へて、遂にはそれを支配すべき筈の人間にして、却て土地に隷屬するに至るのである。それを目して、物化モノカと稱したるは、實に當を得たることと思惟せられる。蓋し此の進化段階に於ては、自己の權利によつて土地を支配し得る其の人のみが自己經濟を行ひ得るものにして、斯かる境遇にゐざる者は土地所有權者の奴僕となり、かくて土地に結び付けらるゝに非ずんば、到底その生命を支へ行くを得ざるものなりてふ事を斷定することを以て、此處に満足せざるを得ない。

此の閉鎖的家内經濟にありては、家族員は單に土地より天産物を獲ざるべからざるのみに止まらず、其の天産物獲得に必要な道具及び器具をも自ら作らざるを得ず。更に進んでは、原料品を變形及び精製して使用に供し得らるゝ様にせねばならぬのである。斯くの如きの事情は勞働任務をしていよ／＼雑多ならしめると同時に、更らに使用する道具の單純なるが爲めに能力及び知性を一層多方面に働かしめるを促し來たることは、近代の文化人が夢想だもし得ざる所である。而して此の自主的經濟を營む家族共同體の各成員に對して、此の任務の範圍を狭め得るは、其の家族の間に於

1) Verdinglichung

て年齢及び性により、もしくは個人の力量天賦に應じて、勞働を夫々に分割することによつてのみ行はれ得るものにして、かの原始民族間に共通の事項なりと認め得る男女による家内生産の峻別てふ事實も共に、この事情に歸することが出来る。斯くの如く文明人が考へ及ばざる程の知能を働かしめ、年齢及び性による勞働分割の行はるゝあるに拘らず、他の側面に於ては舊き勞働方法によつて十分の効果を收め得ざるものあるが爲め、或る種の經濟目的を到達せんが爲めには、多くの場合多數個人の同時的共働をなす必要がある。斯くて此の段階に於ては、共力1)が尙ほ分勞2)よりも一層重要な役割を演じつゝあるのである。

〔二〕斯かる状態を髣髴せしめんが爲め、此處に歐洲の端の地方に於ける農民生活の古き記録を取り來るの要がある。例へばテイヤー著『リーフランド及びエストランドの名譽辯護』(H. F. Tiede, *Lief- und Estlands Ehrenrettung*)(一八〇四年、ハッセル版)一〇〇頁を参照すべし。ホギオ著『朝鮮』(M. A. Poggio, *Korea*)(一八九五年、ウィーン、ライプツヒ版)三二二頁には、其れに類似せることを敘べて曰く『朝鮮全土には何時とも知れぬ昔より、極めて重要にして缺くべからざる品物は一家の中にて作らるる風あり。妻と娘はたゞ大麻のみならず絹をも紡ぐのである。此の後者の目的に多くの家々では蠶を養つてゐる。家長は種々の種類の仕事をしなくてはならぬ。必要に応じては、或は畫工となり、或は石工となり、或は指物師となる。燒酎、植物性脂肪、染料を得、蓆、帽子、籠、木履、畑道具を作ることは皆一家の仕事となつてゐる。一言を以て盡せば、各人はたゞ自己の爲めのみ、自分自身の欲望の爲めにのみ勞働してゐるのである。斯かる事情の爲め、朝鮮人はたゞ必要缺くべからざる物を得んが爲めにのみ勞働する萬能手工業者(Universal-Handwerker)となつてゐる』と。

今、此の時代に於ける家族なるものが、今日吾人の有する家族の夫の如く組織されたりとせば、即ち夫婦と兒女及び僕婢とのみによりて組織されたりとせば、能くかの年齢及び男女による分勞と共力との行はるゝありとするも、唯だ僅かなる活動餘地を與へ得たにすぎなかつたであらう。又家族の中に各個人が現代に見る如き獨立的生活を營み行き

1) Arbeitsgemeinschaft 2) Arbeitsteilung

得るが如き家族の制度なりせば、その家族は耐久力と發展能力とに極めて乏しきものであつたであらう。

今日の歐羅巴文化民族が歴史の水平線上に繼に頭を擡げ出したる時代には、彼等の間に氏族制度が行はれて居たと云ふことが此處に意味深いものがあることとなるのである。抑々氏族 (Freihocher, gentes, Clans, Hausgemeinschaften) とは、血族關係に立つ多數人の幾世代より生じたる大なる集團にして、其の初めは母權によつて統合され、後には父權によつて結合され、共同の土地所有權を有し、共同の經濟を營み、共同の權利保護團體を形作れるものである。而して歐洲にのみ見得る一夫一婦の習俗ある民族の間においては、各氏族は多數の小親族集團より組織され、此の集團は何れも夫婦及び兒女より成つてゐる。氏族以外の人間は、鳥の如くに全く自由にして、法律上併びに經濟上の存在の認められるものなく、困厄に際して援助するものなく、殺さるゝも復讐して呉れるものもなく、死するも會葬するものさへないのである。

〔三〕これに就きてはフュステル・ドゥ・グラインシュ「古代都市」(Fustel de Coulanges, La cite antique)〔一八六四年パリ版〕。ラッナー著『原始財産』(E. de Laveleye, Des Urigentium)〔一八七九年ライプチヒ版〕及びグロッセ著『家族の形態と經濟の形態』(E. Grosse, Die Formen der Familie und die Formen der Wirtschaft) 特にその第八章を参照せよ。

〔四〕アフリカには今日も尙ほ斯くの如き状態存す。即ち「法律上の個體は各個人に非ずして團體、家族、親族なりとは黑人族の法律觀念中主要なる要素である。權利義務は團體内部にあつては殆んど無制限に移轉し得べきものにして、罪人、悪人あればこの團體員全部を罰することを得、團體員の一人が犯せる罪に對するこの團體の責務は、その犯人が逃走し又はその仲間より分離するもなほ消え失せぬのである。阿巴ならす死刑さへ、その犯人以外の人にまでも及ぶ」。アヒネル著『カメーン』(M. Buchner, Kamerun) 一八八頁。尙ほトナー著『原始人經濟組織論』(Tonner, Essai sur le système économique des primitifs) 一七頁以下参照。南洋諸島民の間にもそれに似たることあり。パーキンソン著『オスマルク群島』一八〇頁以下。

今此處に問題となれる民族の凡ては殆んど定住しつゝあるものなるが故に、彼等は已に農耕を知つてゐた。彼等が居住を定むるに當りては、普通氏族全員相合して大なる共同家屋、農園、村落を經始した。かくして土地所有が確立されるや、共同心は弛緩し、その大團體より分れて父權に従へる少人數の家族協同體を生じた。此の風は、今日にても尙且つ南スラヴ族のザドルガ種、ロシア人、コーカサス人、ヒンドゥー族の大家族に見ることが出来るのである。しかも尙ほ幾百年の間は、一村の全家族協同體は土地を共有財産とし、或る期間それを共同して耕すのである。固よりそれより得たる果實は各家族協同體夫々の消費に供されたのである。

斯かる大なる家族團體に於ては、勞働の共同及び分配は可なりに廣き範圍に行はれ、夫妻、母子、父祖父てふ各群は生産と家計とに於て各自特殊の任務を擔當し、各個人はその得意とする技倆を揮うて己が氏族の仕事に携はると同時に、其處に又參與することを許さざる制限もあつた。兄弟の友愛、子弟の聽從、長上に對する尊敬、從屬、從順等の如き諸の感情は、此の協同體間にその發展の頂點を見ることを得たのである。氏族はその氏族各員に代りて負債及び贖金を支拂ひ、各員の蒙れる侮辱に對し復讐をなすのであるが、一方氏族各員はその氏族に自己の全生涯を捧げ、獨立の感情一切を擧げて、之れを犠牲に供してゐる。

然るに斯る感情の強度が漸く衰へ來ればとて、其處に直ちに全的な特殊經濟を有する近世小家族が生まれ出ではしない。蓋し斯る近世小家族の現はれんか、その當然の結果として經濟的給付能力の羸弱を來し、自主的家内經濟の倒潰を誘致するに至り、仍つて多分以前の野蠻状態に復歸するを免れ得なかつたであらう。此處にこれを避けんが爲めに、二つの手段を生ずるに至つたのである。

其の一手段は即ち小さく成れる家族の手にては爲し遂げ得ざる經濟的任務に對して、かの古きまゝの大氏族團體を局

地的機關として維持し保存して置くといふことである。これは共有財産及びその共同使用の基礎の上に部分的共同經濟を形成し、以て各戸各別に經營する時は不經濟なる勞力浪費に陥るが如き仕事(例へば田畑の見張、家畜の番)を事情によつては引き受けたのである。而已ならず其の地方的集團に屬する特殊家計の凡べてに平等に關係してゐると云ふのではないが、個々家計の手にて之を營むには餘りに困難なる經濟的任務も亦あつたのであり、例へば家の建築、舟の建造、森林の開墾、疏水灌漑とか、遠距離に跨る狩獵や漁撈に従ふとか、或る季節だけ此處彼處の家々で異常なる勞働需要があると云ふのである。此等の場合には、所謂「請願勞働」なるものが之に應じてゐた。これは家父の招に應じて近隣の有志の人々の間に出來た一時的共力なのであつて、仕事終れば再び解散して仕舞ふ。斯種の多數は、後世種々に變形されたのであるが、中には又其の儘殘されてゐるものがないではない。かのスラヴ種族の間に現在行はれてゐる共力、即ちロシア人の間の「アルテル」²⁾、ブルガリア人の間の「チュエッタ」³⁾又は「ドゥルヂナ」⁴⁾、セルビア人の間の「モバ」⁵⁾は實にその遺風であつて、ドイツの農民が家を建てる時、羊毛を載る時、麻を梱る時等に相互助力し合ふ習俗を指摘し度い。

〔五〕『勞働と律動』第四版、二五六頁以下参照。

斯くの如く然りと雖、此の設備にして如何に廣く行はれ得るとも、それによつて充たされ得る需要の部分は比較的僅少ななるものにして、それは毫も各戸の經濟的自主權を毀損するものに非ざること、恰も今日我々の農民間に自己生産の行はれつゝあるに拘らず、それは寸毫も交易經濟の鼎の輕重に相關せざると同様である。況やかの一時的共力は、決して企業に非ずして、直接的需要充足の設備に外ならざるに於てをや。今日甲の手傳をなすかと思れば、明日は乙を援くといふ有様であるか、又は共同勞働によつて得る結果は特殊經濟的消費に分配するかしてゐる。特に代價を支拂うて行ふ交換に至つては、吾人何處にも之に接し得ない。かの印度の村落協同體に見る如き、若干の工業勞働者が、我が田舎の

1) Bittarbeit 2) „Artel“ 3) „Tschetta“ 4) „Družina“ 5) „Moba“

村備牧畜者のその如く、村備職人として存してゐる地方に於てさへ、それは存してゐない。彼等は全體の人の爲めに勞働するのであり、その代りに全體の人より養はれてゐるのである。

氏族制度の崩壞より生ずる損失を補ふ爲めの第二の手段は如何。それは人爲的に家族の範圍を擴張することである。それは他の(血屬關係なき)要素を取入れて家族中に編入することによつて行はれたのであつて、茲に奴隸制度と家人制度とを生ずるに至つた。

〔譯者註〕「奴隸制度」は Sklaverei を、「家人制度」とは Heirigkeit を譯したるものである。蓋し、「奴隸」とは賣捌く、ことを得べき不自由民にして、家人とは賣捌くことを得ざる不自由民を稱するからである。(福田博士著、坂西由藏氏譯『日本經濟史論』一七八頁参照)

此の頼る邊なき種族員若くは征服されたる敵を不自由民として、それに勞働を強ひた事實は、古き氏族協同體を崩壞せしむるの原因となりたるか、將たそれが崩壞の結果として現はれ來りたるものなるかは、此處に論定せず置いても差支へあるまい。さりながら此の奴隸制度なるものが在來の勞働組織を有する閉鎖的家人經濟を維持し行き、それと同時に欲望の擴張と醇化とを進め行くの一段となれることは否むべからざる事實である。蓋し家に附屬せる奴隸及び家人の數にして愈々大ならんか、その家の勞働がその需要を満すことが益々容易となつたからである。耕耘に就いて云へば、全勞働者群によつて一層廣き面積が耕され得、穀物の粉磨、焼餅、紡績、織布、道具の製作、家畜の馴養等の如き一定の技術的作業に各不自由民をして一生涯これに従事せしめ得たのであり、彼等は此の勤勞に對して特殊の訓練がされ得たのである。一家の名望いよ／＼高く、主人の富益々大を加へ、その經濟益々大を増し行かば、原料獲得及び原料精製の技術は一層多様に、一層豊富に、その經濟中に發展し得たのである。

ギリシヤ人、カルタゴ人、ローマ人の經濟は實に斯種に屬してゐたのである。ロートベルトゥス¹⁾は此の事を已に「ネレーシオン前に知つてゐたのであるが、彼はその經濟を稱して『家産經濟』と呼んでゐる。蓋し *oikos* (家) が經濟制度の單位を意味してゐるからである。即ち家は單に住宅たるのみならず、共同經濟を行ふ人間集團たるを意味し、之に屬するものは所謂「家族仲間」(*oiketai*) なのである。此の *oiketai* と云ふ語は言語の歴史の用法より云へば、當時一家の勞働の一切を負擔してゐた經濟的奴隸をのみ意味するものに過ぎないと云ふ事は注意すべき事柄である。ラテン語の *familia* といへるも、之れに酷似せる意味を有し、*famuli* (家奴、婢僕) の總體を指すものである。 *Pater familias* といふは奴隸の主人公てふ義にして、經濟の總所得はその手中に收められる。又 *Patria potestas* てふ語は夫權及び父權を奴隸所有者の主宰權に概念的に融合したものである。家族各員は決して自己一身の爲めに利を營むものに非ずして、かの *pater familias* の爲めに働き、此の *pater familias* は實に何人に對しても一樣なる生殺與奪の權を握つてゐるのである。血屬關係あるものも、それ無きものをも、其の間何等の懸隔を律せずして、家族の全員を平等無差別に統率するたりしローマ家父の主宰權は、かの單に血族者のみより成れる母權氏族は更らなり、かの古き父權氏族に見たりしよりも遙かに緊密なる結合と數層大なる給付能力とを閉鎖的家内經濟に與へてゐる。ありとあらゆる個人的生存は消散して、國家即ち法律の眼中たゞ家族協同體の存するのみ。その規定するものは家と家との關係にして、人間と人間との關係に非ず。家の内部に起れる事項に對しては、風馬牛相關しなかつたのである。

斯くの如き奴隸を所有する家の經濟的自主權を基として、古代ローマの社會史の全部と政治史の大部分とを説明することが出来る。其の當時には生産的職業階級なく、農民なく、手工業者なく、在りしはたゞ大小の占有者、即ち富者と貧者とのみであつた。富者にして貧者を一朝その土地の占有權より押し出さんか、彼は貧者を無產者²⁾たらしむるのであ

1) *Rodbertus* 2) *Oikewirtschaft*

る。土地を離れたる自由民は取得無能力者と何等擇ぶ所がなかつたのである。蓋し當時にありては勞銀を以て勞働を購ふ如き企業資本なるものなく、閉鎖的家庭の外には工業が無かつたのである。 *mitibus* なるラテン語は、その原義より云はゞ決して自由なる營業者を意味するものには非ずして、農奴及び牧奴の手より穀物、羊毛、木材等を得て、それを麵麩、衣服、器具等に加工する手工奴隸の謂に外ならなかつた。ペトロン¹⁾曾て成金者に就き述べて曰く、『彼が物を購ふなど夢々思ふべからず。あらゆる物は彼の許にて作らるゝなり』と。斯くの如き結果は遂に、かの素晴らしき過大農業制度と、驚くべき多數の奴隸群を生ずるに至り、それが個々の占有者の手中に集中されてゐたのであり、この占有者の下に於て、勞働は極めて多方面なる組織を取り、爲めに夫れによる製作物及び給付は極めて墮落せる趣味をさへ満足せしめ得たのである。

〔六〕 露國にて、體僕制度の廢止以前には『家事向に必要なるもの一切は、其の家に於て、奴隸の手によりて作らせる』ことが地主の御自慢の事柄に『なつてゐた。クラキョキン公著『革命家日記』(Fürst Krupotkin, *Memoiren eines Revolutionärs*) (ペトロン譯) 第一卷、三五頁以下。尙ほ其處には興味深い種々の事柄が述べられてゐる。ミルコツ著『ロシア文明史草案』P. Milinkow, *Skizzen russischer Kulturgeschichte*) (一八九八年ライプツヒ版) 第一卷、五一頁を参照せよ。

十七世紀に於て、ローマの奴隸仕事に關し努力の餘成れる一小冊子²⁾を書いた和蘭人ポプマは裕福なる家族に屬してゐる奴隸を、その仕事の名に依り數へて百四十六を算してゐる。されど今日に至つては、種々の誌文に基き其の數を更らに幾倍せしめ得るのである。今、この歴大家計の範圍及び給付能力を知らんと欲して、此の精巧なる勞働組織の箇々の事項を探究し行かば、此の歴大なる家計たる、實に今日、一大都市の無数の業務が、町村又は國家の設備と相俟つて、はじめに供給し得る程の貨財及び勤勞を、何等の制約なく、一所有權者の隨便に委ねつゝ、ありしことを解し得べく、更らにこ

1) *Petron* 2) *T. Popma*

の大量の人的財産は、近世大分限者の巨大資本にのみ比し得べき大なる財産を増殖せしむる手段を提供したのである。

〔七〕 ホプナー著『自由奴隷勤勞論』(Titii Lippinae Phrysi de operis servorum liber) 最近版、一六七二年アムステルダム版。

富裕なるローマの一家族に仕へるたりし全不自由労働者階級は、これを二つの主なる集團に分つことが出来る。即ち

一 *familia rustica* にして、一 *familia urbana* である。*familia rustica* は生産的目的に従事するものにして、どの

大領地にも必ずその上に管理人及び副管理人各一人あり、彼等には耕地労働者、葡萄園丁、牧者、家畜番、料理番、婢僕、糸取り女、機織り男女、晒布工、裁縫師、建具師、指物匠、鍛冶匠、農副業に従事する労働者等の著しい大衆群を統御する監督及び職長の幹部員が屬してゐる。又大領地にては各労働者集團は更らに十人宛の隊伍に分たれ(*decuriae*)、夫々が一人の指揮者又は「驅使者」(*decurio, monitor*)の下に隸屬してゐたのである。

〔八〕 マックス・ウェーバー(M. Weber)が雑誌「Die Wahrheit」第六卷、六五頁以下に敘べたる皇帝時代のローマ領地經營に就いての明晰なる所論を参照せよ。

familia urbana は行政職員にして、即ち主人公及び女主人公の内外の勤務に従ふ職員である。之れには先づ財産管理人ありて、その下に出納係、記帳係、借家管理係、購買係等がある。主人公が國有租借地を借用し、又は艦船業務を営む時は、其れに必要な奴隷の役員及び労働者の特別の幹部を有してゐる。家の内部の勤務に當るは家内管理人、戸口番、各部屋の侍僕、家具係、銀器保管係、衣服保存係であり、給養の方面を監視するものに執事、善取締役、貯藏室監督係があり、庖厨には料理番、火焚番、麵麩焼人、菓子職工、肉入麵麩焼人蜷集し、狄飼、肉の切盛り人、毒味係、酌人等食卓の事に當り、男郎、舞妓、矮人、道化役者の一群ありて賓客を款待する。主人公の私事勤務には、訪客を接待する式部職、各種の侍臣、風呂番、香油塗役、抱へ外科醫、身體各部専門の各醫師、髭剃人、朗讀者、秘書役等があり、尙

ほ學者、哲學者まで抱へ置き、建築家、畫工、彫刻家をも養ひ、音樂堂をも設けてゐる。圖書館の設備又具はりて、寫字係、羊皮紙製作係、製本係を置き、それ等の設備によつて圖書館係は一家の自己經營に於いて書籍を作らせてゐる。不自由民の新聞記者、速記係までも富豪は必ず置いてゐる。主人公の公儀に出頭するや、奴隷の大部隊は之れが先驅をなし(*antambulones*)、他の一部隊は其の殿をする(*pedisequi*)。途上行列に出會して主人に挨拶する人の姓名を主人に告ぐるは *nomenclator* の役である。家附の *distrihutores* 及び *tesorarii* ありて、人民の間に或は賄賂を頒ち或は選舉宣言書を配る。古代ローマには新聞讀賣人ありて、甚しく珍重されたりしが、それは實に貴族候補者の財産であつて、候補者は夫れを利用してゐたのである。此の政治的勢力扶植制度を補ふに演劇、馬車競走、闘獸、劍客試合等の手段を以てしてゐるが、此等は何れも特殊なる奴隷隊の手にて行はれてゐる。主人が知事となつて地方に行き若くは其の莊園に滞在する時は、奴隷の飛脚及び文使があつて毎日都との便をする。更らに眼を女主人公の下に屬する奴隷官廷國家に轉せんか、吾人にそれを言ひ表はすべき適當の言辭なきを奈何にすべき。此れに就きてポエッティガ¹⁾は獨得の一書(『Sabina』)を著してゐる程であつて、兒女の扶育係、教育係が實に際限も知れぬ細かき専門に分たれる有様に見れば、吾人能く呆然たらざるを得ないのである。之を要するに、吾人が到底信じ得べからざる程の人間の浪費が此處に行はれつゝあつたのである。然りと雖所詮は、此の大規模の訓練及び教育の制度によつて維持される四面六臂の閉鎖的家内經濟によつて、奴隷主の個人的力量は幾千百倍せしめられたのであり、これやがては全世界の半分を擧げて、一握少數のローマ貴族の掌裡に委ねしめるに與つて力ありしは到底否むべからざる所である。

〔九〕 第六講参照。

〔一〇〕 極めて發達せる奴隷經濟は常に、最も富裕なる家族の間のみ見得ることは言ふ迄もない所であるけれども、それは同じ

1) Böttiger

様な割合を以て甚しく富裕ならざるもの間にも到る處に見ることが出来る。エリス(Ellis)は其の著『マダガスカル史』(The Story of Madagascar)第一卷、一九四頁に述べて曰く、『一家族の有する奴隸の數多き時は、其の中の或るものは家畜の番をなし、或る者は食用塊根の培養に従事し、或るものは薪炭を集む。奴隸女は、或は紡ぎ、或は織り、或は絹を編み、或は洗濯をなし、其他家事向の仕事にたづさはつてゐる』と。——鍛冶工を除きては専門の職工の存在を認め得ざるかのムアタ・ヤムゾー領域においてすら、尙ほ其の統治者は其の家族に備ひ付けの音楽家、魔法師、鍛冶匠、調髪師、料理女を有してゐる。ゴッゲ著『ムアタ・ヤムゾー領域』二三一、一八七頁。

國家に於ける經濟の狀態、また之と異なる所がない。アテンに於ても、ローマにありても、下級官吏及び奴僕¹⁾の地位は一切擧げて之を奴隸に委ねてゐる。奴隸は國家独自の經營にかゝる道路及び水道の敷設をする。石切場、鑛山に働き、暗渠の掃除をする。奴隸は巡査となり、死刑執行人となり、獄卒となり、國民議會の振れ人となり、政府施米の頒與者となり、僧會の寺男や神僕係となり、國庫出納係となり、書記となり、奉行職の使者となつた。國有奴隸の一團は必ず何れの地方官にも隨伴し、何れの將軍にも從つて、彼等が活動の舞臺に赴くのである。而して此等の人員を扶養する費用は主に國有地、併びにアテンに於ては同盟各地の調貢、ローマにては地方の調貢より輸送されてゐたのであつて、ツイエ¹⁾は之を稱して『ローマ市民の準領土』(quasi praedia populi Romani)と云つてゐる。然るに後世に至りては、手数料の形式を取つた租税より支辨されてゐる。

これと同じ特徴を示すものは中世初期に於けるラテン民族及びゲルマン民族の經濟である。此等民族の間に於ても、經濟の進歩は閉鎖的家内經濟をして大規模の構成を取るの要を生ぜしめたのであつて、之をよく表現するものは、國王貴族及び教會に屬する廣大なる土地財産の上に、その體、僕及び家人によつて營まれて居たかの大なる莊園經濟である。此の莊園經濟は其の箇々の點に就きて觀察するに、皇帝時代末期のローマ帝國の農業がコロナートより發見した組織に

1) Cicero

準據する所極めて多いけれども、又ローマ共和時代の後期に現はれたる集約的農場經營の制と甚しく似てゐるものがある。然れども此の分業的大農業の發達は、一個重要な點に於てローマ時代のそれと異なるものがある。即ちローマに於ては大なる土地所有は小なる土地所有を併呑し、農民の腕に代ふるに奴隸のそれを以てし、後これをコロネとなすに至つたのであつて、從つて大なる家産經濟に於ける經濟的進歩は其の代償として自由農民階級の無產者化を齎らざるを得なかつた。然るに中世に於ける莊園經濟にありては、自由なる小地主は物的には固より大地主に隸屬したるりしとはいへ、其の占有より驅逐される如きこと無く、或る人格的併びに經濟的の獨立を維持し、同時にかの閉鎖的家内經濟組織中に於て大經營が保障する豊富なる貨財供給にも與つてゐるのである。

(譯者註一) コロナート(Kolonat)とは、地主は土地、建物、經營資本を小作人に貸與し、小作人は之に對して毎年總利益の半額を地主にいたすべき制度を稱するものであつて、この小作人は父子相傳的に其の土地に隸屬する半自由民である。

(譯者註二) コローネ(Kolone)とは上述のコロナートの制度の下に於ける半自由小作人を云ふ。

其の起因何處にありや？

古代イタリアにては、小農は或る種の公的負擔、殊に軍への負擔に應じ得なかつた爲め、即ち兵亂と飢饉とが彼等を驅つて負債による奴僕關係と悲境とに陥れて仕舞つた爲めに、没落して行つたのである。然るにゲルマン・ローマの中世にあつては、同様の理由よりして、小農は自己の土地を携へて大地主の下に隸屬し、危急の際にはその保護と援助とを受けてゐたのである。

中世の莊園制度を遺憾なく了解せんとすれば、全村の經濟を一單位として考察するに優れるものがない。全村經濟の中心點を形作れるものは、實に領主の宮廷にして、小領主なれば自ら全村を支配し、大領主なれば管理人をして支配さ

せて居る。宮廷に直隸してゐる天領は永世彼に隸屬する家臣をして之が經營の任に當らしめ、斯かる家臣は宮廷内の建物に住みて、扶持を給せられ、農業及び工業の多方面な労働組織の下に主君の生産、家計併びに個人的勤務に使用されてゐるのである。かの天領の地は、多少の差はあれ或る數の土地附屬農民——其の各自は己が耕地を獨立に經營してゐるが——の土地と入り交つてゐるが、此等すべての農民は牧場、森林及び水利を宮廷と共に之を享用しつゝある。事情斯くの如くであるが、農家は何れもその宮廷に或る庸役と調租とを輸すべき義務がある。庸役は、その初めの間は必要に應じて行はれてゐたのであるが、後世に及びては一定の時を限つた勞役となつた。播種期及び收穫時の田畑に働く場合、牧場、葡萄酒、庭園、森林に勞役する場合、又、宮廷内の作事場に於て仕事をなす場合、不自由民の娘も亦、紡績、機織、裁縫、炊厨、釀酒に働く宮廷作事場附屬の女工場の手傳をなす場合、皆然りである。庸役の日には、家人はその家臣と同様、宮廷より賄を受けるのである。其の外彼等は宮廷周囲及び宮廷附屬の畑地に柵を繞らし、宮廷の警護に當り、使者の役に服し、荷物運搬の勞役に服する義務がある。次に宮廷に輸すべき調租には或は五穀、羊毛、亞麻、蜂蜜、蜜蠟、酒、牛、豕、鶏卵の如き農業生産物、或は境界林にて伐採せる木材の加工物（薪、築材、葡萄酒用材、松板、家根板、桶板、籠）、或は羅紗、麻布、靴下、靴、麵麩、麥酒、桶、皿、鉢、盃、鐵、釜、小刀の如き工業生産物がある。これは土地に隸屬せる農民の間には、かの家人の間に於けると同様、或る工業的専門化の存してゐることを語るものではあるまいか。而して此の工業的専門化は當該農地に代々相傳的に結び付けられて居り、其の當然の結果として單に其の領主の經濟を助けるのみに止まらず、更らに當該農地民の貨財供給に資する大なるものがあつたのである。この庸と調との間には、混合の給付がある。例へば農家より領主所有の田畑に肥料を供給すること、領主の家畜を冬飼すること、官延の賓客を接待する等のことである。斯かる土地獨立經營農民の負擔に對し、領主は或は彼等の所有す

る種牛を飼育し、渡船場、水車、燒餅竈、葡萄酒絞搾所等を設けて共同の使用に供し或は暴行、犯罪より彼等を保護し、或は凶作その他窮乏時に際して、自己の倉稟を開いて農民に施すべき義務がある救恤を行ひ、以て彼等の經濟を支援するのである。

〔11〕固より、實際には、その農民が種々異なる領主に隸屬してゐる村落の數が少くない。又各地に散在してゐる村落を集めて、之を統轄してゐる莊園も無數なりしは事實ではあるが、本書の本文に取り來れる場合は其の正則なるものと見得るであらう。但し此の際忘るべからざることは、吾々が此の方面に就きて有する材料の大部分は、各地に散在してゐる寺領に關するものであり、其の莊園が結晶の中心點となりある所のものなるが、古代諸侯中、殊に小領地に關しては殆んど其の材料の殘存するものがないといひ得る位であるといふ其の事である。されど單獨の宮延を中心として、其の周圍にコロネが居住して其處に村落を成立させてゐる限りは、余が此處に取れる例は規則的のものなりと見られ得よう。又説明の便宜の爲めに、此處には庸調を輸す義務ある者の法律上の地位、即ち宮廷家人と贖城家人との間に存する多數の區別を度外視してゐた。尤も後者の贖城家人とても亦共用地に對する領主の上級所有權により莊園の經濟組織中に引き入れられてゐたのであつた。尙ほ一言注意し置かんと欲するは、カール大帝の別墅制度 (Villenverfassung) と、後世の大領主の行政組織との間に存する差別を混同し居ることである。さりながら此の差別は實は單に各莊園經濟の表面にのみ觸れてゐるにすぎないのである。なほ此等に就きては、是非、マウレル著『莊園史』(Mauer, Geschichte der Fronhöfe)、イナマシュテルネック著『ドイツに於ける大領主制の完成』(Inama-Sternegg, Die Ausbildung der grossen Grundherrschaften in Deutschland) 及びランブレント著『中世の獨逸經濟生活』(Lamprecht, Deutsches Wirtschaftsleben in M.) 特にその第一卷、七一—九頁以下を参照。——古代コーカサス以東地方にありし其れと類似の状態に就きては、ゴギチャイシュウイリ著『メオルギアの工業』(Gogitschyschwili, Das Gewerbe in Georgien) 二頁以下に記す所がある。

〔11〕 共同的使用にのみ供せられ得る此の種の設備をなすは元來領主の義務にして、農民の權利なりしが、後世に及びては強制權及び追放權は殆んど皆、財政的見地より翹らるゝに至り、遂には農民の負擔にして君主の權利なるかの觀を呈するに至りしこと

を、世間一般は見逃がしてゐる様である。

今、此處に一小經濟組織がある。それは完全に自足して居り、かのローマの奴隸經濟に見る如き嚴格なる集中を避けて、不自由労働者の使用を狭義の領主の特殊經濟（二）に必要な程度に制限するが故に、こゝで賦役労働者の多數をして自己の家族の家庭需要の爲めの自家農業を営むを得せしめ、従つて或る人格的獨立を確保せしめ得る一小經濟組織である。これは彼の閉鎖的家内經濟内の小なる局部的特殊經營と類似の一場合なるが、それは狭き範圍とはいへ、南部スラヴのツァドルガ族間に一家族共産體を組成してゐる各夫婦に現はれてゐるが如きもの（三）即ち之である。農場協同體がマルク協同體と合致する所に於ては、土地所有權とマルク利用權とを非マルク住民に譲渡するを禁止する諸規定によつて、農場協同體は或る意味に於て外部に對しては經濟的に閉鎖されてゐる。然し内部結合は交換取引を確實ならしめんが爲めと云ふよりも寧ろ領主に輸すべき調租を計量せんが爲めに生じた其の領地固有の度量衡によつて作り出されてゐるのである。

〔一三〕ラングレートの著書第一巻、七八二頁によれば、農奴の農業賦役は邊陲直轄地（Beinthe）或は共用地内にある領主所有地（Bifang）を耕作するに使用されて、宮廷の不自由奴僕は宮廷直轄地（Zalland）の耕耘にのみ使用されてゐたといふ。

〔一四〕ラヴレン著『原始財産』（Lavelleye, Ureigentum）三七七頁参照。

此處に於て吾人は斷乎たる結論に到達す。曰く領主と領民との間の經濟的關係は、假令それが給付と反對給付てふ一般の見解の下に立ちゐるとは云へ、現代の交易經濟より生じたる經濟的範疇よりは全然遠ざかりゐるものなり、と。莊園經濟に於ては決して特殊的有價なるもの無く、存するはたゞ一般的有價のみ。従つて價格なく、勞賃なく、借地及び賃貸の利子なく、資本利潤なく、企業家なく、賃銀労働者なく、實に一種獨得の經濟的過程及び經濟現象があつたのであり、此等に對してはかの歴史派經濟學は何等手を下す事が出來ず、たゞ徒に、その當時には經濟的過程及び經濟現象は全く法律によつて左右され居たりき、との歎聲を繰返すの愚を學ぶにすぎぬのである。

此の莊園經濟より生ずる餘剰は一切擧げて領主の手に蒐めらる。然れどもそれは徹頭徹尾消費財にして、決して長く貯へられ得ず、もしくは資本化され得ない。それが帝室領のものなる場合には、通例次の如くにして帝室の用に供せられる。即ち帝王は臣下を従へて王城より王城へと巡狩して、行く先き々々に蒐められたる貨財を直接消費する。寺領若くは高級貴族の大領主の餘剰貨財は、これを家人の手に營まるゝ秩序ある運送によつて首都に搬ばれ、同様此處にて消費さるゝを通則とする。

斯くの如く然るが故に、此の莊園經濟に於ては度量衡、旅客・報告・貨物の運搬、旅舎制度、貨財及び業績の讓渡等の如き多種多様な交易現象あるも、此等一切には、交換經濟的取引の特徴たる各箇の給付には必ず反對給付を伴ひ、相互取引を行ふ特殊經濟は自由なる自己決定を行ふと云ふことを全く缺いてゐる。一言以て蔽へば、曰く、それは支配關係にして契約關係にてはあらず、と。

此の閉鎖的家内經濟がその不自由民若くは家人の勞働を編制して如何程發達を遂げ得るとするも、人間の欲望生活に適應して常に遺憾なきを期するは到底望み得べからざる所であらう。その發達の最高の域に達したるもの已に然り。然るを況んや、その發達の未だ完からざるものに於てをや。即ち一方に於て需要充足に缺陷を生じて、需要は遂に満たされずして止むものあるに、他方に於ては、生じたる餘剰を其の經濟中にては到底消費し盡すことを得ず。固定生産資料と精練勞動力とが生ずべきも、其等は其の經濟中に於て十分利用し盡され得ないのである。

此處に於てか、一種獨得なる新しき交易過程の生じ來らざるを得ない。即ち凶作に見舞はれたる農夫は、相隣者より穀物と藁を次回の收穫時まで借用し、次に收穫を得たる時、同量の穀類を返済す。火災に罹り又は家畜に斃死されし者あれば、他の人々は己れ等も亦、斯かる場合には同様の憐愍を受け得べしとの暗黙的前提の下に、其の罹災者を援助す。

又特に技術の優れたる奴隷の所有者は之を隣人の手傳に貸與し、其の代償として隣人の饗應に與かる。馬、鍋、梯子等を借用せし場合も亦、それに異ならず。葡萄酒絞搾所、麥芽乾燥場、麵麩竈の所有者は一期間これを貸しき村仲間の手傳に供し、その報償として其の貧者は、其の場合に應じて、その所有者の爲めに、或は熊手を作り、或は羊毛を刈る時の手傳ひをなし、或はその爲めに飛脚をする。之を要するに、それは相互扶助であつて、斯かる現象をかの交換の範疇の中に律し去らんと欲するが如き者はよく一人も存せざるべきを確く信ぜんと欲するものである。

〔一五〕ヘシオード (Hesiod) 已に歌つて曰く (C. Werke und Tage. の三四九以下——尙ほ三九六以下をも参照)。

『隣りの人の手づからに たつぷりとこそ量らしめ

借りし耕目と述はずに よく量りてぞ返すべし

またも製はん困厄の その目救ひの望まるゝ

ものとし知らば尙ほ更らば 心づかひをなまさてやは』

〔一六〕アラウトゥス作喜劇『アウラリア』(Plautus, Aulularia) 第一幕、第二場、一七に云ふ、『小刀や斧や刷毛や臼、いやいや其の他草々の道具も、お隣の方々がいつも借りにおぢやる』。

然しながら結局は其處に、獨得の交換行爲を生ずるに至る。其の過渡を形作るものは實に次の如き經過である。即ち奴隷所有主は、己が所有する不自由織工又は不自由大工を一時その隣人に貸與して、其の報酬として隣人の許に過剰する酒又は木材の一定量を得る。又一方不自由民中の靴匠又は縫工は其の下に居りては勞力全部を遺憾なく使用し盡し得ざるが如き小莊園の管理より去つて、毎年或る一定期間は邸にて働くといふ條件の下に、或る地方に定住させられる。そして別に賦役の日にも相當せず、又自家にありても特に爲すべき仕事として無き時には、己が弟子を引き具して近隣の農家に赴き其の技を習ぐ。かくて哺はれて其の上に弟子の分としては一定量の麵麩と豚脂とを得る。斯くの如くにして

以前は單に主家の奴僕たるに過ぎざりしもの、今や假令短期間とは云へ、兎に角順繰りに、廣き世間の人々の奴僕となるに至る。缺乏過剩の相殺の爲めの本來の物々交換、麥と酒、馬と穀物、麻布と鹽といふ如きそれは、早く生じたものではあるが、此の交換取引は多數天産物の産出に制限あり、廣く需要さるゝ貨財の生産が場所的に局限されてゐることによつて必要缺くべからざるものとなる。各箇の家内經濟小にして、隣接してゐる地方の自然的産出力に著しき差等の存する場合には、可なり重要な範圍を占むることとなるのである。而して斯かる取引に供せらるゝ一定の物資は、已に幾度か述べ來りしが如き方法にて一般的交換資料となる。毛皮、織物、蓆、家畜、裝飾物、最後に貴金屬即ち之である。此處に貨幣が発生する。市場が生じ、行商が現はれる。斯くて有償的信用取引の萌芽が頭を擡げ出すのである。

〔一七〕ギリシヤ、ローマに於ける其れと同様の關係に就きては『國家學辭書』(Handwörterbuch der Staatswissenschaften) 第二版、四卷、三六九、三七〇頁以下に掲げたる余の記述を参照。

〔一八〕古代のギリシヤ及び今日の黒人族の諸國にありて比較的盛んに發達してゐる各週毎の市場取引は此れに數ふべきものである。また大洋洲にては、各小島嶼の天産物が夫々異り、更らに其の住民の間に行はれるある家内仕事の發達に差異あるが爲め、やがては或る地方に活潑なる海上交通を喚起することとなつた。かの古代地中海沿岸種族の間に榮えた『海商』も亦、斯くの如くにして解釋し得るであらう。

然りと雖此等一切のことは閉鎖的家内經濟のたゞ表面にのみ觸るゝに過ぎないのである。此等の事象を正しく考量すべく、商業及び市場の古き歴史に關する從來の文献は極めて不十分なる憾がないではなかつたが、古代民族の間にありても、中世初期に於ても、日常需要の對象物には規則的なる交換が爲されてゐなかつたと云ふことが斷乎高調さるべきであらう。珍貴なる自然生産物及び時に現はれる極めて高價なる工業製作物も商品となること殆んど絶無であつた。然るに斯かるものが漸く一般的に消費せらるゝに至ること、古代に於ける琥珀、金屬具、陶器、草根、軟膏、中世に於け

る葡萄酒、鹽、干魚、織物の如くなれば、其等貨財の餘剰生産を目的とする經濟も亦、生ぜざるを得ず。其の結果更らに、他の經濟に於ても、其等との交換當價物を自家需要を超えて製造するに至ること、恰かも北方諸國民に於ける毛皮、Vadimai(粗木綿)、及び今日のアフリカ民族に於ける木皮布、木綿、コラの果、鹽塊の如くなるであらう。而已ならず都會的中心點に於ける人口が稠密となれる所において、之に加ふるに食料品に對する活潑なる市場取引を喚び起すに至ること、ギリシャ、ローマの古代併びに今日の多數黒人族地方に見る如きものがある。更らに進みては、職業的なる商工經營さへも或る範圍まで行はれ得るに至るのである。

さりながら經濟生活の内的構造は、其等によりて何等の影響をも蒙らない。各個別經濟の動因と方向とを規定するものは、依然その家族員の自家需要である。其の自家需要を満足せしむべく、各個別經濟は自家に於て製作し得る一切を作らなくてはならぬ。その個別經濟を調整する唯一の原因は使用價値である。斯くの如くにしてかのプリニウス¹⁾が「自家にて作り得るものを他より求むる如き農夫は、やくざ者なり」と云へりし原則は、爾來幾百年も適用されてゐるのである。

歴史時代の初期に於て已に、盛んに貨幣の使用されたるが如く見ゆる事實よりして、當時の經濟段階を正當に解釋することを過つてはならぬ。貨幣は單に交換手段たるのみならず、更らに價値の尺度、支拂の手段及び價値蓄積の手段である。然かも支拂なるものは交換以外にもなほ盛んに行はるゝものなること、罰金、調買、裁判費用、租税、損害賠償、名譽贈與物、賓客贈與物に於けるが如く、其等は元來自己經濟の生産物なる穀物、乾肉、織物、鹽、家畜、奴隸等によつて支拂はれ、それを受取りし者は、直ちに之を己が家計に加へてゐるのである。其の事に應じて各種の古貨幣と云はるゝものは、その貴金屬にて作られてゐるものにあつてさへ、尙且つ永き年代の間使用財の形を取つて通用し居り、個別

1) Plinius

經濟よりして直接欲望満足に宛てられもし、又他の使用財を交換によりて得る爲めにも使用され得るのである。斯かる各種の貨幣中、特にその價値不易なるものあらば、それは蓄財の手段として好箇のものたるを免れず。此れに適ふものは特に貴金屬である。蓋し貴金屬は裕かなる時には其の儘の裝飾具となり、缺乏の生じたる際にはそれを潰し得るが爲めである。斯くして遂には、實際の轉換は他種の貨財によつて爲され居る時にあつても、その價値を測定すべく金屬貨幣を使用するに至るといふ事は、その實例を古代エジプトに於ける Den 即ち捲狀銅線に見ることが出来るのであつて、古代エジプトに於ては、支拂そのものは極めて異なる各種の需要品によつて行はれつゝあつたのであるが、價格の決定は凡べて此の Den によつて爲されたのである。中世の多數記録中にも亦、夫れと類するものを見得るのであつて、其の中には——今此處に論じてゐる時代よりは遙かに後れた時代に至る迄——價格は一部、貨幣により、一部、馬、犬、酒、穀物等により決定されて居る。或は支拂に際し何物を以て支拂ふも、購求者の自由であるといふ場合には、「彼が拂ひ得る物²⁾」(in quo poterit)となつてゐる。

〔一九〕エルマン著『古代エジプト人と其の生活』(Erman, Ägypten u. Egypt. Leben im Altertum)一七九、六五七頁。尙ほ今日にても同様の状態にあるものがある。アヒネル著『カメルーン』九三頁。

十一世紀のフランスの經濟生活を見るに、物資の購入は唯だ飢饉の際に於てのみ行はれたといふが、物を賣却することにも、同様の事が行はれてゐる。交換なるものは、要するに、閉鎖的家内經濟とは氷炭器を同じうすべからざる要素であつて、それが侵入し來ることには、極めて長い間、又極めて執拗に出來る丈に抵抗されてゐたのである。賣買といへば當時は現金賣買を原則となし、儀式的なる煩雜極まる形式を伴つてゐた。最古ローマの市法は賣買は立會人たる五人の成年ローマ市民の面前に於て行はるべく、當時價格決定の基礎たりし生銅は熟練せる檢秤吏(Mortipens)の手にて秤

量され、買手は莊重なる言を爲してその買入品を受取るべきことを規定してゐる。彼の古代ドイツの取引法に表はれてゐる儀式張れる象徴方法を夫れと關聯せしめて考へて見よ。斯かる頑固な法律上の形式主義を生み出すに至れるこの經濟時代に於ては、賣買及び土地家屋の貸借なるものは決して日常生活の事務たり得なかつたことを容易に證し得るであらう。斯くの如く然り、交換價值なるものも亦、當時個別經濟の内の秩序中に突入し來つてそれを左右する能はざりしは寧ろ當然の數にして、個別經濟の眼中たゞ需要生産の存するのみであつた。而して此の需要生産にして其の需要に應じ得ざる場合生ぜんか、或は此處に贈與をなして其の返禮を得ん事を期待し、或は器具及び道具を借用するの風を生ずるものにして、此れにしてなほ及ばざらんか、遂には窃盜をも辭しなかつた。かるが故に賓客接待の完成、乞丐の正認、遊牧生活及び古代海商と盜奪との結合、田地荒らしと家畜盜奪の弘布は、實にかの閉鎖的家内經濟に於ける當然の隨伴現象なのである。

〔110〕 ランブレハト著『フランス經濟生活』(Gamprecht, Francis, Wirtschaftsleben) 一三二頁。尙ほ同人著『中世紀に於けるドイツ經濟生活』(Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelalter) 第二卷、三七四頁以下参照。

論じ來り論じ去つて乃ち知る。斯種の欲望満足にありては、その經濟の根本現象は近世國民經濟のそれと全然異なる相貌を取らざるべからざることを。欲望、労働、生産、生産資料、生産物、使用貯蓄、使用價值、消費、此等は事物が正規に經過する際の經濟過程を汲み盡す概念ではない。此處には國民經濟的分勞はない。従つて職業階級なく、企業なく、營利を唯一の目的とする貸財蓄積てふ意味の資本もあり得ないのである。今、資本なる語を最も廣く行はれつゝある用法に従ひて單に生産資料と解せんとせば、此の時代に於て資本と呼び得るものは、纔に道具及び器具(所謂固定資本)を出でぬのである。而して近時の學說に於て普通に流動資本と稱しつゝあるものは、この閉鎖的家内經濟にあつては、

たゞ尙ほ未だ消費され得べき状態に近付かんとしてゐる使用財ある許り。即ち未だ完成されざる生産物若しくは半ば完成した生産物これである。當時常態の經濟過程にありては、商品なく、價格なく、貸財流通なく、所得分配なし。従つて勞賃の存する理なく、企業家利潤の存するなし。特殊の所得種類としての利子も、之を見ることが出来なかつたのである。たゞ纔に地代のみ、漸く土地收益より分離し初めたりとはいへ、しかも尙ほ未だ純粹に現はれるものに接するを得ず。他の所得要素と糾雜しつゝあつたのである。

〔111〕 此處に示せる觀念に對しては、其の大部分はギリシャ、ラテンの兩語にて表はすべき適當の言葉がない。故にそれを言ひ表はす爲めには、或は書き直すか、極めて一般的な言葉を用ゆるかしくはならぬ。先づ最初に「所得」てふ概念然りであつて、ラテン語にて稱する *reventus* は、田畑より收得せるものを表はす語である。マテトウス(Mattheus)がその『年報』(Annales) 第四卷、六、三に國家歳入を *fructus publici* と言ひ表はせしは、其れと似た觀念をなしてゐると云ひ得るのである。而してこの事柄とかの財産てふ概念に對する多數の、そして精細に區別されてゐる言ひ表はし方を比較し見よ。mercus とは勞賃の外に、賃地料、營業料、資本利子、價格てふ意味を有し、ギリシャ語 (*Merces*) 亦然りである。「職業」「營業」「企業」「工業」てふ言葉に適當なる語は、ギリシャ語にも、ラテン語にも見ることが出来ぬ。

此の段階一般にありて、所得なるものを論ずるは多分當を失したものであらう。蓋し吾人が呼んで以て所得となすものは通例交換取引の結果を意味するものであるが、此の閉鎖的家内經濟にありては即ち然らず。其の經濟それ自身より生じたる使用貸財の總額、即ち主人公の手に歸する經濟總収益を稱するのである。然るに此の時代に於ては、經濟の天災に左右せらるゝこと甚しくして、貯蓄をなすの要益々多きが爲めに、此の經濟總収益をして、いよ／＼主人公の財産と區別し難からしめる。實に此の時代に於ては、所得と財産とは不可分離の一團を形作るのであつて、其の一部は絶えず享樂の用に宛てられ得べき域への上昇運動をなし、第二の部分は消費への下降運動をなし、第三の部分は箱や櫃、窖

や穀倉に一種の保險基金として藏さるゝのである。

貨幣も亦、第三の部分に屬するものである。貨幣が交換に用ゐらるゝ限り、それは受領者にとりて豫備的對價には非ずして、斷定的對價たるを通則とするもので、貨幣が貨幣としての主要なる役割を演ずるは、交換媒介の領野にあるに非ずして、價値の蓄積、測定、讓渡しの範圍に存するのである。一經濟が他の經濟へ貸付を爲すこと決して之れ無きにあらずねど、それは無利息なるを原則とし、消費的目的に供せらるゝ。生産信用は斯かる經濟方法とは相容れざるものである。利息を支拂ふ貨幣貸付あれば、それは不自然なるものと思惟せられ、其の結果、負債者の墮落を來すと云ふことは、ギリシャ、ローマの歴史の等しく語る所である。かるが故に寺制上の利息禁制は道德神學上の任意より生じたるものに非ずして、經濟上の必然より生まれ出でたるものなのである。

直接國稅の制度の完成せる所にては、それは財産稅たるを常とし、多くは地租的性質を帯びてゐる。アテンの *eisphora*、ローマの *tributum civium*、中世の *Schoss* 又は *Bode* 皆、然り。尙ほ其の外に各個人の財産より直接、國家又は公共團體に給付をなすべき義務があつた(船舶の造營、祭典、賽應の舉行 *Leinwand*)。而して今日の吾人に取りては最も自然的にして何等の疑を挟むべき要なしとまで思はるゝ所得課稅の觀念は、吾人の祖先には全然不可解のことであつたのである。

二 都市經濟

閉鎖的家内經濟は幾百年に渉る改造を閲して、直接交換の經濟に遷移される。即ち純粹の自己生産に代りて顧客生産が現はれる。吾人は此の發展の段階を稱して都市經濟と云つたが、其の根據は實にその經濟がゲルマン及びラテン諸國

の中世都市に於て、模範的に示されてゐると云ふ點に存するのである。さは云へ、此處に閉却するを許さざることがある。それは古代に於ても已に早く此の發展の萌芽を發見し得ると云ふ事、即ち之である。

〔一一〕 第十講參照。

此の經濟への過渡は之を家内經濟の段階に於て已に認めることを得るのである。即ち土地の耕作に基礎を有する個別經濟がその貨財需要の總體を最早や自家の手中にて生産し得ざるに至つて、絶えず且つ規則的に他の勞働より補充するを必要とし、爲めに其の獨立の一部を失ふに至れる事に於てである。さればとて直ちに其處に、土地より離れたる經濟發生し、夫れに従事する者が他の人の爲めに、例へば原料を工業的に精製し、或は勤勞を職業的に供給し、或は交換を仲介するを營利の唯一根源となす如きものを生じ來るものではない。寧ろどの農民も、依然として出來得るだけは食料を土地に獲んとしつゝあるのである。需要がそれを超過する場合には、彼はその腕に覚えし特別の技藝、或は畑、林又は水利の與ふるその居住地の生産上の長所を利用して、特殊産物の餘剩製出をなす。即ち或る者は穀物を、或る者は葡萄酒を、或る者は鹽を、或る者は魚を、或る者は麻布其他の家庭手工になる産物を作り出すのである。斯くの如くにして其處に一方的に發達せる特殊經濟を生ずるに至り、やがては斯くて作り出されし餘剩生産物の規則なる相互交換に頼らざるを得ない事となるのである。斯かる交換は其の初め組織立てる商業を必要としなかつたのである。然れども、それは以前の法律が規定しむたりしよりは遙に簡單なる取引形式にて事足るに至つたのであつて、かの家内經濟の域内にて已にその主要點は完成しむたりしと見得べき市場制度の完成を將來したのである。

市場とは、一定の時、一定の場所に、多數の買手と賣手との集合することであつて、それが祭禮もしくは國民集會と結び付いてゐるにせよ、又交通上至便の位置にあるに依るにせよ、常に生産者と消費者とが對立的な交換欲望を提げて、

相會する機會なのである。それが今日に至るまで有する主な意味も、實に此處に存するのである。市場と常設商業とは互に相排擠するものにして、商人てふ職業階級の存する所、其處には市場存在の要なく、市場の在る所、其處には商人の必要がないのである。唯だ一國がその欲求する生産物を自國內に産出せずして、それを外國よりの輸入に俟たざるべからざる場合のみは、家内經濟の段階に於ても已に、その爲めにかゝる商品の購入、運搬、賣捌をその手に纏める専門的職業階級を生ずるのであるが、それとて尙ほ賣捌に於ては、國內製作品と同じく、殆んど主として市場の取引機會を利用してゐるのである。ギリシャ・ラテンの古代、已に斯くの如し。中世初期また其の數に洩れなかつたのである。

斯かる状態にある都市に變化を齎したのは抑々何ものであらうか？ 抑々吾人の閉鎖的都市經濟と呼べる經濟組織は、如何なる點に其の成立の基礎を有しつゝあるのであるか？

中世都市は先づ第一に城である。即ち障壁、溝渠を繞らし固め、其の周圍の開放地の住氏が避難所たる場所である。故に各都市は、廣狹の別なく一定の範圍に住む地方居住民を一定の權利義務を有する一種の軍事協同體に結合する防守同盟たるをその先行條件となしつゝあるのである。此の同盟に加盟してゐる一切の地方は勞務及び駕馭を共同的に給付することによつて都市の防禦工事を維持し、戦時には武装してそが防禦に任ずるの義務があるが、之に對して危急の際には其の妻子併びに家畜及び動産を携へて城中に保護を受ける權利を有してゐる。此の權利を稱して *Burgrecht* と云ひ、これを享有するもの、それを *Burger* (*Burgensis*) と稱す。

其の始めにありては、都市に定住する住民とても亦、其の仕事の點よりすれば、田舎の住民と何等異なる所を見なかつたのである。即ち彼等は地方住民と同じく、農業を營み牧畜を業とし、共同に森林、水利、牧場を利用して居る。その住宅は今日もなほ多數舊都の建築風に見得る如き穀倉と厩舎と其の中に廣き中庭を取つた百姓屋敷である。然れども彼等

の公共團體生活は共用地利用の規整及び其他の農業上の利害關係のみを以て盡されてゐるのではなくて、更らに常備衛兵として城内に屯し替るゝ塔及び樓門に立つて日毎の見張をなすべき任務がある。従つて都市に永住せんとする者は土地財産(少くも家)を所有する以外、武器及び甲冑を備ふるの義務があるのである。

この守衛勤務及びかの *Burgrecht* より生ずる都市設備の擴張が、愈々多數の人員を要するに至れば、其の田畑地はやがて彼等を養ふに足らなくなつて仕舞ふ。此の不都合を救ふべく前節に叙べたる家内經濟の一方的發達てふことが其の手段となつたのである。即ち都市は工業の座となり、同時に市場の地となり、爾後農民は田舎より其の餘剰生産物を携へてこの市場に來りて之を賣捌き、其の代りに彼等が最早己が手にて製出し得ざるに至り、今は都市居住民の主として製出してゐる工業生産物を得ることゝなつたのである。

此處に於て *Burgrecht* は擴張せられ、その權利を享有する一切の人は都市に於ける市場自由及び關稅自由を有したのである。故に都市市場に於ける自由賣買權は、其の源を探めれば *ius obedi* からの所産と見るべきものである。斯くの如くにしてその始めは軍事的防守同盟たりしものより、其の都度の生産者消費者間に介立して農工業生産物の相互的直接交換を目的とする局地的經濟協同を生ずるに至つたのである。

市場を訪ふ者は凡べて——已に都市前期時代に於ても勿論——其の往復の途上、特に強力なる王の保護を享けたのであるが、この保護は更らに其の市場は云ふ迄もなく市場地全般にまで及んでゐた。斯かる市場平和の結果、市場人は都市に於ける滯留期間は其の以前に生じたる債務請求權に基く裁判上の追及を逃れ得ることゝなり、彼等の生命財産に危害を與ふる者あらば、彼は特別の平和擾亂罪を犯せるものとして、二重の刑罰を受けねばならなかつた。而して市場人は普通に商人 (*mercatores, negotiatores, emptores*) と呼ばれてゐた。

〔二三〕ドイツ市制の成立に關する近時の文獻は Kaufmann (商人) といふ言葉の極めて重要な意義を觀過して、中世末までのドイツ帝國の地にあつた無數の都市、キヨルン、アウグスブルクより、下つてはメーデパッハ、ラードルフツェルに至るまで、近世的意味に於ける商人、即ち職業的に發達せる商人階級を有し、彼等は普通卸賣商人と考ふべきものであつたと考へてゐる。然れどもあらゆる經濟的事實は此の解釋に裏切つてゐる。抑々彼等は如何なる物を取扱ひ居り、又如何なる物を以てその商品に對する支拂の用に供してゐたのであるか、先づ第一に其の言葉の用法を見よ。職業的商人がその民衆に對する關係を最も著しく表はしてゐる特徴は kaufen (買ふ) といふ習慣には非ずして、verkaufen (賣る) といふことにある。然るにかの中世の Kaufmann (商人) なる語は kaufen (購買) であつて、mercatore (商人) 或は negotiatus (卸商人) に關する他の記録年及び一〇〇〇年のオットー三世 (Otto III) の記録には mercator (商人) 或は negotiatus (卸商人) に關する他の記録と同様の組合はせず、"empiores Trutmannie" の事を敘べてゐるが、其の法律は (キヨルン、マインツ市の夫れと同じく) 他の諸都市の模範とさるべきである。又一〇七五年にライヒェナウの僧正が一筆にてアルレンスバッハの農民及び其の後繼者を商人に變へることが出来た (ut ipse et eorum pastori vni mercatoris) といふ事實は其の當時職業的商人があつたといふ事を假定しては、到底解釋し得ざる事柄であると思ふ。事既に斯くの如くなるに拘らず Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte 誌、第二卷 (一九〇四年) 一九一頁以下のサーフェキング (Säveking) の所説は舊式の誤謬と進行してゐるのである。即ち彼は多數の材料中にて "Kaufmann" なる語は、商品を携へて市場に會する人一切を意味するものであつて、その市民たるを將た農民たるを、職人たるを將た商人たるを論ぜざるものなりとのことを全く附却し、更に購買者として市場に集まり來る者をも、中世に於ては "Kaufmann" と呼びつゝありし事實をも觀過してゐるのである。

然るに都市の住民は、主に市場にて賣買を爲さねばならぬやうになつてゐた爲めに、彼等の榮養状態に對する市場の重要さが増して來たのに従つて、彼等都市住民にはいよゝ市場人又は商人と云ふ名がくつ付いて來るやうになつたのである。然るにそれと同じ割合で、此の市場の搬入區域と販賣區域とは益々擴まり行きて、遠く地方にまで及び、遂に其

の範圍は彼の Burprecht による同盟範圍を超過するに至り、更らに全國土の外部よりの侵害に對する安寧の度が増加し來れば、かの Burprecht に基く同盟はいやが上に其の意義を失墜し行かざるを得なかつた。而して他方に於ては、工業の増加に連れて、僅かそのためにのみ局限されてゐた以前の場所のみならず、都市全體が市場となつた。而してかの「市場平和」なるものは「都市平和」に變じ行き、之を維持して行く爲めに、都市は特殊なる裁判所管區として地方的團體より分離せらるゝに至つたのである。此處に『都市の空氣は物を自由にす』(Städtische Luft nicht frei) であつて、則ち生まれ出づることとなり、市民と農民との間に社會法上の踰ゆべからざる溝渠を構ふるに至つた。この市民農民間の溝渠は十三四世紀に至り、かの「市外及び城外居住制」^(譯者註)によりて之を乗り越えんと試みたるも、遂に失敗に歸したものである。斯くて市民てふ名は遂には都市公共團體に定住する成員にのみ與へらるゝに至り、時は此の名に附するに法律的併びに道義的内容を以てし、茲に古きギリシヤ人の國家觀念が復活せる觀を呈するに至つたのである。

(譯者註) Aus- und Pfahlbürgertum とは、都市が其の勢力を増さんが爲めに、市外地に住む者にも、兵役服務の義務を承認することによつて、市民権を賦與するの制である。

協同組合的な階級に組織された自治行政に立つ市制の發達、中世末期に於けるドイツ、フランス、イタリアの諸都市が得た政治的優越地位に就きて、茲に詳論せんは本來吾人の意圖に非ず。吾人が取扱はんと欲する問題はたゞ都市を中心とする成熟せる經濟組織即ち之れである。

古きドイツ帝國の地圖の一葉を手にして、中世末まで都市權の附與されたりし場所(約三千はあるであらうが)を其の上に記して行かば、南部及び西部地方にては平均四乃至五時程、北部及び東部にては六乃至八時程の間隔を保つてそれが全國に散布してゐるのを見るであらう。其の凡てが必ずしも一様の意義を有してゐると爲し得ないとしても、尙ほ

1) Aus- und Pfahlbürgertum

當時にありては何れもよく、地方的經濟範圍の中心點であり(少くともたらんと努めて)、前期の莊園と同じく閉鎖的生
 活を營んでゐたのである。今此の地方的經濟範圍なるもの、廣さを想像せんとすれば、全領地が既存の都市權に同等に
 分配されてゐるものと假定し見るがよい。然る時はドイツの西南部に於ては平均二方哩より二方哩半毎に一箇の都市あ
 り、中部及び西北部にありては三方哩より四方哩毎に、東部地方に於ては五方哩より八方哩毎に各一都市の存する割合とな
 る。尙ほ何れの都市も斯る經濟範圍の中心點に横はるものと假定せば、ドイツ全國殆んど到る處、最も遠隔なる地方に住
 む農民と雖、なほよく一日にしてその都市の市場に到着し、晩には己が家に歸るを得たといふ事を確め得るのである。

〔二四〕 中世以降多數の土地が、その或るものは都市權を失ひ、あるものは新たに之を獲たものがなきにあらざり、今日尙ほ都市
 の名を帯びる場所の數を通して先づ正確なる觀念を得ることが出来ると信ずる。次の地方に於ては現在の如き割合にて平均一
 つ宛の都市を有してゐる。バーデンにては百三十二平方キロ毎に、ウエルツテムベルクにては百三十四平方キロ毎に、アルザス・
 ローレンスにては百三十七平方キロ毎に、ヘッセンにては百八十八平方キロ毎に、ザクセン王國にては百五十五平方キロ毎に、ヘッセ
 ン・ナッサウにては百四十五平方キロ毎に、ライン地方にては百九十三平方キロ毎に、ウエストフアールンにては百九十六平方キ
 ロ毎に、ザクセンの地方にては百七十五平方キロ毎に、ブランデンブルクにては二百九十一平方キロ毎に、バイエルン王國にて
 は三百二十八平方キロ毎に、ハノーヴァーにては三百四十一平方キロ毎に、シュレスウィッヒ・ホルシュタインにては三百五十
 平方キロ毎に、ボムメルンにては四百十二平方キロ毎に、西プロイセンにては四百七十三平方キロ毎に、東プロイセンにては五
 百五十二平方キロ毎に……中世の多くの諸侯の間に流行せる都市建設熱が實際は存立不可能なるべき都市をも生み出すこととな
 った。かのザクセン法鑑(Sachsenspiegel)は明らかに、これを禁じて「一哩以内の距離に於て市場を設くるを禁ず」と云つてゐる。

古き時代には都市領主の手により、後世に至りては市參事會員によつて規定されてゐた都市の市場法の全體は次の二
 箇の原則に準據してゐる。即ち一は、事情の許す限り公然と然も生産者の手より直接購買せざるべからずてふことにし

て、二は、都市自身にて生産し得る物は必ず此處にて生産せざるべからずてふことである。市領内工業生産物の商賣は
 その何人たるを問はず、否なその手工業者にさへ固く禁ぜられて居た。其等を他の都市領内に搬出することは、已に一
 度自領の都市市場に送られて賣れ残りたる品物に就いてのみ許されたのである。要するにその目的とする所、常に領内
 消費者に對する豊富にして廉價なる供給と、都市工業の領外顧客に對する十分なる満足とにあつた。

都市市場の搬入區域と販賣區域とは其の範圍を一にしてゐた。田舎の住民は食糧品及び原料品を携へ來つて、都市手
 工業者の勞働に代り。その爲めには或は直接に賃仕事の形式を取ることあり、或は豫め箇數にて注文するか又は公の市
 場にて代價仕事人の許に赴くかして得られる完成品の形式にて間接に得ることもある。斯くの如く市民と農民とは相互
 的顧客關係に立ちつゝありしものにして、一方の産出せるものは必ず他方の使用に宛てられて居り、此の相互取引の大
 部分は貨幣の仲介なくして行はれるものであつて、假令貨幣の用ゐらるゝありとするも、それは唯だ價値の差を相殺せん
 が爲めに使用されしに過ぎないのである。

都市の手工工業はその市場に於て獨占的販賣權を有してゐた。他の都市の手工工業生産物は其の都市に之を製出する者の
 なき場合にのみ、その販賣を許可されたのであつて、然も夫れとても尙、歳市に際し他都市の製作者の手より販賣せら
 るゝを通則としてゐた。此の一點に於て異なる都市の市場範圍が相互に相吻合してゐるのではあるが、しかも本質的な
 る事柄は、生産者より直接その消費者に販賣すると云ふ事が此處にも亦保たれて居り、他都市生産物販賣の許可は寧ろ
 例外的場合なりてふこと即ち之れである。もし或る都市に於て、其れに従事する人をして優に立ち行かしめ得る如き工
 業にして、然もそれを營む人なき場合には、市參事會員は他の都市より堪能なる親方を招きて、租税免除或はその他の
 利益を提供して其の移住を慫慂する。もし其の爲め比較的多額の設備資本を必要とする場合には、都市公共團體自らそ

れを補助し、或は工場及び賣店を設け、或は水車、砥物場、張布架、晒場、染色場、晒布機械等を都市の費用に於て備へてやつたのである。……此等の目的とする所、要するに、自己領内の生産によつて、出來得るだけ多方面なる需要満足を保つんとするに他ならなかつたのである。

手工業者がその製作品の使用者と直接取引をなす事はそれ自身已に手工業者の中に對人的責任の感情を起さしむるに至るものであるが、當時にありては更らに特殊の規定によりて斯かる道德的要素を強めんと試みたのである。即ち手工業なるものは社會一般の福祉を目的として行使さるべき一官職にして、其の親方は「公正なる」労働を供せざるべからず。手工業者にしてなほその個人的労働力をその顧客に給してゐる限り、その出職にあつては給料及び食料に對し或る一定の定率¹⁾が定められてゐた。註文者が原料を手工業者に給するもの²⁾にありては（例へば錫匠の許に錫を、貴金屬鍛冶匠の許に金銀を、織工の許に撚絲を）、原料の騙取を防遏し、之れに反し手工業者がその原料を供するもの³⁾にありては、市場に於て、教會の周圍にて、都門の傍に於て、其處彼處の街頭にて公然の賣店を設くべきこととなつてゐる。そして此等の賣店にしてその工場を兼ね居たるものも亦珍らしくなかつたのであつて、麴麴店、屠肉賣捌所、衣裳店、反物店、皮屋、靴店等の如きその例であつた。尙ほ市場法によれば、同種生産物の販賣者は軒を併べて公然相競争し、市場監査役及び検査官吏の監督の下に營業すべきものとなつてゐた。此の規則は又單に顧客の註文に應じて自宅にて労働してゐる手工業者にまでも及び、彼等は多く同じ街區に軒を列ねて住んで居る。今日に至るまで、多數の都市はその町の名に斯かる昔の状態の思ひ出を語つてゐるものがある（靴屋小路、皮鞆通り、機織横町、桶屋町、肉屋小路、魚町）。そして此等の町の多數は古い市場に通じてゐる。斯くの如くにして都市の大部分、否な都市全體が一大市場の如き觀を呈するに至つたのである。尙ほ其の外使用すべき原料、労働手續、布の巾と長さ、直接的價格統制に關する多種多様の規定あり

て、消費者の利益を保護したりしは言はでも明らかなことである。

都市及び市郭地に於て都市生産者がその手工業製品に對する獨占的販賣權を有すると同時に、都市消費者はこの域内に於ては他の都市よりの搬入物の上に獨占的購買權を有してゐる。此の權利は搬入物が實際にも亦市場に到着し、其處にて適當なる時に販賣せらるゝ際にのみその効力を有するものであつて、此の事が行はれんが爲めに開市權⁴⁾が採用されてゐる。この權利たる他都市搬入品を、村若くは都門外にて先買するを禁止し、それを轉賣者、手工業者及び他國人へ販賣することは、消費者がその需要の満足を得たる後、初めてこれを許可すれども、それと尙ほ消費者が必要を生ずる時は消費者は之を手にし得べく、一旦市場に搬入せる貨財は再び直ちに搬出することが禁じられて居り、三日間之を市に陳べて、然も尙ほ遂に販路を見出し得ざりし場合に於てのみ、初めて搬出することが許されるといふ制限が附されてゐるのである。

他都市の販賣者に對しては、常に深き疑惑の眼が向けられてゐたが爲めに、官府に屬する下受購買者、量定人及び秤定人の手に俟つ一種獨得の交換仲介を生ずるに至つた。今日に於ては國家が度量衡器検査と警察検査により度量衡の監督をなし、相互の同意は交換希望者それ自身の自由に任せて居るけれども、中世にあつては即ち然らず。完全なる度量衡を設けてこれを確保し行くべき技術上の手段に缺けて居た。普通の石塊（加之、フランクフルトの歳市にては、十五世紀に至りてもなほ木の切株⁵⁾が分銅として使用されてゐたではあるまいか。然かも交換貨財の分量を正確に定めん爲め、度量衡器はこれを交換當事者の手に委ねずして、其の賣買に立會ふ特殊官吏の手に握られて居り、他都市の販賣者の販賣を爲す際には、必ず立會ひを受けねばならぬこととなつてゐた。かの官府に屬する下受購買者の役は買手と賣手とを相合せしめ、價格決定の仲介をなし、貨財に缺點なきやを検し、買手の爲めに彼が購入せる丈けのものを搜し出し、

1) Stapelrecht

依つて以て供給の正當を期せんとするにあるのである。此の下受購買者は自己の商賣を營むを禁ぜられ、己が家に寄宿することとなり居れる他都市より來る販賣者より、賣れ残りの品物を彼が出發に際して貰ひ受くることさへ、斷然禁止されてゐたのである。

斯くの如き直接交換の組織は、それがよし各地方によりて種々特異の點を有するものありとするも、それは極めて微細なる點にまで完成されて居り、凡ての中世都市にこれを見ることが出來た。斯くて吾人は斯かる組織の根本思想が依つて以て由來せる實際状態は、強制的性質を有するものなりしを此處に推論せざるを得ない。然り而して斯かる組織が如何なる範圍にまでその効力を有するたりしかば、當時の商業がどれ程廣き勢力範圍を有し居たりしかの問題を解き得る時にのみ、之を通觀することが出來るのである。

かの中世の諸都市に定住的小賣商業の存しるたりしことに就きては、殆んど疑を挾むの餘地がない。この小賣商業を營むものは、所謂「貧乏人の爲めに小間々々した安物を賣る」一切の人を云ふのである。試みに思へ、富者は週市又は歲市に於て自家の需用品を直接他都市より來れる市場人の手より買ひ調へるを常としてゐたのに、貧者にありては到底長時日に豫備する能はず。所謂「手より口へ」の其日暮しをなす今日と異なるなき境遇にありしものなるが故に、茲に小賣商人現はれて、彼等貧者の爲めに貯蔵の任に當り、以て屢次の小賣に當てつゝあつたことを。

此の小賣商人を分つて三集團となすを得、即ち小賣業者、¹⁾行商人²⁾及び織地切賣商³⁾である。而して其の中最後の者は都市時代初期に於て最も尊重されて居たのであつた。蓋し多くの都市は都市所在の自營織紗製織所を有せざりしによるのである。然るに後世此の製織所の設置せらるゝや、彼等織地切賣商の仕事は精巧なるオランダ布、絹物、木綿物を販賣することにのみ限られることとなり、或は其の店舗を織布者に提供するに至つたのである。

1) Krämer 2) Hocken 3) Gewandschneider od. Gadenleute

卸賣商業は専ら行商及び市場商業又は定期市商業であつて、中世の終に至る迄、多數都市は卸賣商業を常に且つ専門に營み居る。定住の商人を其の城壁内に有してゐなかつた。卸賣商業の取扱ふ品物はその都市に近き搬入區域にては產出せられざる種類の貨財にのみ限られ、これに屬せしもの、僅に次の五種を數へ得るに過ぎなかつた。即ち(一)香料及び南洋產果實、(二)當時一般の國民食料品であつた干魚及び鹽漬魚類、(三)毛皮、(四)精巧なる布、(五)北ドイツの都市にては葡萄酒。ドイツの或る地方に於ては、鹽も亦、この中に數へられて居た所なきにはあらねど、多くの場合には參事會員は大體これを直接その産地より取り寄せて都市所屬の鹽倉に貯へ置き、專賣の印章を捺し小賣手數料を徴してこれを行商人及び食鹽擔舂者に賣渡してゐた。他の都市より來れる卸賣商人は、普通に商品を、たゞ一捆纏めて賣るを要し、或は一定量以下にては(例へば香料に就いて云へば、十二磅半以下にては)賣ることを許されざる規定があり、小分け賣は其の都市定住の小賣業者及び行商人の専門となつてゐた。此れと同様の事は多數の大生産業者にも適用されて居た。例へば鍛鐵工は其の製出せる鐵を鍛工及び素人に供給するを得ずして、鑄鐵商¹⁾にのみ賣捌くことが許されてゐた如き即ちそれである。

〔115〕ゲオルグ・フオン・ベロー(Georg von Below)も亦、今日では、„Jahrbuch für N.O. u. Stat.“ 第110卷(1900年)一頁以下に、中世に於ては卸賣商人の階級といふもの無く、此の時代の特徴は卸賣の商業が同一に結合されてゐたことに存すと説いてゐる。従つて彼は、同時に小賣商人ならざるが如き卸賣商人なるものは到底存するを得ないと云ふ事實を知らずして、以て卸賣商人なる語を使用せんとするは不可これより甚しきはなしと難じてゐる。尙ほコイトゲン著「ハンザ同盟史實に現はれたる中世卸賣商業」(E. Keutgen, Der Grosshandel im N.A. in d. Hansischen Geschichtsb.) 1901年版、六七頁以下を參照し、更にそれに對する „Histor. Zechr. N. F.“ 第五卷、四五頁以下のかのベローの駁論を參考すべし。

中世都市市場の搬入及び供給區域は地誌學的に精確に區劃され得ないことは、その搬入及び供給の區域は市場貨財の

1) Eisenmenger

異なるに従つて自然に其の延長を異にしてゐたが爲めではあるが、それにも拘らず此の區域は經濟的意味より云へば、一箇の閉鎖的區域を形作つてゐたのである。即ち各都市は、その周圍の「地方」と共に、自主的なる一經濟單位を形成し、此の範圍内に於て、經濟生活の全過程がその地特有の規範に準じて、獨立的に完遂されてゐた。而して此の規範は各都市の經濟範圍に夫々特有なる貨幣及び度量衡によつて與へられてゐるのである。その都市と田舎との關係は、事實上頭と四肢との如き強制關係であるが、更に一步を進めて、之を法的強制關係に作り上げんものとの強力な傾向があつた。かの市郊地^(譯者註)、已に行はれてゐた輸出入禁止、差別關稅、大都市の自領土獲得は明らかにこれを指示しつゝあるものである。

(譯者註) 此の時代に於ては、同業組合の營業獨占權によりて都市及び近傍の田舎の一定區間にては其の地の住民は或る一定種類の貨財を同業組合員以外の他の營業者より求むることを得ざることとなりたるものにして、此の區間を稱して「市郊地」といふ。

かの莊園制度より此の都市制度を演繹し來んとする議論に對しては、駁論の餘地尠からざるべけんも、都市の經濟制度はかの莊園制度の繼續的發展なりと解してのみ初めて其の真相を解釋し、過なき説明に到達し得るものである。莊園制度に於ては、單に萌芽の状態にありて素質たるにすぎざりしもの、今や茲に至りて成長し、以て完成せる機關及び組織を取るに至り、閉鎖的家内經濟に於ては、原始的なる畸形として雜然混沌たりしもの、今や此處に至りて分裂と獨立との道程を辿つて分化したのである。かの莊園に見たりし拘束的分業は、今や農民と市民との間の自由なる生産分割と進歩し、市民の間には更らに熾然たる多様の職業に展開して行つたのである。莊園の家内工業労働者は茲に賃銀手工業者となり、時代の漸く進むに従つて、自己所有の工具の外に自己獨立の經營資料をも得ることとなつた。此處に至つ

て莊園經濟と小地主經濟との間を繼ぐ齟齬の緒は斷たれて仕舞つたのである。各特殊經濟は夫々獨自の生存を營むこととなつた。彼等の間の交易を規定すべく、給付及び反對給付と云ふ舊き一般的有價の原則は倒れて、新らしき特殊の有價の原則が生じたのである。都市に於ても尙ほ土地より全然解放されたりとは言ひ得ざること勿論にして、生産は依然として家計の鐵鎖に縛されつゝありしと雖も、然かも其の間に農民、手工業者、商人といふ職業を生じ、それに従事する人々の經濟と生活とを一種特異の方向に導くこととなつた。社會は分化して、此處に以前見ざりし身分階級¹⁾なるものを生ずるに至つたのである。

經濟現象の全範圍はかの閉鎖的家内經濟に較べて、遙かに豊富となり、複雑となつた。各特殊經濟は、人數よりいへば小さくなり、夫等は相互倚り相扶けて、各自他の爲めに一定の職能を引受けることとなつた。斯くの如くにして交換價値は已にその内部生活にまで突入して、決定的勢力を揮ふに至つたのである。さりながら生産協同は尙ほ依然として消費協同と合致してゐる、手工業者の許に於ける外來の手傳人のみならず、かの商人の許にある他都市出身の手代までも、其の家族の一員となり、その家の懲戒權の下に立つてゐた。即ち其の親方なり商人なりは彼等の主人にして、彼等はその「奴僕」なのである。

貨財の大部分は、舊套依然、それが生じたる經濟の域より離れなかつた。たゞ極めて僅少の部分のみが交換てふ道程を経て、他の經濟の域内に移り行けど、それとて其の經過する道程は極めて短く、即ち生産者より直ちに消費者へと云ふのであつた。貨財流通は到底之に接するを得なかつた。唯だ其の例外となり居しは、二三の外國貿易品及び廉價なる雜貨であつて、商品として取扱はれ居たりしは夫等を出でず。家庭の消費に與つて其の職能を全うするまでに、幾度か貨幣の形を経ねばならなかつたものは、僅に夫等のみ限られてゐた。然かも此の事實は、唯だ當時の直接交換の制度

に於ける一例外たるに過ぎなかつたのであり、到底、全經濟制度の構成要素たるを得なかつたのである。

國民經濟的分業及び職業組織は已に行はれては居たが、當時尙ほ未だ、常設的企業なるもの存せず、企業資本なるものを見ることを得なかつた。強いて云はゞ、僅かに商業資本のありしのみ。手工業は労働の *Unternehmen* (請負) にして *Unternehmen* (企業) には非ず。出職¹⁾といひ又居職²⁾と稱する如き形式に於ては、殆ど無資本といふべきものであつた。實に當時の手工業なるものは、賃銀を得て他人の原料に自分の労働を注ぎ込むとも評すべきものにして、假令手工業者にして已に自己所有の經營手段を使用して労働しるる場合にありても、その生産物の價格増高は、其の生産物がその製造を續け行く間に、その所有者に利益を齎らし來る新らしき資本部分を絶えず嚙下し行くといふ方法に於て行はれしには非ずして、労働がその生産物中に投資され、その報償は直接その生産物の賣價中より得るといふ方法によつたのである。

貸附資本及び收益資本の量も亦極めて僅少であつた。抑々中世の取引に信用取引なるもの存したりしやは疑問と云はねばならぬ。交換經濟の初期は現金取引に懸り、眼前に直ちにその代償の取得せられ得ざる如き場合は存しなかつたのである。その爲め殆ど一切の信用制度は、何れも皆賣買の形式を取つてゐた。永代小作³⁾、地代を徴收して市街宅地の貸與をなすといふ場合に於て已に然りであつて、この場合には其の土地は利子取立權に對する代償なりと考へられてゐたのである。更らに古き諸規定に於ても亦然りであつて、それには資金供給者の利用の爲めに提供された土地は、假對價として『債權者』の擔保に移されて、その債務者にして萬一其の負債を辨濟せざるに於ては、その土地は債權者の有に歸することゝなつて居たのである。斯くの如き取引行爲は買戻條件附賣却⁴⁾と經濟的には何等差等を認め得ざるのみならず、その兩者間全く法律上の區別すら尙且つ發見し得ざるものである。最も弘く行はれつゝありし都市信用取引なる土

1) Stör 2) Heimwerk 3) bäuerliche Erbleihe 4) Verkauf auf Wiederkauf

地定期金賣買¹⁾も亦、同様の性格を具へて居たのであつて、其の名よりして已に、之が一個の賣買取引なりしことが證されてゐる。代價財とは交付されたる資本を稱し、交換財とは資本受領者が己が所有に屬する家屋を、該家屋の其の都度の所有權者が年金を納むべきであるといふ効力の下に其の家屋の占有を許す場合の其の年金の取得に對する權利である。該定期金は土地負擔の性質を帯ぶるものにして、最初には濟濟不可能のものであり、其の義務者はその年金の附加してゐる家屋又は土地をそれが擔保として置かねばならぬものであつて、土地家屋を除ける其他の財産を以て之に宛てることは許されてゐないのである。定期金權利者は支拂はるゝ賣價を斷定的に定め得たのであり、年金徴收の權利を附與する定期金證券は無記名證券と同様、何等形式的手段を経ずして隨意に他に轉々せしめ得るものである。故にそれには人的關係は全然認むることを得ず、信用の特徴をなす信任てふ要素に缺けてゐる。而して此れと同様の性質を帯びてゐるものは買戻權附地代²⁾であつて、それは買戻留保付きの土地定期金賣買である。

〔二六〕此の節全體に就きて、ホイスラー著『ドイツ私法制度』(Hensler, Institutionen des deutschen Privatrechts) 第二卷、一八頁以下。及びグスケ著『中世に於けるドイツ都市の貸借制』(Kruske, Das Schuldenwesen der deutschen Städte im Mittelalter) (Zeitschr. f. d. ges. Statist.) 第 4 卷、補遺號第十二號の明快なる記事参照。

不動産取引に於けると同じく、動産取引にありても亦、信用取引なるものはたゞ『低度なる現金取引』たるに過ぎなかつた。ホイスラー⁴⁾が言へるが如く、當時の質權保全は債務者の側で尙ほ取戻し得る假りの賠償給付(流質)にして、場合によつては債權者が之を隨意に處分して現金に代へ、以て實際に負債の償却に宛て得るが如き補償(賣却質)ではないのである。ユダヤ人の質屋營業⁵⁾とても、事實上は、近世の買戻營業と其の意味同一にして、今日手工業者もしくは小賣商人が與へつゝある『商品信用』も、中世にありては抵當賣買の形式を取つてゐた。今、當時の對人信用に於ても亦、債

1) Renten- oder Gültkauf 2) Rentenbrief 3) Wiederkaufsgülte 4) Hensler

務者は殆ど常に債権者の質権に契約通り服従せざるべからざりし事情を考へ、多くの場合に、種々煩雜なる擔保、人身
抵當の義務及びそれに類せる煩瑣なる諸條件の下に僅に金を借り得たりしことを思ひ、更らに剩へ債務履行の延滞せし
際は、債権者は債務者の不利益となることをも顧みず、その金をユダヤ人の手より立て替へ返還させ、以て債権をユダヤ
人の手に轉ぜしめつゝありし状態を見、他都市出身の債務者の同市民もしくはその家來に當る者が請求に依つて差押へ
られ得たといふ事情等を綜合し來れば、中世の都市經濟にあつては、近代的意味の信用制度なるものが問題とはなり得
ざりしことを容易に證し得るではあるまいか。

〔二七〕 拙著『フランクフルトの人口』(Bevölkerung von Frankfurt) 第一卷、五七三頁以下。

〔二八〕 Jhb. Nö. u. Stat. 第二七卷、一〇四頁のシュティータ(Siedla)の所論参照。

〔二九〕 中世のそれと極めて酷似してゐるのはギリシャの信用制度とその法律上の形式であつて、これに於ても亦、賣買と貸借と
は夾雜し居り、「賣買する」に相當に入れる「貸借する」約定するにふ概念を夫々區別する言葉がなかつた。ギリシャの質権は
一切の重要な點に於て古代ドイツのそれと一致して居た。ヘルマン著『ギリシャ私人古代遺物併びに法律古代遺物教科書』

(K. F. Hermann, Lehrbuch der griech. Privatrechtler mit Einschluß der Rechtsaltertümer) 第六七、六八節参照。
古代ローマの fiducia (信託) と、その發達した pignus (質権) も亦此處に參考として引用する事が出来るであらう。

近世國民經濟の範疇に訓練された人の頭には特に怪訝に堪え得ぬ事象が此の範圍に二つある。それは即ち無體物(「關
係」)が經濟的貨財となつて、取引の目的に使用せられることの頻度と、取引法上それを不動産と見做し居たることこ
れである。これに依つて吾人は知る、初期の交易經濟が何でもかでも不恰好な手付きで、殆ど一切のものを擧げて交易
貨財として浚ひ込み、斯くて私法の範圍を無際限に擴張して、以て當時の生産組織が當時の交易經濟に拒んでゐた餘地
を之れに擴張せしめんとしつゝありしことを。實に中世に於ては、苟且にも物たらばその何物たるを論ぜず、貸與され

ず贈與されず賣却されず質入され得ざりしもの、一も存しなかつたのである。田園及び都市に對する領主の權力、伯爵
權、奉行權、ツェント裁判權、^(譯者註一)ガウ裁判權、^(譯者註二)教會に於ける位階、僧職授與權、^(譯者註三)追放權、^(譯者註四)渡船道路特權、鑛貨及び關稅、
狩獵漁業權、伐木權、十分一稅徵收權、賦役、地代、定期金、各種の土地負擔一般、皆これに洩れなかつた。凡べて此
等の權利及び土地との『關係』は、これを經濟的に觀れば、その行使せらるゝ場所より遠ざかるを得ず、又任意に増
殖され得べからざる特性を有してゐるものである。

〔譯者註一〕 ツェント (Cent) とは兵役及び裁判事務に従ひ得る人百名より成る團體にして、其の長を Centgraf と稱し、其れ
が召集して開ける裁判をツェント裁判 (Centgericht) と呼び伯爵領に於ける小事件を裁斷す。

〔譯者註二〕 ガウ (Gau) とはその初めは多數のツェントの集合せるものなりしが、後には伯爵領と稱するに至つた。

所得と財産とは、此の發展段階に於ても、尙ほ未だ明かなる分界を有して居なかつた。一四五一年バーゼル市に『新磅
稅』なるもの採用されしが、其の計量の標準を規定して、(一)商品の買價、(二)地代購買及び土地定期金賣買に投じた
る資本、(三)徵收したる差益に據るべきものなりとしたのである。^(註五)而して其の磅毎に四片宛を納むべく、それが抑々
買價としてせよ、乃至は資本としてせよ、又利子としてせよ、要するに人の手より手へと移さるるを以て足れり
とし、其の性質の差等に關しては何等顧慮さるゝ所なく、吾人の術語よりすれば、(一)は總所得にして、(二)は資本に、
(三)は純所得なりてふ大差別の存するあるに拘らず、當時は皆一樣に目し去つてゐたのである。^(註六)

〔三〇〕 マンケル著『第十四世紀に於けるバーゼル市財政狀況』(Schönberg, Finanzverhältnisse der Stadt Basel im XI
V. und XV. Jh.) 二六七頁參照。

〔三一〕 尙ほ中世に於ける二個の租稅法に關する余の研究に、夫れに類した例がある。即ち『ライプナヒ單科大學講師史小論』
(Kleinere Beiträge zur Geschichte von Dozenten der Leipziger Hochschule) 第三史學會議祝賀文 (Festschrift zum dri-

1) Grafchaftsrecht 2) Vogteirecht 3) Centgericht 4) Gaugerecht
5) Patronate 6) Bannrecht 7) Zehnten 8) neue Pfundzoll

然るに今日の近世的な所得に關する範疇の中の二つは、當時已に比較的明らかに表はれて居たのであつて、それは即ち地代と賃銀とである。固よりその賃銀なるものが當時に於ては一種獨得の性質を有してゐたことは云ふまでもない所であつて、それは手工業賃銀であり、手工業者の勞力の利用に對する消費者の側よりする報償で、今日の如く企業家が賃銀労働者に支拂ふ價格とは全然別個のものであつた。尤も此の手工業者がその弟子に食料以外に與へて、弟子等はそれによつて極めて僅少な部分とは去へ自己の需要を自由に満たし行くを得たる僅額の貨幣賃銀に賃銀の萌芽を已にまた認めることが出来るのである。企業利潤は商業に伴ひてのみ生ずるものであるが、商業が已に當時例外の現象であつたと同じく、企業利潤また例外の現象たるを免れなかつたのである。のみならずそれが運搬と相關する所大なりしが爲め、今日の如き商業利潤と見んよりは、寧ろ勞銀の要素と混交する所が遙かに勝れるのである。利息は通例地代の性質を帯びてゐるが、取引に屬する法律關係より生じたる各種様々の『収入』にも亦、同様の事が云はれるのである。信用取引は當時一般に賣買の形式を取りつゝありしが、これ其の當時これを以て債權者が年收若くは永續的收益を獲んが爲めに、己が財産の一部を決定的に委附することを意味してゐたものである。(永代小作に於ける永借地料、定款に基く固定土地の自然收益、地代、地代購買に於ける定期金)。而して斯かる基礎の上こそ、初めて人的保險の最古の表現にして同時に公信用の主要形式たる終身定期金の設定をも見ることが出来たのである。かるが故に個別經濟中に集積せられたる現金在高はその大部分が土地に不動産化さるゝか、或は公家計に委ねられて、その公家計より消費歩合の形態を取つて以前の所有者に拂ひ戻さるゝかしてゐたのである。固より後の場合に於ては、それは所有者の死と共に消滅することゝなつてゐた。

1) Gefälle 2) Kanon 3) Gültkauf 4) Leibrente 5) Konsumtionsquote

公家計は依然として主に私經濟的性質を帯びて居た。即ち國家に於ては、國有地よりの收入、各種特權、十分一税、賦役、庸、地代、手数料よりの收入が主となり、都市に於ては、市場取引及び消費税よりの收入が主となつてゐた。唯一の直接税はなほ財産税のみにして、所によりては所得税の要素をも交へてゐた所がないではなかつた。而してその徴收度数は前の時代に比して多かつたが、尙ほ以て不規則を免れなかつた。

〔註〕 これ等は所謂 *Engeld* なるものである。(譯者曰 *Engeld* とは、その初めには別に義務と認めずして納めたるものが、後には漸く義務として要求され、義務的に輸送さるゝ様になつたもの)。 *Engeld* と *Geld* との對照は言語の上より注意すべき値のあるものである。 *Geld* とは賣買差益に對する一般的表现である。故に *Geld* とは報償的なる年所得にして、 *Engeld* とは非報償的なる年所得である。

都市が其の四圍の田舎に對して有してゐた經濟的支配が、遂に政治的支配に變化し行くに至れることはドイツに於ては僅か二三地方にこそこれを見得たるに過ぎざれど、イタリアに於ては同じ發展は遂に都市暴政の完成にまで至らしめ、フランスに於てはその爲め封勢貴族の助を藉りて自由なる都市自治體が國王より分離獨立する淵源が開かるゝに至つたのである。これ皆要するに、ドイツに於ても、フランスに於ても、都市城壁以外に存するものは凡て封建法的組織の下に立ちつゝありしによるのである。固より大なる地權所有者は已に早くその莊園の自己經營を廢止して、その土地所有は、恰も都市の土地家屋所有がそれを所有する一家に對するが如く、その君主に對して單なる差益の源たるに過ぎなかつたものもあつたのであるが、此處に至りて遂に其の初め經濟的權力なりしものが漸く政治的權力となり、地主は王侯と變り、幾變遷の其の間に、極めて多岐に分れたる貴族的小領主と新階級を生じ、その利害關係は諸侯伯のそれと相結んで、純農業的であつたものを生ぜしむるに至つた。斯かる事の結果は、ドイツに於て市民階級と貴族との間に、

中世後段の幾世紀を覆ふかの激しき闘争を惹起せしむるに至り、其の間に處して各都市は大部分は購買及び抵當流れによつて都市領主の手より獲得した政治的自主権を主張することゝなつたものではあるけれども、然し農民階級を封建的權力より脱離せしめんとすることは遂に豫期の効果を收むることが出来なかつたのである。

故に知る、ドイツ及びフランスに於ける都市經濟的發展は遂に其の完成を見るに至らずして止みしことを。換言すれば彼の閉鎖的家内經濟時代よりしては最も強力なる組織が事實上達成され得たのに、獨佛に於ける此の都市經濟的發展は遂に斯かる結果に到達するを得なかつた。即ち夫れは經濟的勢力範圍を國家的存在にまで昂めることが出来なかつたのである。然りと雖そは我々にとつて思ふに僥倖の事であつた。イタリアに於ては、即ち然らず。都市の資本は弘く農民の土地を收用するに至り、其の結果は今日に至る迄、彼等を搾取して慘ましき半小作人の状態に沈淪せしめたのである。ドイツに於ては貴族は農民を體（ラウイヒト）僕（バウ）に零落せしめ得たりしとはいへ、此の國に先づ以て其の地方王侯の間に行き互つてゐた國家思想の爲め、農民の無産者となることを防止することが出来たのである。

三 國民經濟

國民經濟の完成は本來より云へば、政治的中央集權の成果にして、此の政治的中央集權は中世の終に當り、領土的國家構成體の成立にはじまり、十九世紀に於ける國民的單一國家の創成にその終を告げてゐる。經濟的諸勢力の總括は統體の高次目的の下に政治的特殊利益を屈服せしむることゝ相提携して行はれるのである。

ドイツには比較的大なる領土王侯ありて、地方貴族及び都市と戦つて近世的國家理念を發現せしめんと試みて居つたが、夫れには非常なる困難の隨伴しつゝあつたことは言ふまでもなく、殊に領地が極端に細分されてゐる地方に於て、

1) Leibeigene

一層其の困難を見たのである。かくして已に十五世紀の後半以降、ドイツには以前より緊縛した經濟的結合の多様の表現を認むることが出来る。即ち多數の都市貨幣に代る國內通貨の創定、商業・市場・工業經營・山林業・鑛山業・狩獵漁業に關する國條令の發布、王侯の特權制度及び許可制度の漸次的な完成、大なる法的統一を作り出すに至つた國法の公布、秩序ある國家歲計の成立は之を語るものではあるまいか。

然れどもドイツに於ては、尙ほ幾世紀の間、地方的利害關係が主要の地位を占め、爲めに國權が國民的經營政策の方向に沿つて爲した諸努力を無残にも頓挫せしめて居たのである。然るにスペイン、ポルトガル、イギリス、フランス、ネザランドの如き西歐諸國に於ては之に反し、十六世紀以來、強力なる植民政策を發展せしめて、新たに啓發せし海外領土の豊富なる資源を利用し來り、以て已に外面的にも統一的經濟範圍として進出してゐるのである。

此等一切の國々にては、強度の差こそあれ、等しく中世の特殊權力なる大貴族、都市、地方、僧俗團體に對して戦闘が行はれた。其の目的の第一着は政治的總括を阻礙するが如き獨立せる範圍の絶滅てふことにあつたけれども、其の極途に王侯の専制主義を完成せしむるに至つた此の運動の最も深奥に潛み居たるものは、清新にして偉大なる人類の文化課題は全民族の統一的組織、即ち生氣ある一大利益協同體を要望するもの、而して斯くの如きは共同的經濟の基礎の上こそ初めて生長し得べきものなりとの世界史的思想なのである。國の各部、住民の各集團は全體の爲めに、その文化及び資質に應じて最もよく寄與し得た夫々の使命を引受けねばならなかつた。其の爲めには透徹せる機能分割、全住民を包括せる職業組織を必要としたのであるが、此の職業組織は更らに極めて發達せる交通制度と住民間に於ける活潑なる貨財交換とを前提條件としてゐる。古代に於ては一切の經濟的努力は家の自主的欲望満足てふ一目標に盡き、中世後期にては都市の供給てふことに傾倒されて居たのであるが、此處に至つて極めて複雑にして精巧なる國民的欲望満足の體

系の成立を見るに至つたのである。

斯くの如き體系の貫徹が十六世紀より十八世紀に至るまでの進歩せる一切の歐洲諸國家の經濟政策の目標であつた。此の目標に到達せんが爲め用ゐられたる諸處置は、其の細目に至るまで、殆ど全く中世の都市的經濟政策を摸しつゝあつたものであつて、唯だ其の異なる點は以前の市參事會員の代りに「國父」が立ち、經濟的寺院政策に代ふるに「國子」の全體に對する保護の政策が現はれて來たそれであつた。而して此等諸規定は普通重商主義の名の下に包括されてゐた。此の主義は長い間一理論的學說と目されて居たものであり、一國の富はその國境内に存する現金の額を以て成るてふ原則に至りて、遂に其の頂點に達したのである。今日にては、此の見解は一般に拋棄され終つたとはいへ、重商主義そのものは決して死せる教義には非ずして、カール五世よりフリードリヒ大王に至る一切の大政治家の手に掛れる活ける實際なのである。其の模範的刻印は、これをコルベールの經濟政策に見ることが出来る。かの國內關稅及び道錢を廢止若くは輕減せしめ、統一的國境關稅制度を施行し、輸出を困難ならしめ、天然資源の特權化を實施して必要なる原料及び食料品の國內供給を確保せしめ、工業の新部門を移植し、それに國家的保護と技術的取締とを加へ、關稅警察の力に俟つて外國の競争を排除し、以て大工業を促進し、人工道路、運河、海港を築造し、度量衡制度の統一に努力し、商法及び商業通信事務を規定し、技術、藝術、科學を獨自の國家施設によつて獎勵し、國家財政及び自治體財政を規定し、課稅の不均衡を除去せんと試みたが、これ等一切の事、之を要するに、國民の欲望の一切は國民の勞働によつて満足せしむるを得、國內に於ける活潑なる交易によつて、其の國の自然的補助手段と國民の個人的力量との一切を擧げて、國家全體の用に供せんとする對外閉鎖的國家經濟を創り出さんと唯一の目的に應ずるものであつた。人は此の「コルベール主義」の外國貿易、海軍、植民制度に對して獨自の庇護を加へたりしことにのみ眼を奪はれて、それがその國の內的補助力を鞏固ならしめたるの事實を閑却するもの多く、當時なほ依然として重要な地位を占めつゝありし自己生産より一般的交換經濟の状態に遷移すべく現金の流通手段の増加を必須條件としつゝありし時代に於ては、所謂貿易權衡説なるものゝ必要缺くべからざるものとなつたことに思ひ及ばなかつたのである。

〔三三〕 ドイツの領土に就いてかゝる進歩を最も巧に彼がたつたのは *Jurb. f. Gesetzgeb., Verw. u. Volksw.* 第八卷 (一八八四年) 二二頁以下のシュモラー (Schmoller) の所説である。

國家の採用せる斯かる處置と相併んで、同一方向に働きつゝありし社會的諸勢力の存在をも度外視し得ざるは言ふまでもない。斯くの如き勢力は其の出發點を當然都市に有してゐた。都市に於ては徐々なる變成を経て土地定期金賣買より利息付貸付を生じ、斯くして十六世紀の經過中に一種獨得の信用制度を生むに至つたのである。吾人は貨幣によつて貨幣を贏得するてふ祕密を先づ以て發見せる彼の卸賣商業の影響を此の中に認めることが出来る。都市に於ける富者の財産は差益基金の解放によつて著しく大なる可動性と蓄積力を得るに至り、從來唯一の商業資本に加ふるに、貸付資本なるものを生じ、かくて此の兩者互ひに相補ひ相強め合ひて、一層大なる發展を遂ぐるに至つたのである。

其の最初に現はれたる結果は商業の著しい勃興であつた。二三の都市は中世的市場都市及び手工業者都市で團栗の丈比べ式状態より超脱して、或は國家行政の中心點となり、或は商業地となつた。ハンザ同盟の崩壊と世界交通路の變更によつて、北方諸國への中間商業に對する其の意義の大部分を失墜し終れるドイツにては、大なる歳市がいよいよその重要さを増し來り、各地方市場が益々其の勢力を失つて行く所に、少くとも躍進の氣運を仄見せてゐる。フランクフルトの歳市は十六世紀に其の頂點に達し、ライプチヒの歳市はなほ著しく後代に繁盛の極に達した。然し商業資本は間もなく外國製品の輸入及び回轉を以てしては、最早満足しるを得ざるに至り、内國工業と農民家内仕事の餘剩とに

1) Handelsbilanztheorie

1) Landesvater 2) Landeskinder 3) Merkantilssystem 4) Colbert
5) eine nach aussen abgeschlossene Staatswirtschaft 6) Colbertismus

對する前貸資本¹⁾となつた。而してマファクトゥールと工場とに於ける分業的大量生産を生じ、それに伴ひて賃銀労働者階級を生ずるに至つた。中世の爲替銀行に代つて、先づ預金銀行と振替銀行とが生じ、次いで近世的信用銀行が現はるゝに至つた。以前には單に商業經營の缺くべからざる一部を構成するにすぎなかつた運搬事業は獨立した。國營郵便、新聞及び國有商船隊が成り立ち、保險事業が完成した。到る處に、多くの人々の經濟的欲望を満足せしめんとする新しき組織が生じた。國民的工業、國民的市場、國民的交通施設、即ち之である。斯くの如くにして商業の資本主義的企業主義が天下に澎湃とした。

專制主義國家が如何に此の運動を促進せしめたりしか、又その發展を早めんが爲め、自力にては現はれ來らんとは欲せざりしものを、人爲的に喚起し來たりしことの如何に屢々なりしかは云はずして明かなことであると思ふ。斯くの如くなるに拘らず、少くもドイツに於ては十八世紀末頃までは、古き都市經濟的法律制度が、同業組合²⁾、追放³⁾、同業組合營業獨占權⁴⁾、都市強制等の如き形式にて存續して居たのであつて、假令國立法によつて種々な制限を加へられてゐたとは云へ、己れ自らに固執して、四邊に發芽し來れる新らしき國民經濟的生活とそれが成熟させた多數の新らしき交通諸現象とに就いては何等顧慮する所がなかつたのである。重農主義者及びアダム・スミス⁶⁾がフランス及びイギリスに於ける新交通現象に科學的觀察を下したる時、其處に問題とさるべかりし事は純社會的行動の自發的結果には非ずして、教育的なる國家活動の一成果も共に然りであつたといふことを全然閑却してゐたことは、誠に顯著な不可思議な事なのである。彼等が廢止されんことを希望してゐた束縛は、或は土地負擔、同業組合、局部的強制權、移轉自由の制限の如き舊き經濟段階の化石せる遺物であり、或は專賣權及び特權の如き、一度その目的を到達せし曉には、廢止して差支へなき重商主義的教育手段、即ち之であつた。

1) Verlagskapital 2) Zunft 3) Bann 4) Meilenrecht 5) Städtezwang
6) Adam Smith

〔三四〕 此處に又(Conrads Jahrb. III. V. XXI. 四四九頁以下、五九三頁以下のベロー(Below)の論說「中世都市經濟の没落」(Der Untergang d. ma. Stadtwirtschaft)を参照す。

國民經濟の發達てふ事に關しては、最近百年間の市民的自由主義¹⁾は、かの王侯的專制主義が手を着け初めた事柄を承繼したにすぎないと云ひ得る。斯かる言をなさば直ちに、或は狂せるに非ずやと思はれるかも知れぬ。然り、漫然として之に對すれば、自由主義はたゞ物を破壊するのみ、家内經濟及び都市經濟の殘存せる組織諸形態を打破したるのみにして、新らしき何物をも築き上げざりしが如く思はれよう。即ちそれは個々の地方又は個々の社會聚群の特殊地位と特權とを斥けて、これに代ふるに自由競争と權利平等とを以てしたのであると見られ得よう。然しながら斯くの如くに舊時代の遺物を解消し終つたといふ事は、即ち他面に於ては同時に、眞の國民經濟的新構成への道を開拓せるものなりと云ふを得べく、其の折々の技術進歩の程度に應じて、一切の力が各自最もよくそれに貢獻し得る場所に於て、統體の用益に立ち得る事を可能ならしめたものなのである。

フランス革命以降標識高く掲げられて、人格と財産との自由を望んだ各種の要求、しかもそれ等は結局に於て達成され得たのであるが、これは要するに經濟に取つては、それから契約自由の基礎の上に企業が築き上げられる生産諸要素の無碍の可動性を意味したのである。而してその企業とは即ち今や貨財生産及び其他重要な經濟生活の任務の一切を引き請けるに至つた資本裝備を具へて家計から分離された經濟を云ふのである。かくて營業の各部門への参加は最早や國家の許可とか、獨占的營業權を有つた團體への歸屬とかによつて左右されざるに至り、企業家たらんとの意欲と能力とを持つてゐた人々の自由なる決意によるだけとなり、しかも此の人々が斯かる決定を爲すに當つて、彼等を動かしたものは、それは唯だ所期の利潤の額の豫想の多寡にのみあつたのである。新しいどの企業にも、それに伴つて消費か

1) der bürgerliche Liberalismus

ら取り除かれて特に交易による營利に丈け宛てらるゝ、或る金額が國民の財産から析出されることとなつた。斯くして營業資本と消費財産とが分れ、家族が營利の組織形態を左右することを止め、従つて營利努力の目標たる『食料』といふ考も消滅した。家計と營利經營とは、唯だ僅かに、前者が後者からその消費の爲めの手段を得てゐたといふ範圍で相互關係を有してゐたのであり、生じ得べき餘利は企業の中に停まつて、その有機的成長を可能ならしめるのである。

然しながら此の營利に當てられた財産の塊は企業資本へだけ局限されてゐるのではないのであつて、企業資本から分れて、他の經濟に貸付けられる財産から第二の貨財量が構成されるのである。此の唯だ要求權に丈け其の本質を有してゐる『擬制資本』¹⁾は國債制度、銀行、保險業及び己れに好適な企業形態(株式會社、合資會社、有限責任會社)に依つて法外な成長を遂げる。該資本は企業資本と極めて複雑に參差して、其の果ては全經濟範圍に大部分の企業家をして唯だ僅かに彼を代表する營業資本の名義上の所有權者たるにすぎざるに至らしむるのである(負債を有する農民、抵當義務ある家屋所有者、その他又、債務資本を課せられてゐる工業企業家)。此の貸付資本の利息は企業資本の収益の低下し得る限度の同高線を示すのであるが、貸付資本は一般に企業資本に比して其の増加の速度が速かである爲めに、貸付資本は漸増的に此の企業資本を分割して、其の極、遂には企業家を欺騙して、彼等に獨立性ありと思はしむるに到底必要であるだけの極く僅かな殘餘までも殘らずそれを攝取して仕舞ふやうになるのであらうことは豫見に難くない所である。かくて株式會社及び鑛山會社の總支配人は本來、貸付資本に著しく接近せる營業持分に分割されてゐる他の資本の管理人たるに過ぎないものとなる。

然るに貸付資本は企業への投資にだけ限られてゐるのではなく、其の極めて著しい部分が公團體にも亦、個人の許でも、其の消費目的に仕へてゐるのである。そしてそれは絶えず利息に依つて國民的經濟収益の大部分を吸収して、消費

1) fiktives Kapital

の節約によるよりも遙かに多くそれ独自の集積力によつて其の額を増して行くのである。かの中世に於ける定期金資本の特徴であつた一切土地に結び付いてゐた状態から解放されて、此の貸付資本は極めて自由な方法で設備形態及び振替形態を完成し、最高の利息が招く場所へと殺到せんと絶えず動いてゐるのである。

資本主義時代の本質は、資本それは自己のものたると他人のものたるを問はず、これを自由に處分し得る人々によつて生産が支配されるといふ事よりも、前述の事によつて遙かによく言ひ表はされるのである。歐洲の經濟生活の農業時代、それは閉鎖的家内經濟の時代から都市經濟の時代にまでも遠く及んでゐるのであるが、この時代に於ては一切の經濟的關係及び依存状態が土地に『物上化され』¹⁾てゐるのであるが、今や夫等は『動産化され』²⁾てゐる。即ち可動的な資本に隸屬して、それに調子を捧ぐべき義務を負ふに至つたのである。國家さへもが、租税の形で國民所得の莫大な部分を仰筒仕掛を通す様に絶えず貸付資本家に送水する一個の設備となつてしまつた。これに對して貸付資本家達は營利能力ある財産の部分の國家の行使に任せるといふ以外の事を爲す要がないのである。而してそれと同じく、國民生産の収益の著しい部分が、貸付資本家がその國民生産に提供した固定資本及び經營資本に對する配當金及び利息といふ形で彼等の許に流れ込むのである。

貸付資本家は資本収益を打ち越えた彼方にある利害關係を生産に於て有してゐない。彼等が四六時中求むる所のものは、彼等に勞力なくして得らるゝ最高の所得を約束する設備のみである。此の事を明らかに教ゆるものは配當證券の相場状況と固定利子付有價證券のそれとの間にある周知の關係である。好況期には後者が低落し、不況期にはそれが昂騰するに反して、株券は逆の評價となる。都市經濟に於ては最も著しく効力を發揮してゐる生産に於ける人的要素は、此處にはいよゝ益々後退してゐる。企業家は最早や何物かを爲し得る能力を有する人ではなくて、自己所有と他人所有

1) verdinglichen 2) mobilisiert

の資本を最も有利に回轉せしめ、それに依つて他人を牛耳る所の人なのである。

此の資本の回轉は通例、生産の結果が商品、即ち一般の交換に指し向けられてゐる貨財となるといふ事で終るのである。家内經濟及び都市經濟に於ては自己生産の罅隙を充たさんが爲めに外地より輸入された貨財のみが商品の性格を取つてゐるのであるが、今や、分業的になつた生産で作り出される殆んど一切が商品となるのである。斯くして商業は全く其の性質を一變せしめてゐる。即ちそれは總生産に對する一般的清算設備となつてゐる、以前は原料生産物の缺乏と過剰との均衡に向けられてゐたのに反して、今日では工場製品配給の範圍を次々と略取しつゝあるのである。而してそれと同時に、國民經濟に於ける貯藏の任務が其の最大限の範圍まで商業に移行してゐる。商業は生産者の手に成る生産物が最後の消費者にまで達しない内に已に早く、生産者に生産續行の爲めの資金を前貸しするのであつて、斯くて消費者に對し信用供與者として出現して來ることも亦餘りに屢々なのである。

斯くの如くにして全國民經濟は極めて雑多なる信用關係によつて一貫さるゝのであつて、即ち上は國家の十億圓信用より、下は企業家の當座勘定信用、労働者の小賣商人信用に及ぶのである。全經濟體への資本主義的浸潤が行れて、皆に企業のみならず、企業的經營が根を卸さなかつたし又見透す事の出來る將來とても根を張ることが出來相もないやうな範圍も亦、資本主義的浸潤が透徹してゐるのである。即ち農業、手工業及び人的服務、一切のものが資本に對して調賣の義務を負ふやうになるのである。然かも資本は所得過剰からばかり絶えず増加してゐるのではなくて、全然所得に非ざる金錢、即ち現金在高が銀行に預入れられ、此處でそれは割引取引、當座勘定取引、動産擔保取引に供されてその企業に利子を生む事になり、以て企業の經營滯滞を防ぎ、それが完成商品の清算を輕易ならしめる事が出來るのである。此の事が已に、資本主義的經濟なる名を極めて廣い意味での企業的經營なりと解さねばならぬものであるといふ事を

示してゐる。普通には世間では、企業家が支配する、そして其の企業家の掌裡で一切の生産要素が資本成分に分解され、斯くして彼の爲めに營利の手段となるといふ唯だ其の一方だけを眺めてゐるが、此の生産に直接役立つてゐる具體的に存在する資本、即ち工場建物、機械、器具、道具、原料、駄獸、勞賃等と相並んで、更らに莫大なる量のかの擬制資本が存することを見通がしてはならない。此の擬制資本の莫大なる量はその所有權者（要求權者）に對して前者と優るありとも劣らざる營利の手段なのである。然しながら此の擬制資本が斯くの如き營利手段となり得るのは、それが利息を取つて企業家に委附され、企業家の手によつて物的資本に變ぜらるゝ事に依つてである。而してそれがその生産作用を供し得るのは唯だ一回だけであることと言ふ迄もないが、之れに反してそれが收益を生み出さねばならぬ方面は二つあるのであつて、即ち一方はそれを利用する企業家であり、又他の一方はそれを唯だ前貸ししたわけで、生産そのものは、ぼんやり眺めてゐる貸付資本家になのである。故に企業といふ一つの皿から二人の人間が物を食つてゐるのであつて、貸付資本が企業の機構の中に全面的に侵入し、それが生産に決定的強權を握つてゐるといふ事こそ、全發展に於ける較著なる事柄なのである。而して設備諸形態をしていよ／＼危険より脱せしめて、此の危険を本來の生産者か然らずんば中間人（抵當信用の際には地主及び家主）に轉嫁せしめんと企てゝゐる。否、そのみか、社會的企業資本を貸付資本に近接せしめ、配當金に利息の確實性と均等性とを賦與すべき目的と作用とを有する大きな團結（カルテル、トラスト）を創り出してゐるのである。

資本主義は、其處には資本が支配して一切の經濟關係に己が性格を附與する體系であることには間違はないけれども、此の支配權は極めて錯綜した依存關係の纏綿を通して行使さるゝものなのであり、單に企業家と賃銀労働者の對立關係中にのみ成り立つものではなくして、生産に従事する一切の階級が資本所有者に對して納税の義務があるといふ點に成

り立つてゐるのである。即ち土地及び家屋の所有者はその何十億に達する不動産抵當資本の利息により、鐵道及び鑛山はその株券と鑛山株の配當金により、農業者、工場主及び商人はその經營資本の割引、動産擔保利子及び當座勘定利子により、労働者はその賃銀が労働收益以下に停頓するといふことにより、最後に國家及び公共團體も亦、その公債の利札によつて資本所有者に納税の義務を果してゐるのである。而して運命によつて資本所有者の眼鏡に叶ひ、資本の權力を労働する階級に對して行使する權能を與へられた者が、唯だ皮相の觀察では、『資本家』と思はれ得るのであるが、彼は要するに資本主義の道具たるを出でないのであつて、それ自らは更らに己が上に一層強力なる主人公を戴いてゐるのである。

本來の資本家は社會的鬭争の射撃の遙か遠くに坐してゐる。彼の爲めに播種し收穫するのは農夫であり、賃賃料を蒐めるのは家主であり、狂瀾の波濤を冒して船舶が彼の運賃を儲け、工場主と商人とは心を痛めて物を創り出し、労働者が槌を打つたり織つたりしてゐる。株式會社の場合の如く、資本家が一見企業家として登場してゐる所さへ、彼等は自らその經營とは無關係なのであるか、監査役と銀行といふ中間部員を通してその權力を行使するのである。此の事こそ、此の資本主義的體系全體の不氣味な事なのであつて、即ちその擔當者が何處にも到る處に存しながら、それと其の所在を突き止め得難く、擔當者は己が支配權を規則的に行使はするが、身を以て直接的にそれを爲すには非ずして、斯かる状態の厭はしき一切を己が身に引き請けねばならぬ黒幕の前に引き出された名義だけの人物を通してであるといふそれである。

資本主義的經濟方法が及ぼした影響に就ては、此處ではほんの端かしか觸れてゐられないが、それは人口と國民財産とに及んでゐる。資本主義的經濟方法は移住の自由、營業の自由及び職業選擇の自由に關する立法の助けを藉りて人口を全的に改組せしめたのであつて、これに依つて人口の職業的組織、各個人の社會的地位及び國內居住地への人口の配

分は根本的に變化させられたのである。又、財産は新構成と價值増高によつて凄まじい増加をしたのであるが、それも同じく全然異つた方法で人口の間に分配されたのである。斯くして新しい階級が成立した。即ち從來の發展段階に於て未だ曾て示され得なかつた職業階級と財産階級がそれなのである。此の際に可動資本が立法によつてどれ程まで保護を受け促進されたかは、此處では研究してゐる邊がないのである。

自由主義が先づ以て進んでその爲めの道程を截り開いた經濟諸力の自由不羈な行動が、重商主義カウメル主義の閉鎖的國家經濟1)の代りに開放的國民經濟2)を据ゑたのであつて、此の開放的國民經濟に於ては各人はその自己利益の衝動に従つて己が經濟任務を選ばねばならぬ事となつて居り、且つ此の衝動には彼の財産状態が許す限り従ふ事が出来るのである。然るに自由選擇の權能を有するものは元來唯だ財産を自由にすることの出来る企業家のみなのである。實に資本主義は企業家階級の間自己意識を有する努力的な一種族を育てあげたのであつて、恐ろしきまでの經濟的進歩は此の種族の行爲に歸すべきものであり、他の資本に依存するといふ事が最高度の精力と給付能力とを此の種族の間に誘發させることゝなつたのである。然しながら此の種族には、大衆が社會的向上の希望を失つて、不平不満にして改革を翹望する労働階級として相對峙してゐるのである。然るに擬制資本の代表者達は知らぬ顔に其の傍に佇立して、心には靜かに同情の念は懐きながらも、企業家の側に立つてゐる。斯くして此の新しい經濟世界は激しい社會的對立とその成り行きと結末とが如何なるべきかは、今日何人も之を見通すことの出来ない利害の大衆鬭争の不安に満たされてゐるのである。

自由主義は國民經濟の全發展をして自由なる社會活動でふ地盤の上に立たしめ、従つて屢々直接反國家的なる方向を取つたのではあるが、近代國家が十六世紀以降辿り來つた方向、即ち益々向上して行く文化的使命を達成せんが爲めに、國民の全體及び國家領域の各部をいよ／＼緊密に結合せしめんとする方向に、近代國家そのものがいよ／＼完成されて

1) die geschlossene Staatswirtschaft 2) eine offene Volkswirtschaft

行くことを妨げる事が出来なかつたのである。凡べての大政治家は三世紀此の方、此の目的の爲めに協力し來れるものにして、クロムウェル、コルベールに始まりカヅール、ビスマルクに及ぶ。フランス革命は最近數十年間に於ける國家改變と同じく、中央集權の促進に資して劣る所がなかつた。而して此の發展の最新の分位に於ては國民主義が有力なる總括的勢力の原則となつた。斯くの如くにして往古の小領土國家は、最早現代の包括的なる經濟的使命を果す能はざるに至つて、或は一大國民國家の下に結合さるゝこと、かのイタリアに於けるが如く、或は聯邦國家のためにその獨立の著しき部分殊に經濟立法を拋棄せざるを得ざるに至ること、かのドイツ帝國に於ける聯邦各州の如く、かのスイスに於ける州の如くなるに至つたのである。

然り而して自由主義時代に生じたる國際交通の輕減よりして、國民經濟の時代衰亡して、其處に世界經濟の時代生れ出づべきことを結論し得とするものあらば、そは大なる謬想である。見よ、歐洲諸國に於ける最近の政治的發展は、重商主義の理念の復活と、部分的には古き都市經濟の理念の再燃とを結果してゐることを。更らに思へ、かの保護關稅を復活せんとし、國民的貨幣本位と國民的勞働立法とを固執し、交通設備、勞働保險、銀行業の國有を已に完遂もしくは尙ほその達成に努力し、經濟範圍一般に國家行爲のいよ／＼増加し來れる事を。實に此等一切は時代が專制主義時代、自由主義時代を経て、國民經濟の第三期に足を踏み入れたることを語るものに非ざるなきか。此の國民經濟の第三期は一個獨得の社會的形相を有す。それは最早單に國民的生產によつて國民的欲望を出來得るだけ獨立的に、又出來得るだけ豊富に充たさしむるを以て満足するものに非ずして、更に進んで其の國民全體をしてその經濟的給付に應じ、文化の貨財に參與せしめんと目的を以て、公正なる貨財分配を期待し、國家の獨得なる共同經濟的活動を所期せんとするものである。然り而して夫れに必要な處置はたゞ大規模なる段階の上に於てのみその實行を期待し得べきものにして、唯

1) Nationalitätsprinzip 2) Weltwirtschaft

だ大なる國民國家にして始めて望み得らるゝが如き凡べての個別力の緊密なる團結を必要とするものである。

今日ヨーロッパに於ては、一面其の食料品及び享樂資料の大部分を他國に仰がざるを得ないといふ點に於て、その貨財供給に於ける國民的獨立を缺きるが、他面その工業生産能力は遙かにその國民的欲望を超過して絶えず餘剰を生産し、それが利用を他國の消費範圍に求めざるを得ざるが如き多數の國家に接するのではあるけれども、斯くの如く相互に相倚り相待ちつゝある工業國と原料生産國との併立、換言すれば斯かる「國際的分業」を以て、これ人類が世界經濟の名の下に以前の三段階に對立せしめざるべからざるが如き進化の新段階に攀ぢんとしつゝある標識と思惟すべきではない。蓋し一方より考ふるに、從來如何なる經濟段階とても欲望滿足の完全なる自裁を永きに涉つて保證し得たりしもの一つも之れ有る無く、何れも皆必ず或る缺陷を生じ、様々なる手段に訴へて其の缺を補ふの餘儀なきに至れるは吾人が已に幾度か見來れる事實なるが、又他方より考ふるに、かの所謂世界經濟と稱せらるゝものも、少くとも今日迄は、國民經濟の現象とその本質的特徴を異にしてゐるが如き現象の一つをだに示すものあるなく、なほ考へ得べき將來に於ても、斯かるものゝ生じ得べしとも思はれ得ざるが故である。帝國主義すらも唯だ資本主義的企業家營利經濟の一増高たるにすぎずして、其の手段を驅使してゐるにすぎない。

〔三五〕 例へば古代ギリシヤとそのポントス諸國よりの原料品輸入及び古代ローマに於ける租稅穀類の輸入を考へ見よ。

其の時々の權力者が勞働者に約束する經營の社會化が新しい一つの經濟世界を招來し得るかどうかは、此處では觸れずに置かう。一時が程は此の社會化が相當に廣い範圍の國有化と社會化とを夫々の國に對して豫想させさへはするもの、他方に於て經濟の廣い層は舊態依然として其の舊き所有狀態、經營狀態に停まつてゐるのである。我が國に於てさへ計畫した變革の實現を妨げる妨礙は到底超克することが出來ない様に見えるのである。然し社會化の成功に一層強力な

1) internationale Arbeitsteilung

る豫想があつたとしても、それは我々の學說に一個の新しい經濟段階の特徴を附加することは出来なかつた事であらう。斯くて社會化の起源とその本質とに取つて著しい事柄は何時でも、それが『經濟史の轉機』に際して政府の命令によつて突如として、つくり、其の儘生れ出さるべきものであり、企業家労働者間の對立の除去を以て満足し得と思ひ、自己の利益に立つ貸付資本の立場に唯だ單に觸れ得ないばかりでなく、寧ろ更にそれを無制限に擴大させざるを得ないものであるといふ事なのである。斯くして今や我々は、如何にも企業家階級なるものは最早や存すべからずとするも、『擬制資本』の支配は微動だもせざるのみか、更らに尙ほ進んで新しき補強の下に其の存続を示すであらう一つの世界に直面してゐる。此處に資本主義の終焉を眺め得と爲す人は、甚だ謙遜である。我々は其處に暫し假りに、傳來の體系の増強をのみ認むるものなのであつて、隠忍して、やがて來らんとするものを待つてゐるのである。

〔三五〕 刊行された余の講演『社會化』(Die Sozialisierung) (一九一九年、チュービンゲン、第二版)の參照を望む。

四 三段階の比較

更らに此處に全三段の發展を貫く特徴を、その主なる現象の二三に就きて總括して之を比較せば、全體を一層よく了解せしむるの便があるであらう。

此等の特徴の中最も著しきは、歴史の經過に伴ひて人類がいよ／＼高き經濟的目的を立て行き、その手段として益々廣き範圍に及ぶ労働分擔が行はれ、それは遂に全國民を包括して全體の利益に全體の人類が參與することを喚起し來る事それである。此の共働は、家内經濟に於てはその基礎を血族關係に置き、都市經濟にては相隣關係に、國民經濟にありては國家、否、世界に置いてゐる。其の爲め人類の通過する道程は氏族¹⁾より社會へてふそれであつて、我々の知り得

1) Sippschaft

る限りに於て、それは益々緊密に成り行く社會化を以て其の終局に達するものである。此の道程に立ちて、各個人の欲望満足は益々豊富に、いよ／＼雜多に赴くと同時に、漸く非獨立的に且つ複雜となる。各人の生活と労働とは益々多數の他の人々のそれと參差して行くが、それと共に各個別經濟の貨財供給はいよ／＼確實に進み、天變地異の影響を蒙ること漸く稀になり行くのである。

家内經濟の段階に於ては貨財は何れもその生じたる經濟内にて消費され、都市經濟の段階にては生産經濟より直接消費經濟に移されるけれども、國民經濟の段階に至つてはそれが製作さるゝ時に於ても又出來上れる後に於ても各種異なる經濟を通過する。即ち流通するのである。故に全發展の經過に伴れて、生産と消費との間の距離漸く大になる。第一の段階に於ては凡ての生産物が消費財であり、第二の段階にては已に其の一部が交換財となり居れども、第三の段階に至れば大部分が商品となるのである。初期に於ては使用價值が生産の種類及び範圍を決定するものとなり居たりしが、後段に至りては交換價值がいよ／＼その勢力を増して行くのである。

個別經濟は第一の段階にありては同時に生産協同であり、消費協同であつて、その組織は家族によつて表はされてゐる。都市經濟の段階にては、手工業者の徒弟及び百姓の奴僕がその主人の家計に參與してゐる限りは尙ほ其の狀態を固持してゐるが、國民經濟に入りて生産協同と消費協同とは分裂するに至つた。即ち生産協同は契約主義に基きて築かれたる企業にして、同時に資本財産の擔ひ手であり、それと分立してゐる多數の家計がその収益によつて生活してゐるのを普通としてゐる。斯くて家族は社會の經濟單位を構成する作用を失つて仕舞つた。固より貨財生産が家族の機能に屬してゐることなきにあらねど、それは唯だ僅かに例外の現象にして、普通、家族は單なる消費機關であり、使用財産の擔ひ手なのである。

支配力はと云へば、家内經濟の段階に於ては土地所有權である。これを有せざる者にして生きて行き得んが爲めには、他人の奴隸又は家人^{かきん}たらざるを得ない。而して一切の社會關係は土地所有權と共に物化されてゐる。都市經濟に於ては土地利子、家屋年金及び地代を伴ふ新生の信用諸形態も亦、土地所有權に附着してゐる。國民經濟に至つて資本が支配權を得るのである。資本に一切の經濟要素が隸屬し、遂には土地までもがさうなるのである。第一段階では土地所有權者のみが働かずして所得を得ることが出来たが、最後の段階では資本家のみが同様にして利得してゐるのである。

何れの段階にても、大なる經濟的使命は唯だ承役的勞働^{じやうやくてきらうどう}がその指導する力の下に隸屬することによつて果され得るのであるが、他よりの勞働を必要とする際は、家内經濟に於てはそれは經濟指揮者と永續的強制關係^{じきやくてきせいけんがひ}（奴隸・家人^{かきん}）に立ち、都市經濟にあつては長期の雇傭關係に、國民經濟に於ては短期の契約關係に立つてゐる。消費者は閉鎖的家内經濟にありては或は自身が勞働者なることあり、或は其の下に働く勞働者は彼の所有物となり得ることあり、然るに都市經濟に於ては消費者は或は勞働者より直接その勞働を購ふこと、賃仕事に於けるが如く、或は勞働生産物を求むること、手工業に於けるが如くである。更らに國民經濟に至りては消費者は最早勞働者と何等の關係なく、彼は企業家又は商人より商品を購入ひ、企業家又は商人が勞働者に賃銀を支拂ひつゝあるのである。

貨幣は閉鎖的家内經濟に於ては、その初期には全く之を見る能はざりしが、後に至つて直接使用財であり、蓄財の手段となつた。都市經濟に於ては貨幣は實際上交換手段であるが、國民經濟に入りてはその外に流通手段及び營利手段となつたのである。故にこの三時代を稱して實物經濟^{じつぶつけいぎ}、貨幣經濟^{かへいけいぎ}、信用經濟^{しんようけいぎ}とふ名目を立つる學者あり、それは假令貨幣の變遷し行く役割を遺憾なく汲み盡し得たるものとは許し得ずとは云へ、しかもそれを極めて適切に表はすものと云ふことが出来るのである。

1) Naturalwirtschaft 2) Geldwirtschaft 3) Kreditwirtschaft

資本は第一の段階にては殆んど之れ無く、ありしは唯だ使用財のみ。第二の段階に於ては道具が生産資本てふ慣用の範疇に入れられ得るけれども、原料は一般には到底それに算ふる譯には行かぬ。其處で本來の營利資本はたゞ僅かに商業資本ありしのみ。然るに第三の段階に至りては營利資本は貨財を分業の一段階より他の段階へと昂め、以て全流通程を通過せしむる手段を構成する^{せいせい}。斯くて此の時代に於ては、有りとあらゆるもの皆、資本となる。生産に役立つに非ずして、生産收得を時間的併びに場所的に正當に分配する役に立つ貨財すら又これに洩れないのである。故にこれによつて閉鎖的家内經濟を稱して無資本經濟^{むかぽんけいぎ}、都市經濟を排資本經濟^{はいかぽんけいぎ}、近世國民經濟を資本主義的經濟^{かぽんしやぎてきけいぎ}といふことが出来ると思ふ。

〔三六〕 第四講及び第八講を参照。

所得と財産は、閉鎖的家内經濟に於ては分離されず、又分離し得ぬ一團となつて居た。しかし其の時已に地代の萌芽を認めることが出来る。都市經濟に於ては利息も亦、多く地代の形式を取り、企業家利潤は殆んど商業に於てのみ専ら獲得せられ、勞賃の主要形式は消費者の支拂ふ手工業者賃銀であつた。然れども貨財の大部分は、依然その製出された經濟を離れて他の經濟に移り行きはしなかつた。而して純所得を獲得し得たのはたゞその財産を決定的に土地定期金賣買に宛てゝある人のみであつた。然るに國民經濟の段階に於ては所得の四分科が明らかに分化し、全生産收得は殆んど流動化されて交易に宛てられてゐる。財産は差益現在高と營利現在高とは使用貯蓄より分離し、使用貯蓄は考へ得べき最僅少の分量に制限されてゐる。

どの經濟段階に於ても、貯藏品の保存は不意に生ずる欲望を満足させるに不可欠な前提條件である。然し閉鎖的家内經濟に於ては、どの家長も己れと己が家族の爲めに貯藏品を保つてゐるが、總じてその爲めに大量の死藏さるゝ使用財

1) kapitallose Wirtschaft 2) kapitalfeindliche Wirtschaft
3) kapitalistische Wirtschaft

が生じ、其の極度に人をして不経済に至らしむるのである。都市経済に於ては、需要の際に、貨財がその完成したるものを他の経済の内に期待し得る場合には、それを他の経済から己の許に引き寄せる事が出来はするけれど、自家の貯蔵品保存はなほ依然として分不相應に大なのであつて、家父が常に準備してゐる現金の額は一般の人が考へてゐる所を遙かに凌駕してゐる。國民経済の段階に於ては、商人の倉庫には直ぐ使用する事の出来るありとあらゆる種類の貯蔵品が藏されて居て、個別経済からは其等を何時使ふか知れないといふのにも、ちゃんと用意して置くといふ必要が取り除かれてゐるのである。

他面に於て、消費し盡されない所得過剰は第一の段階では、いや又第二段階でも多くの場合には、使用財産として残されてゐるが、國民経済の段階では、或は直接に營業資本に投ぜられたり、或は貯蓄銀行や銀行を通して利子を産む貸付に變ぜられたりするのであつて、どつち道資本化されるのである。

第一の段階に於ては獨立せる職業種類としての工業は存せず、材料變化の全體は單なる家内仕事たるに過ぎなかつた。都市経済にあつては工業的職業労働者は之れ有りしも、企業家はこれを見る能はず。工業は賃仕事もしくは手工業であり、これを行はんとする人はその技藝を心得てゐることを必要とした。然るに國民経済に於ては商人的な教養ある企業家と大資本とをその前提条件とせる工場工業及び家内工業が主となつてゐる。生産過程を技術的に知悉することは企業家たるに於て決して必須条件とはなつてゐないのである。

商業の經營形式もまた同様の變化を呈してゐる。閉鎖的家内経済は行商、都市経済は市場商業、國民経済は常設商業に當る。前兩時代に於ては商業は普通の自主的なる生産の單なる埋草たるに過ぎざりしものが、國民経済に至りては生産と消費との間に立つて必要缺くべからざる中間肢體を形作ることとなつたのである。其れは運輸より分離するに至つ

たが、運輸はそれ自身立して獨立的意義と獨立的組織とを得ることとなつたのである。斯くして遂には、企業的に生産するものゝ殆んど一切が商業に歸屬することとなり、商業は一般の商品生産の清算施設となるのである。

運輸業務が古代の奴隸経済及び中世の莊園經濟に於ても之れ有りしは言ふまでもなく、特殊の奴隸又は家人の手に委ねられてゐた。中世にては都市附屬の使者ありて、その初めは唯だ市參事會員の使にのみ任じたりしが、漸く私人の信書送達をもなすに至つた。近世の初頭、郵便を生じ、はじめは唯だ國事傳達の目的にのみ使用されてゐたが、後には公衆の用に供せらるゝに至つた。十九世紀にては鐵道、電信、電話、汽船航路相繼いで起つたが、國家は經濟の爲めに此等に干渉したのであり、それと相併んで多種多様な私營の交通企業を生ずるに至つたのである。然れども何れの段階に於ても、或る種の交通業務は最高の經濟指導によつて、しかも先づ以て常に其れ自身の需要の爲めに組織されてゐたのである。

〔三七〕 新聞業のこれと相似たる發達に就きては第六講を参照せよ。

信用は第一の段階にては純然たる消費信用にして、人とその全所有權とを抵當として初めて得られたのである。第二の段階に於ては對人信用にてのかの債奴なる現象は漸く減じ來り、消費信用と相並んで一種の不動産營利信用が出現したのである。この不動産營利信用は都市經濟の正規なる信用形式として一般に通用してゐるた賣買の形式を取つて居たのである。近代の特殊なる信用形式なる營業信用もしくは生産信用はその初めには先づ商業中に發達し、次いで其處より凡べての經濟範圍に及んだのである。國債は古代國家にあつては當然強制國債であり、中世の都市にては終身定期金賣買及び買戻權附地代として表はれ、近代國家に於ては償還可能にして利息附の借用證書又は端數の無い纏まつた額で發行される永代年金の發行で行はれてゐる。

公務の範圍にあつても亦、同様の段階が示されてゐる。權利保護と云ふことはその初め氏族の事業であつたが、後には領主の仕事となつた。中世にては、都市は除外的裁判所管轄區域をなしてゐた。然るに現今に於ては、司法と保安警察とは國家的職能となつてゐる。教育事務も亦然り。その初めに當つては、それが家の掌中にありしこと、今日なほアイスランドに見る如くにして、ローマの *paedagogus* (家庭教師) は奴隸であつた。中世にはその初め自主的家族協同體即ち僧院が學事の組織に當つて居たが、後には市立學校及び寺院附屬學校が生ずるに至つた。然るに國家的設備中に學事を合一し特殊化せしむることは實に近代の特徴である。それにも増して一層明らかに此の發展の有様を語りつゝあるものは防衛設備である。今日尚ほ孤立的經濟の段階にある多くの種族にあつては、各戸夫々に防禦を施してゐること、マレ一種族、ポリネシア族の牝上住居に於けるが如くであるが、中世初期に於ては莊園は城壁溝渠を以て固められてゐた。第二の經濟段階にては都市は何れも一個の城砦であつたが、第三の經濟時代に至つては國境に於ける二三の要塞が、以て全國を防禦するの用をなすに至つたのである。而して此處に最も較著なる事柄は、國境要塞制を初めて編み出せるルーヴォア¹⁾は重商主義のフランス國民經濟の開基者なりしコルベールと同時代の人であつたと云ふ其の事である。

而して更にそれに劣らず徹底的であるのは、吏員の經濟的地位が各段階毎に驗した變化である。役人が國家の委任に應じて給付すべき役務に對して知行を得、此の收益から己が物質的な欲望を満足させるといふのであるが、これは如何にも自主的的家内經濟の制度にはびつたりとよく合つてゐる。實にその役柄は此の知行と結び付いて物化されてゐるのであつて、その知行が興へられてゐるのは唯だ人が役人がるならばと望む場合に役人が其處に居る様にとの爲めなのである。都市經濟では吏員は手數料受領者であつて、彼の役務を要求する人がその一つ一つの給付に對して彼に支拂ひをすることは、恰かも市民がその仕事に對して手工業者に賃銀を拂ふが如く然りである。時代が國民經濟に入ると

1) Louvois

共に、役務地位は官職賃貸及び官職賣買の中間段階を超えて、公法的なる義務範圍と展開したのであり、此の義務範圍は國家權力の擔當者よりして各個人に轉嫁さるゝものであつて、これに對しては各個人には俸給の請求權があるのである。斯くて今や吏員は己が生涯の任務を公益に仕ふる事にありと爲す統體の受託者なのであつて、然かも此の奉仕に對しては、土地併びに彼れの働きによつて利益を蒙つてゐる人々からは全然解き放されて、彼れの生計の資を國家より受取つてゐるのである。

斯の種の比較は、なほ何時までも續けることが出来るであらう。人の新宅に引移らんとするに當りては先づ以て、豫め下片^{したかたは}附けを爲し置くの要あるものなるが如く、此の講演の對象に就きても亦、率直に物を考へる人は何人も以上の所論を以てして一切萬事を汲み盡し、各箇々の事柄がその所を得るに至れるものなりとは期待しないであらう。余自身すらかの古き二つの發展段階の現象範圍が尙ほ其の取扱ひ方の如何に不十分にして、其の經濟上の概念内容は尙ほ一倍正確なる確定を如何に必要とするものがあるかを最もよく心得てゐる。さりながら全體よりするも、又箇々の側面より見るも、發展の合法則性が明らかにされ得たといふことを以て、今回は満足することが出来るであらう。

此處にたゞ一つ、改めて強調し度いことがある。それは家内經濟——都市經濟——國民經濟なるものはその各構成分子が孤立して全然他の入るを許さざる如き段階を示すものに非ずと云ふことである。各時代には必ず經濟中の一つの種類が他に抽^ひでてゐるのであつて、夫が其の時代の人々の眼に常態として映じてゐるのである。今日にありても尙ほ、都市經濟の多數の要素の混入を見るべく、更にかの閉鎖的家内經濟の要素さへ殘存してゐるものが少くないのを見るのである。今日に於ても國民的貨財生産の極めて多くの部分が國民經濟的循環に加はらずして、その産出せられたる同一特殊經濟内にて消費されて居り、僅かに其餘の部分のみが一經濟より他經濟に移り行いて、其の經過を完結すること

となつてゐる。

此處に於てか、經濟學の使命を以て交易過程の本質及び關係を闡明するにありとなす學者は誤れる見解に立てるものにして、經濟形式及びその史的改變の敘述を以て満足する學者こそ正鵠を得たるものなりとなすが如きの觀を呈するが如く然りである。

何ぞ知らん、そは誠に由々しき大誤謬なることを。果して斯くの如くんば、百年以上に渉る科學的勞作を空しく抛擲し去ると異なるなく、經濟の現況を全然誤認してゐるのと何等擇ぶ所がない。今日に於ては如何に遠隔の地にある農家と雖も、國民經濟的交通の全體と無關係にして、僅か一俵の小麥をすら尙ほ且つ生産し得ぬ有様である。假令それが生産者の家の内に於て消費され終るものとなすも、生産手段の大部分（犁、大鎌、打禾機、人造肥料、輓獸等）は交換取引の路筋を経て手にし得たるものである。而已ならず、斯かる自家消費なるものも、其の行はるゝや、必ずそれが市場の状態よりして經濟的なりと思惟せらるゝ場合のみに限らるゝのである。故に僅かに一俵の小麥とは云へ、なほ國民經濟的取引の大規模にして精巧なる網に丈夫な綱もて結び付けられてゐるのであつて、吾人の經濟行爲及び經濟思考は凡べて斯くの如きを出でないのである。

かるが故に、黽勉なる材料蒐集の時代を経て、最近に至つては、近世交易經濟に關する各種の問題が熱心に再び取扱はるゝに至れることゝ、古き學說の改訂及び擴張が其の學說の生じたると同一方法によつて試みられ、それが唯だ前者よりも遙かに豊富なる材料を驅使して行はるゝことを異にするに過ぎざることとは、額に手して慶賀せざるを得ざる所である。蓋しかの複雑せる交易過程の起因に通曉せんと欲せば、絶縁的抽象と論理的演繹とを除きて他に適當なる研究方法の存せざるが故である。其れと相併んで問題となり得る唯一の歸納的統制的方法は、此處に關係ある問題の

大部分に對し到底精緻にして徹底的たるを得ざるものであつて、たゞ其の所によつては補充的であり又は制約的な補助手段として引用せらるゝに過ぎぬものである。

過去の經濟時代に對しても亦、課題の夫れと異なるを見ない。此の方面に於ては、先づ以て大いに事實の蒐集を行ひ、これを形態學的に記述するに努めざるべからざるは喋々を要せざるも、更に一步を進めて各種現象を、其の本質に於て誤なく概念的に確定し、論理的に分解し、その因果關係を探索し來らねばならぬのである。故にかの『古典經濟學』が現今の經濟に適用したると同一の方法を採つて突進せねばならぬであらう。かの古代の家産經濟²⁾の二三方面に就きては、斯かる方法が已にロートベルトウスの³⁾手により見事に行はれてゐるけれども、中世の經濟に對してはこれに類するものを今日までその一つをも發見することが出来ない。而して斯かる事を企て、よく其の功を收め得べきは、たゞ全然過去の經濟時代の實際的前提條件に没頭し、吾人の有するとは根本的に相違せる古人の經濟的思考に同感し得る學者を俟つて初めて期待し得る所である。かの過去の經濟狀態を半ば了解し、半ばは之れを合理主義的に捏造し來り、これを近代交易學說の範疇に絶えず反影せしむる者の如きに至りては、到底齒するの値すらない者である。

余は信ず、上述の如き方法を俟つて初めて、今日の經濟學說の爲めの經濟史的研究と、經濟史の爲めの經濟學說とがその効果を收め得べきものなりと。かくてのみ、經濟的發展及び國民經濟的現象の合法則性が同時に一層明らかに認識され得べきものなることを。

扱て此處で打ち樹てた經濟段階を相互に結び合はせて生ずる發展の線に就いては、時折りに、それが將來にまで繼續されないではないかといふ非難が浴びせられてゐる。かう云つた缺點、もしそれが缺點と云ふべくんば、此の發展の線には如何にもさう云ふ缺點はあるのではあるが、國民經濟に續く段階が如何なる姿を示すであらうかは、今日に於て何

1) klassische Nationalökonomie

2) Oikowirtschaft

3) Rodbertus

人かあつて之を知り得ようぞ。しかも未來の謎を解くといふことは科學の課題ではあり得ないのである。科學の取扱ひ得る所のものは現在あるものと、已に在つた所のものとである。然かも尙ほ、將來に生じ來らんとするものを今日已に知れりと誇稱する人々がドイツに居ない譯ではない。故に次いで來らんとする經濟段階の相貌が如何にあるべきかを知らんと欲する人達は斯かる人々を當てにしないでほならないのである。而して彼等の空想と本篇で樹てた段階組織とがどうもしつくりと合はうとしないからとて、それが此の段階組織に對して糠ほどの値打ちさへ持ち得ないではないか。

四 工業經營式の史的發展

世の學者は皆、國民經濟上併びに社會上の事物に就ては、あらゆるべからずて規範に關しては極めて確乎たる意見を持して居り、これは時にはありてふ事實に關してよりも、遙に確乎たる意見を有してゐることを珍らしとしないのである。然かも彼等の以て「斯くあらねばならぬ」と考へてゐる事柄は、現實には曾て存在せざりし空想の産物たる理想状態であることを全然要しないのである。そは寧ろ、近きにせよ、遠きにせよ、兎に角過去の事實範圍より引き出して來た觀念であつて、長き習慣によつて吾人にはそれが正常なるものといふ性格を取つてゐると考へられるに至つたものが甚だ多いのに接するのである。

余の見る所にして過なしとせば、吾人が以て手工業と呼び、所謂手工業者問題と稱するものに關して、今日多數の學者が同様の態度を取りつゝあるのを見るのである。即ち彼等は手工業がドイツに於て五百年以上も市民階級の生活を支配し來りしが爲め、これを規範的工業經營形式なりと見るの傾がある。諺に曰く、「手工業は黄金の地盤を有す」と。然れども實際の觀察は、此の手工業の有する地盤なるものが今日の値よりすれば最早決して黄金にては非ざるを教ゆるのである。此處に於てか、世人乃ち自問して曰く「如何にせば能くかの幸福なりし状態は再び將來せらるべきか。如何にせば手工業は『復活』せしめ得らるべきか」と。

然れども吾人は翻つて敢て問はんと欲す。「此の手工業を規範的經營形式なりと見、その實現の過去に存したりしものを恰かも理想なるかの如くに將來に追究するの權利、果してよく世人にあり得るや否や」と。

古き經濟學者は、手工業を工業生産の原始形式なりと述べてゐる。アダム・スミスは云ふ、「狩獵民もしくは遊牧民の間に、仲間の他の凡ての者よりも立ち優つて巧みに弓箭を作る者一人を生ずるとする。彼はそれを仲間の者と家畜又は野獸肉に交換すれど、遂には斯くなすことが自ら出獵するよりも遙に利益多きを悟るに至る。斯くて終には、弓箭を作

ることを主なる仕事となすに至り、此處に一種の弓箭鍛冶を生ずるのである」と。今此の史的構成に沿うて更らに二歩を進めれば、斯かる手工業者の原始の姿に次ぎて、やがて弟子を取る状態に移るべきは直に考へ得らるゝ所にして、更らに此の弟子にして其の技能を習得せる際には、其處に第二の弟子が取られるのであつて、此處に前の弟子はその職人となるのである。

其れより後の發達に就きては、如何に望むも最早附け加ふべき何物もない。今日手工業者とし云へば、それは秩序正しき段階序列を経て、弟子より職人に、職人より親方になつた小企業家を稱するのであつて、自己の勞力、自己の資本を働かせて地方的に局限された顧客範圍の爲めに生産し、勞働收益の總體が少しの減額をも蒙らずしてその手に歸する所の人なりと考へられる。公正てふことに適合する經濟制度に就いて望み得る一切の事は、必ずや斯かる正常なる手工業者階級の存在によつてその實現を期待し得るやうに思はれるのである。即ち漸進的社會向上、獨立、業績に相應する所得、これ等は皆一に懸つて手工業者階級の存在にある様に思はれてゐる。之に反し此の原始状態と遠ざかりある材料變形の經營形式なる家内工業及び工場制工業は、兎角に變態と見らるゝ傾向があり、それ等が條件となつて生み來る社會的・人的組織や所得分配は、經濟的公正の理念と背反してゐるものゝ如くに考へられてゐるのである。

近時の經濟學者として又斯かる通俗的の見方を脱する遠きもの殆んどこれ無しといふ有様である。彼等が認めてゐる三經營組織なる手工業、家内工業及び工場制工業を相對立せしめて之を論ずる場合には、彼等は殆んど嫌や應なしに手工業の根本施設を以て、他の二組織批判の規矩と考へつゝあるものにして、家内工業を目して、彼等の多數は極く最近まで、手工業の墮落退歩したるものに過ぎざるもの又は一個の過渡的形態なりとなし、工場制工業を以て機械時代に伴ふ必然的災禍なりと考へてゐるのである。斯かる因はれたる判斷に觸されてゐるもの實に當に夫れのみ止まらず、直

接觀察に供せられてゐる近代的經營方法の科學的認識すらも尙ほ其の厄を免るゝことが出来なかつた。

かるが故に、今此處に試みんとするが如き歴史的に築き上げんとする考察にありては、劈頭第一に或る一個の經濟分科の或る種の經營組織が、凡ての時代凡ての民族を通じて正常的な或る物を意味し得るといふ解釋より自己解放を行はなくてはならぬ。斯かる考察よりすれば、手工業なるものも、それは歴史の流に現はれ來る一現象たるに過ぎざるを知るべく、その成立、存立、繁榮は一定の經濟的前提に結び付けられてゐるのである。かくてそれは工業的貨財生産の本源的形式にても非ず、また一般に進化史上必須なる形式でもない。即ち一國の工業は、それが家内工業もしくは工場制工業の状態に達する以前、手工業で經營組織を経過したといふことが必ずでないことは、かの各民族が定住的農業を營むに至る以前に、必ず狩獵民若くは遊牧民たるべしとの議論の不條理なるが如く然りである。我が國に於ては、材料變形の他の經營形態が手工業に先立つて居たのであり、其の一部は實に今日に尙ほ遺存しつゝあるのであつて、歐洲諸國に於てさへ、尙ほ且つ然りである。

此等の原始的工業經營組織の進化史上に於ける偉大なる意義に就いては、今日まで餘りに注意が拂はれてゐなかつた。然かも何ぞ知らん、そは何千年を通じて諸民族の經濟生活を規定し、その社會制度に深き足跡を印し來りしものならんとは。纔かに工業史の比較的小部分のみが、即ち成文法中にそれを認識する典據を残してゐる部分のみが今日まで幾分手を着けられてゐるに過ぎない。然かも其の着手せられし部分とても、尙ほ未だ其の内的生命たる其の經營方法に觸るゝよりも遙かに多くその外形的制度にその研究が捧げられてゐたのである。近時に至り、長時間を期し且つ徹底せる科學的研究の行はるゝに至れる彼の中世の同業組合手工業に就いてすら、尙ほ且つ經營の側面への精細なる研究が行はれてゐることは殆んど絶無なりと稱すべく、此の方面に對してなほ廣く權威を保つてゐるものは、實に近世交易經濟の假

定及び概念によつて築き上げられる任意的合理主義的學說である。

我が國の『歴史派』經濟學とて、固よりギリシャ・ローマ時代併びに近世の諸民族の經濟史に關する豊富なる材料を蒐集しるるに相違なかるべけんも、古代並びに中世の諸民族の經濟が據つて立つてゐた各種の條件なるものは、他の一切の社會現象が複雑多岐なるが爲めに、今日の觀察者には之を明らかにする事が極めて困難なること、宛かも社會主義的理想國家が極めて活潑にして最も構想力に富める空想を以てしても、尙之を推斷するに難きと酷似せるものがある。經濟史に於ける極めて古き時代を理解せんとせば、今日存する原始未開民族を、今日英米の學者の取扱ひつゝある如き用意を以て、其の生活の經濟的側面を觀察して、初めてよく期待し得べきものなのである。然しながら我々は我が少壯なる經濟學徒を英米人の間に赴かしむる代りに、寧ろロシア人、ルーマニヤ人、もしくは南スラヴ族の間に修學旅行を企てしむべきであり、海外植民地の諸民族を其の地の原始的なる經濟方法及び法律觀念の特徴ある側面が尙ほ未だ歐洲商業の影響を受けて消え失せざる間に、如上の方針を以て研究するの優れるあるを推奨せんと欲す。

然るに僥倖なる哉、斯くの如き外國よりの影響が極めて深く本來の民族生活中に侵入し居れるは稀であり、よし侵さるゝありとするも、それは唯だ上流階級にのみ限られてゐるのを通則としてゐる。故に心なき旅行者が徒らに汽車に揺られて通過し去る東部及び北部ヨーロッパの廣い範圍に於ては、今日なほ其の地の住民の間に、極めて古き欲望満足の形式を認めることが出来るのであつて、その形式は近世交通の影響に依るも殆んど輕微なる變化をすら呈しなかつたのである。

斯の種の「落伍せる」民族が營める工業生産に就きて知り得たる所のものを、從來の工業史的研究の結果と合して、之を概觀的な綜合圖に纏め上げんとする企こそ、實に余が以下に試みんと欲するものであるが、其の爲めには進化の主

なる段階を確乎たる輪郭を有する畫圖に描き出さなくてはならぬ。人種學的個別觀察の錯綜せる多様と形態の豊饒との間より、一脈の導きの綱を求め來らんが爲めには、典型的のものを偶發的のものより甄別し、副的形式又は過渡現象に一顧をだも與へずして、材料變形の經營方法に變化を來し爲めに社會組織に本質的變化を齎らすに至れる經濟現象を喚起し來れる時をのみ、發展の一新斷節の始まれるものと見る事が絶對的に必要なのである。斯かる方法を探つて、吾人は遂に工業の五箇の主要なる經濟組織に到達することが出來た。今、其等を歴史的序列に従つて數ふれば、即ち、

- 一 家内仕事 (das Hauswerk [Hausfleiss])
- 二 賃仕事 (das Lohnwerk)
- 三 手工業 (das Handwerk)
- 四 問屋制度 (家内工業) (das Verlagsystem [Hausindustrie 等])
- 五 工場制工業 (die Fabrik)

〔一〕最も重要なものゝみを一般に了解され易い形式に纏め最初一八九二年に書いた此處に掲げた記述は、國家學辭書 (Handwörterbuch der Staatswissenschaften) 第三版、第四卷、八四七—八六〇頁に余が執筆せる「工業」(Gewerbe)の項にその補遺を見出すのである。其處には、又極めて必要な文獻も示して置いた。

劈頭に於て問題と爲るべきは、簡潔なる形式記述によつて此等の經營組織の特徴ある經濟的特質を明らかにすることであつて、其の全進化的社會史的射程は之れを唯だサセストするに止めるにある。而して其の間に存する缺陷を補ひ又は一經營方法より他のそれへの過渡を説明せんとすることは、これを個々の研究に委ね得ると思ふ。余の敘述が手工業に先立つ古き二個の經營形態の許に最も長く徬徊せざるべからざることゝなりゐるは、本講の性質上當然のことであり、